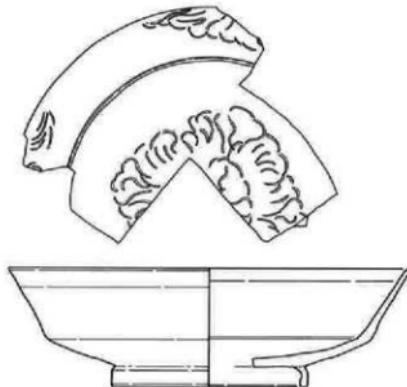


## 元総社蒼海遺跡群（8）

前橋都市計画事業元総社蒼海地区画整理事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書



1号落ち込み状遺構出土の緑釉陶器

2007. 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団





満吉区風景（西から）



元緒社舊海達跡群（8）出土遺物



元德化窑遗址出土青釉瓷片



元德化窑遗址出土青釉瓷片

## はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々とかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その悠々と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡に代表されるように遠い旧石器時代から現在まで人々のさまざまな生活が繰り広げられました。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中心地として栄えました。また、總社古墳群が築かれた總社・元總社地区には山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の律令中枢施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鍋をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東四名城の一つに数えられる駿河城が築かれました。

近代では、横浜港が開港されると、輸出の花形商品として生糸をもって一番乗りしたのが、前橋の糸商人でした。前橋藩は、藩をあげて蚕糸に力を注ぎ、我が国初の製糸の機械化に取り組みました。生糸により、横浜と前橋が結ばれ、文化交流が始まりました。このように本市は、まさに、歴史性豊かなまちです。

今回、報告書を上梓する元總社蒼海遺跡群(8)～(12)は古代上野国の中枢地域の調査であります。推定上野国府域に隣接することから多くの注目を集めています。今回の調査では、「国府のマチ」を形成する集落のほか、千鶴谷戸遺跡に代表される漏斗型耳飾りを出土した縄文晩期後半の住居跡、古代大溝の北側から検出された大型掘立柱建物跡1棟、烏羽遺跡の対岸から検出された縄文陶器群、また、中世の館跡など豊富な資料が発見されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、炎天下や寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成19年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 根岸 雅

## 例　　言

1. 本報告書は、前橋都市計画事業元總社資本地区調査事業に伴う元總社遺跡群(8)発掘調査報告書である。
2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所	群馬県前橋市元總社町1784-1ほか
発　　掘　　調　　査　　期　　間	平成18年5月15日～平成18年10月12日
整　　理　・　報　　告　　書　　作　　成　　期　　間	平成18年12月16日～平成19年3月22日
発　　掘　　・　整　　理　　担　　当　　者	近藤雅順・阿久澤真・(発掘調査係員)
4. 本書の原稿執筆・編集は近藤・阿久澤が行った。なお、縁釉陶器の観察およびまとめの作成にあたっては財團法人埋蔵文化財調査事業団の神谷住明氏の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

後藤進一・佐藤佳子・下境　弥・下境米治・関根その子・曾我　仁・内藤　旭・長山桜夜子・西山勝久・西山光彩・町田妙子・町田敏彦・峰岸あや子
6. 発掘調査で出土した遺物は、当発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

## 凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図に建設省同土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮・長野)、1:25,000地形図(前橋)、1:6,000前橋市現形図を使用した。
3. 本遺跡の略称は、IR A130-8である。
4. 道構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡	O…落ち込み状道構	W…溝跡	D…土坑
P…ピット	I…井戸跡	A…道路状道構	
5. 道構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

道構	全体図…1:200	…1:400				
住居跡・土坑・ピット・井戸跡	…1:60	溝跡…1:40	…1:60	…1:80	…1:120	…1:160
電平・断面図	…1:30					
6. 遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺物	土器…1/3	石製品…1/2	鐵器・鉄製品…1/2	…1/3	瓦…1/2	…1/6
----	--------	---------	------------	------	-------	------
7. 計測値については、( )は現存値、[ ]は復元値を表す。
8. セクション注記の記号は、締まり・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

◎…非常にあり、○…あり、△…ややあり、×…なし
なお、セクション注記と遺物観察表の色調について新版標準土色帳(小山・竹原1967)を基準とした。
9. スクリーントーンの使用は、次のとおりである。

道構平面図	粘	土…	燒	土…		
道構断面図	構	葉	面…			
遺物実測図	須	恵	器	断面…	灰釉陶器断面…	灰釉陶器表面…
	縁	付	着			
	縁	釉	面			
	縁	付	着		燒	付
	縁	付	着		付	着
	縁	付	着		付	着

10. 主な火山隕石等の略称と年代は次のとおりである。

As B (浅間B軽石:供給火山・浅間山、1108年)  
Hr-FP (榛名ニッ岳伊番保テフラ:供給火山・榛名山、6世紀中葉)  
Hr-FA (榛名ニッ岳渋川テフラ:供給火山・榛名山、6世紀初頭)  
As C (浅間C軽石:供給火山・浅間山、4世紀前半~中葉)

# 目 次

は じ め に.....	i
I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺 跡 の 立 地.....	1
2 歴 史 的 環 境.....	1
III 調査の方針と経過	
1 調 査 方 針.....	7
2 調 査 経 過.....	7
IV A 区	
1 基 本 層 序.....	10
2 遺構と遺物.....	11
V B • C 区	
1 基 本 層 序.....	54
2 遺構と遺物.....	55
VI ま と め.....	66

## 図 版

図版1 調査区遺景(西から)

- 2 元総社蒼海遺跡群(8)出土遺物
- 3 元総社蒼海遺跡群(8)出土綠釉陶器
- 4 緑釉陶器展開写真

- PL. 1 A区調査区全景 H-1・11号住居跡  
 2 H-2・3号住居跡  
 3 H-4・6・8・9・16号住居跡  
 4 H-10・19号住居跡、A区調査区中央部  
 5 II-17号住居跡  
 6 H-21・24・25・27号住居跡  
 7 H-27・32・33号住居跡、W-1号溝跡、北側溝集中部  
 8 B・C区調査区全景  
 II-1・2・9号住居跡  
 9 H-3～7号住居跡

- PL. 10 A区H-1～4・6・7号住居跡出土遺物  
 11 A区H-8・10～13・16号住居跡出土遺物  
 12 A区H-17・19・20・23～25・27号住居跡出土遺物  
 13 A区II-29・32・33・35・36号住居跡、W-9号溝跡出土遺物  
 14 A区W-5号溝跡、C区1号、B区4～6号住居跡出土遺物  
 15 A区H-7号、C区H-9号住居跡、土坑出土遺物、瓦  
 16 瓦

## 捕 図

Fig. 1 元総社蒼海遺跡群位置図

- 2 周辺遺跡図
- 3 元総社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図
- 4 元総社蒼海遺跡群(8) A区全体図
- 5 A区基本層序
- 6 H-1・2・5号住居跡
- 7 H-3号住居跡
- 8 H-4・6・15号住居跡
- 9 II-8・9・16・29号住居跡
- 10 H-7・10・11号住居跡
- 11 H-12～14・18・20号住居跡
- 12 H-17号住居跡
- 13 II-19・23・27・30号住居跡
- 14 H-21・22・24号住居跡
- 15 H-25・31号住居跡
- 16 H-32～37号住居跡
- 17 W-1号溝跡
- 18 W-2～8号溝跡、O-1号落ち込み状遺構
- 19 W-9～16号溝跡、D-1・3号土坑、P-1号ビット

Fig. 20 II-1～4・6号住居跡出土遺物

- 21 H-7・8・18号住居跡出土遺物
- 22 H-10～13号住居跡出土遺物
- 23 H-15～17・19～22号住居跡出土遺物
- 24 II-23～25・27・37号住居跡出土遺物
- 25 H-28・29・32・33・35号住居跡出土遺物
- 26 H-36号住居跡、O-1号落ち込み状遺構、W-2・5号溝跡出土遺物
- 27 緑釉陶器、W-9・11号溝跡出土遺物
- 28 鉄製品・石製品・瓦(1)
- 29 瓦(2)
- 30 元総社蒼海遺跡群(8) B・C区全体図
- 31 B・C区基本層序
- 32 II-1～3・9号住居跡
- 33 H-5・6号住居跡
- 34 H-4・7・8号住居跡
- 35 W-1～3号溝跡、D-1・3～5号土坑、I-1号井戸跡、P-1～4号ビット
- 36 II-1・4～9号住居跡出土遺物
- 37 鉄製品・瓦

## 表

Tab. 1 元総社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表

- 2 住居跡等一覧表(A区)
- 3 溝跡計測表(A区)
- 4 土坑・ビット・落ち込み状遺構計測表(A区)
- 5 土器観察表(A区)
- 6 緑釉陶器観察表(A区)
- 7 石製品観察表(A区)
- 8 鉄器・鉄製品観察表(A区)

Tab. 9 瓦観察表(A区)

- 10 住居跡一覧表(B・C区)
- 11 溝跡計測表(B・C区)
- 12 土坑・ビット・井戸跡計測表(B・C区)
- 13 土器観察表(B・C区)
- 14 鉄器・鉄製品観察表(B・C区)
- 15 瓦観察表(B・C区)

## I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元總社蒼海上地区画整理事業に伴い実施され、7年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年に亘って行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成18年4月19日付けで、前橋市長 高木政夫より前橋都市計画事業元總社蒼海上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 根岸 雅に対し、調査実施を協議し、調査団はこれを受諾した。平成18年5月1日、調査依頼者である前橋市長 高木政夫と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 根岸 雅との間で、本発掘調査の委託契約を締結し、5月15日に現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称「元總社蒼海遺跡群(8)」(遺跡コード:18A130-8)の「元總社蒼海遺跡群」は区画整理事業名を採用し、数字の「(8)」は過年に実施した調査と区別するために付したものである。

## II 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層(水成)から成り立っている。台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な岸で画されていて、台地の中央には利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。總社・元總社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高3m~5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、蒸畑を主とした畠地として利用してきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約2.5kmの地点、前橋市元總社町地内に所在している。南東へ約0.5kmの所に上野岡總社神社があり、西方約0.5kmには関越自動車道が南北に走っている。さらに、遺跡地の南側には国道17号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に走り、東側には市道大友・石倉線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畠が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

### 2 歴史的環境

本遺跡地周辺には、古墳時代後期から終末までの上野地域と中央政権との関連をうかがわせる總社古墳群と山王庵寺、古代の中心地であった上野国府、さらに、中世には長尾氏により国府の権割りを利用し築かれたとされる蒼海城があり、歴史的環境に優れている。周辺の埋蔵文化財発掘調査によって、これまで連錦と統いてきた歴史を物語る多くの新しい知見が集積されている。

縄文時代の遺跡としては、前期・中期の集落跡が検出された産業道路東・西遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間地

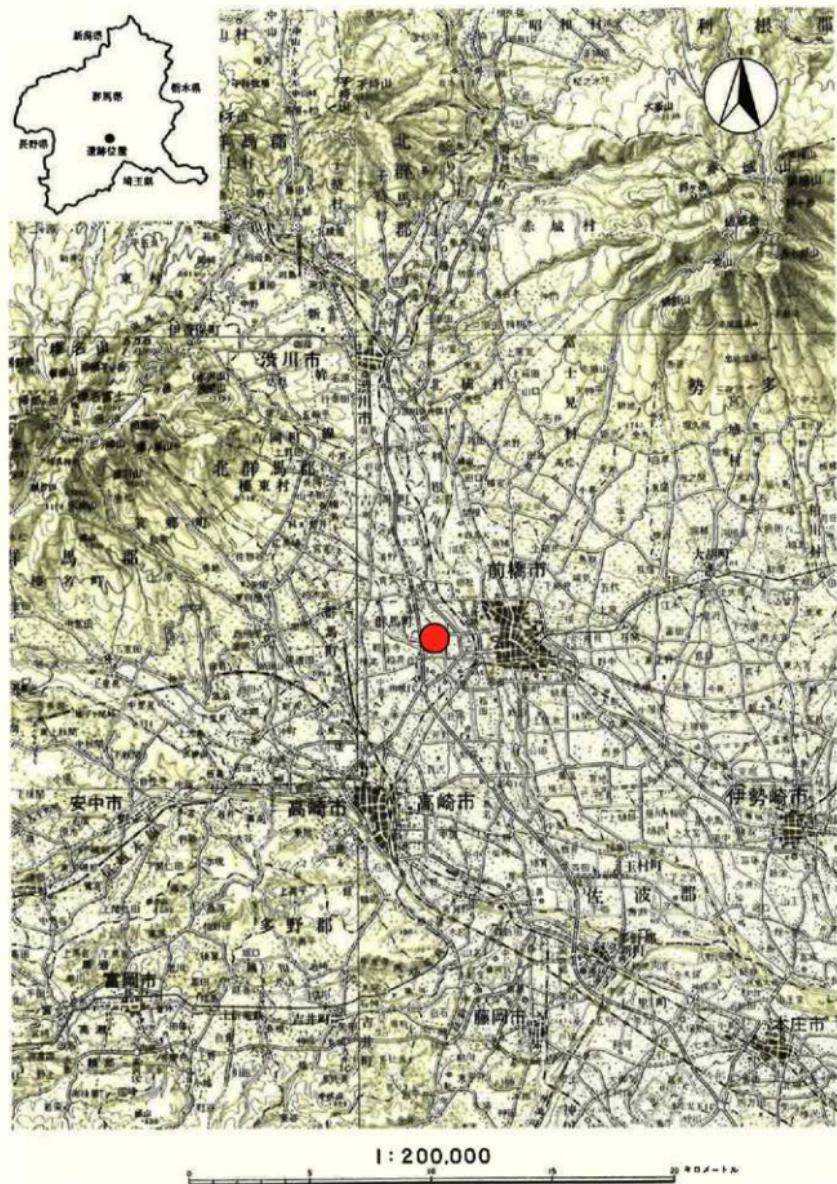


Fig. 1 元總社蒼海遺跡群位置図

域が筆頭に挙げられ、縄文文化を考える上で重要な資料といえる。

弥生時代の調査例は少ない。当時の稻作の様子を示す水田・集落跡等が検出された日高遺跡、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。

古墳時代の遺跡としては、まず木造跡のおもに北に広がる總社古墳群が挙げられる。總社古墳群を代表するものには、前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた横石塚である王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ石室をもつ二段に築造された前方後円墳の總社二子山古墳、横穴式石室をもつ方墳の愛宕山古墳、県内終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた方墳の宝塔山古墳・蛇穴山古墳がある。また、宝塔山古墳の南西500mには白鳳期の建立と考えられる山王廬寺跡(放光寺)がある。さらにこの守の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は、宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されている。これらのことから、この寺は上野地域を治めていた「上毛野氏」の氏守であり、この古墳群には「上毛野氏」一族が葬られているとも考えられている。これらから、この地が「車評」の中心地として、仏教文化が古墳文化と併存しながら機能していた様子が窺える。なお、平成18年度から5ヵ年計画で「山王廬寺範囲内容確認調査」が実施され、平成18年度では「講堂」の版築基壇や「回廊」の北東礎石が確認された。

奈良・平安時代に至ると、上野国府・国分僧寺・国分尼寺の建設と相まって、本地域は古代の政治的・経済的・文化的中心地としての様相を呈していく。律令制における国司の政治活動の拠点で地方を統治する機能をもつ国府は、元總社地区に置かれたとされる。

国府に関連する遺跡には、県下最大級の掘立柱建物跡が検出された元總社小学校校庭遺跡や、「國厨」「曹司」「國」「冦厨」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した元總社寺田遺跡、律令期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された元總社宅地遺跡がある。また、国府城の推定を可能にした大規模な東西方向の溝跡が検出された闇泉橋遺跡や元總社蒼海遺跡群(7)(9)(10)【(9)(10)は平成18年度調査実施】と南北方向の溝跡が検出された元總社明神遺跡の調査成果により、国府城の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官人の用いたと考えられる円面鏡、遡方(腰袋具)、綠釉陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代からは部分的ながら調査が進められるようになった。本格的な発掘調査は昭和55年12月から始まり、主要伽藍の礎石、楽壇、堀等が確認されている。さらに圓分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年に前橋市埋蔵文化財発掘調査で南辺の守域確認調査を行い、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。圓分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設工事による発掘調査が行われ、上野国分僧寺・尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物跡群が検出されている。

また、群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN=64° E方向の東山道(国府ルート)があることが推定されている。さらに、推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世に至り、永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海城は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。しかも、県下最初の城下町を形成したと考えられている。蒼海城の縛張りは国府と関係が深く、現在の本地域の主要道路はこの縛張りに沿って作られていると推測される。

このように歴史的に重要な役割を果たしてきた總社・元總社地区であるが、その中でも上野国府が所在したと推定される元總社地区は注目される地域の一つである。元總社蒼海上地区画整理事業に伴い、平成11年より継続的に本地域の発掘調査が行われていく。これにより、手つかず状態であった本地域の全容が明らかになっていくであろう。今後、この調査の進捗によって、上野国府や蒼海城が解明されていくことを期待する。

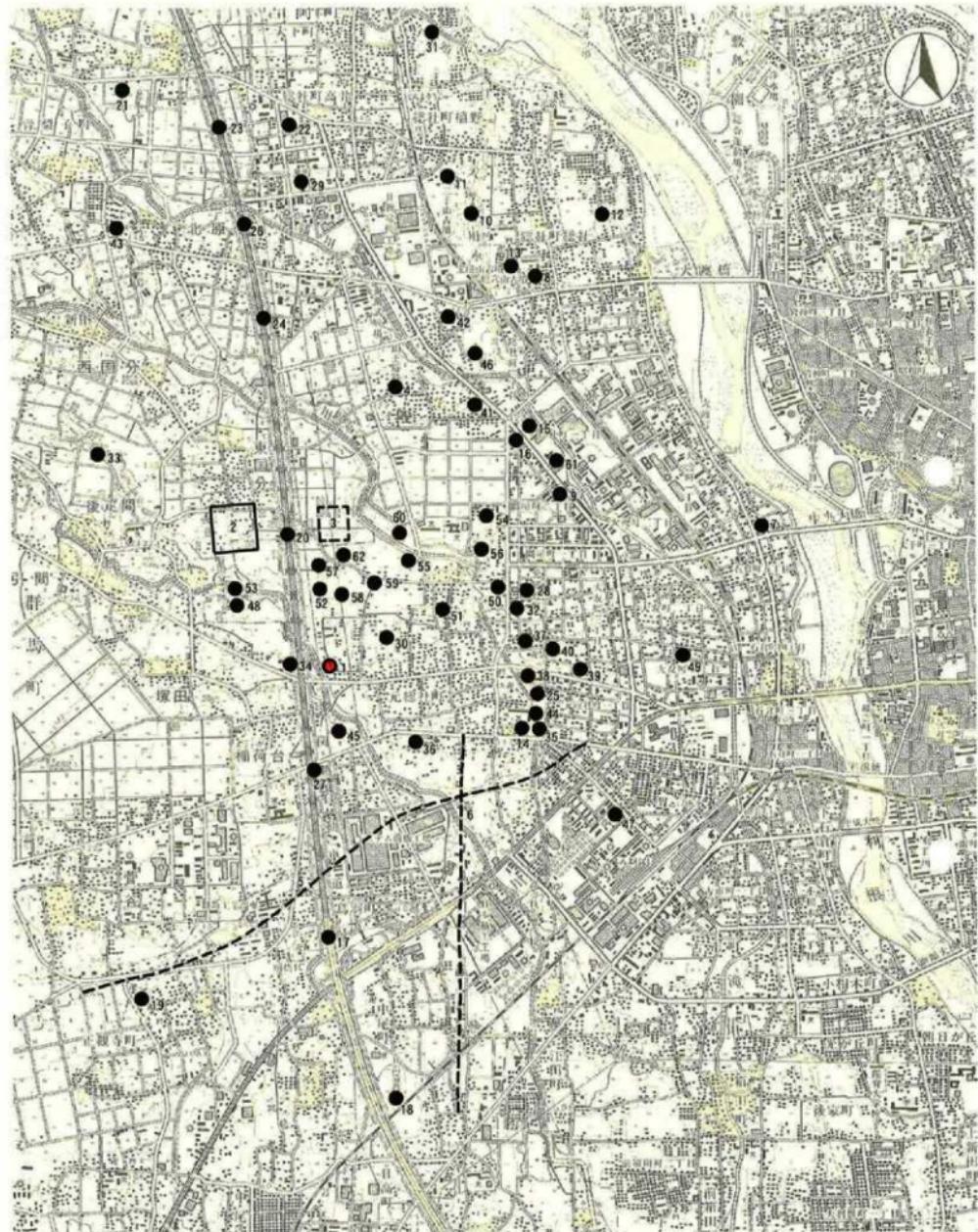


Fig. 2 周辺道路図

1:25,000

Tab. 1 元絶社薺海遺跡群周辺遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
1	元絶社薺海遺跡群（8）	2006	本遺跡
2	上野四分寺跡（県教委）	1980～88	奈良：金堂基壇・塔基壇
3	上野園分尼寺跡	(1999)	奈良：西南隅・東南隅塗瓦
4	山王廬寺跡	(1974)	古墳：塔心壁・根石
5	東山窓（推定）		
6	日高遺（推定）		
7	玉山古墳	1972	古墳：前方後円墳（6C中）
8	蛇穴山古墳	1975	古墳：方墳（8C初）
9	稻荷山古墳	1988	古墳：円墳（6C後半）
10	愛宕山古墳	1996	古墳：円墳（7C初）
11	鷲作二子山古墳	未調査	古墳：前方後円墳（6C末～7C初）
12	遠見山古墳	未調査	古墳：前方後円墳（5C後半）
13	宝塔山古墳	未調査	古墳（7C末）
14	元絶社小学校校庭遺跡	1962	平安：掘立柱建物跡・柱穴群・周溝跡
15	庄屋道路東遺跡	1966	銘文：住居跡
16	庄屋道路西遺跡		銘文：住居跡
17	中尾遺跡（事業団）	1976	奈良・平安：住居跡
18	日高遺跡（事業団）	1977	弥生：水田跡・方形周溝帯・住居跡・木製農耕具・平安：条里制水田跡
19	正觀寺遺跡I～IV（高崎山）	1979～81	弥生：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
20	上野園分信跡・尼寺中間地城（事業団）	1980～83	銘文：屋外埋甕・配石造構・弥生：住居跡・方形周溝帯・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：掘立柱建物跡・溝状造構・道路状造構
21	清里南部遺跡群・Ⅲ	1980	銘文：ガット・奈良・平安：住居跡・溝跡
22	中島遺跡	1980	奈良・平安：住居跡
23	下東西遺跡（事業団）	1980～84	銘文：屋外埋甕・弥生：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・柱列・中世：住居跡・溝跡
24	国分境遺跡（事業団）	1990	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	国分境II遺跡	1991	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	国分境III遺跡（群馬町）	1991	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・島跡・中世：土塙墓
25	元絶社明神道跡I～XIII	1982～96	古墳：住居跡・水田跡・堀跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・火葬人形・中世：住居跡・溝跡・天日系碗
26	北原道跡（群馬町）	1982	銘文：土坑・集石造構・古墳：本堂跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡
27	烏羽遺跡（事業団）	1978～83	古墳：住居跡・鐵冶爐跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡（杵鍛跡）
28	開泉鍛冶遺跡	1983	奈良・平安：溝跡（上幅6.5～7m、下幅3.24m、深さ2m）
29	木本造跡・II遺跡	1983, 88	奈良・平安：住居跡・溝跡
30	草作遺跡	1984	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：井戸跡
31	桜ヶ丘遺跡		弥生：住居跡
	元絶社桜ヶ丘遺跡・II遺跡	1985, 87	奈良・平安：住居跡
32	開泉鍛冶遺跡	1985	古墳：住居跡・奈良・平安：溝跡
33	後足間道跡I～III（群馬町）	1985～87	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：道路状造構
34	原山村東遺跡（群馬町）	1985	平安：住居跡
35	寺田遺跡	1986	平安：溝跡・木製品
36	天神遺跡・II遺跡	1986, 88	奈良・平安：住居跡
37	尾敷遺跡・II遺跡	1986, 95	古墳：住居跡・平安：住居跡・中世：溝跡・石室遺構
38	大友原散II・III遺跡	1987	古墳：住居跡・平安：住居跡・溝跡・地下式土坑
39	環越遺跡	1987	奈良・平安：住居跡・溝跡
40	鬼越II遺跡	1988	平安：住居跡
41	昌楽寺炮門遺跡・II遺跡	1988	奈良・平安：住居跡
42	村東遺跡	1988	古墳：住居跡・溝跡・奈良・平安：住居跡・中世：掘跡

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
43	熊野谷遺跡	1988	縄文：住居跡、平安：住居跡・溝跡
	熊野谷II・III遺跡	1989	平安：住居跡
44	元總社寺跡遺跡I～III（事業団）	1988～91	古墳：水田跡・溝跡、奈良・平安：住居跡・溝跡・人形・蓋車・墨書き器・中世：溝跡
45	弥勒遺跡・II遺跡	1989、95	古墳：住居跡、平安：住居跡
46	大聖寺遺跡I～VI	1992～2000	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：掘立柱建物跡・地下式土坑・溝跡
47	元總社稻葉遺跡	1993	縄文：土坑、平安：住居跡・瓦塔
48	上野四分寺参道遺跡	1996	古墳：住居跡・平安：住居跡
49	大友宅地添遺跡	1998	平安：水田跡
50	總社開泉明神北遺跡	1999	古原：墓跡・水田跡・溝跡・中世：溝跡
	總社開泉明神北II遺跡	2001	古原：住居跡・溝跡・平安：住居跡・溝跡
	總社開泉明神北V遺跡	2004	古原：水田跡・奈良・平安：住居跡
	元總社西海遺跡群（7）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡
51	元總社宅地跡跡I～23トレシチ	2000	古墳：住居跡・平安：住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶場跡・溝跡・道路状遺構・中世：溝跡・近世：住居跡・五輪塔・腕輪
52	元總社小見遺跡	2000	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・道路状遺構
53	元總社西川遺跡（事業団）	2000	古墳：住居跡・墓跡・奈良・平安：住居跡・溝跡
54	總社中福荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：墓跡・近世：溝跡
	總社中福荷塚大道西II遺跡	2001	古原：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・近世：墓跡
55	元總社小見内III遺跡	2001	古原：住居跡・溝跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・中世：掘立柱建物跡・溝跡
	元總社小見内VI遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：井戸跡
56	總社中福荷塚大道西III遺跡	2002	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・古跡・溝跡
	總社開泉明神北山遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	總社中福荷塚大道西IV遺跡	2003	古原：墓跡・中世：墓跡
57	元總社小見II遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：溝跡・道路状遺構
	元總社小見IV遺跡	2003	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
	元總社小見V遺跡	2003	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：掘立柱建物跡
	元總社小見VI遺跡	2004	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	元總社小見VII遺跡	2004	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	元總社西海遺跡群（4）	2005	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
58	元總社小見III遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：溝跡・道路状遺構
	元總社草作V遺跡	2002	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
59	元總社小見内IV遺跡	2002	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・中世：土壤基・掘立柱建物跡・溝跡
	元總社小見内VIII遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：竪穴状遺構
	元總社小見内IX遺跡	2004	奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
	元總社小見内X遺跡	2004	古原：住居跡・奈良・平安：住居跡・古跡・粘土探査坑・金片・金粒・中世：溝跡・土壙墓
	元總社西海遺跡群（2）、（6）	2005	古原：住居跡・奈良・平安：住居跡・井戸跡・鍛冶工房跡・中世：溝跡
60	元總社北川遺跡（事業団）	2002～04	古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡・墓跡・中・近世：掘立柱建物跡・水田跡・火葬墓
61	稻荷塚遺跡遺跡（事業団）	2003	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・竪穴状材探査痕・升戸跡
62	元總社小見内VII遺跡	2003	縄文：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：墓跡・溝跡
	元總社菅谷遺跡群（1）、（5）	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：溝跡・土壙墓

\*調査年度の欄の（ ）は調査開始年度を表す。

\*遺跡名の欄の（事業団）は側面馬鹿塚町文化財調査事業団を表す。

### III 調査の方針と経過

#### 1 調査方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社斎海土地区画整理事業の道路予定地で、調査面積は約1,347m<sup>2</sup>である。グリッド座標については、国際座標（日本測地系）X = +44,000・Y = -72,000を基点（X 0・Y 0）とする4mピッチのものを使用し、西から東へX34、X35、X36…、北から南へY116、Y117、Y118…となる。グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

公共座標については、以下のとおりである。

- ・元総社斎海遺跡群 (8) 測点 X40・Y220

旧日本測地系	X = +43120.000	Y = -72040.000
--------	----------------	----------------

世界測地系	X = +43474.916	Y = 72331.758
-------	----------------	---------------

検出が予想される主な遺構は奈良・平安期の住居跡および古代の溝等であり、調査は、表土掘削・遺構確認・方眼杭等設置・遺構掘り下げ・遺構精査・測量・全景写真撮影の順で行うこととした。このうちの遺構確認については、基本的にAs-C・Hr FP軽石とAs-B軽石が混入する上層を手がかりにした。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20、住居跡カマドは1/10の船尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、遺物台帳に各種記録をしながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

#### 2 調査経過

本遺跡の発掘調査は、平成18年5月1日に委託業務契約を締結、5月15日より現地調査を開始した。調査地が3ヵ所に分かれているため、便宜上、西からA～C区としA区より調査を行った。5月15日から22日にかけて表土掘削を行い、それと平行して鋤簾による遺構確認を行った。A区は畑のため耕作土と遺構面の土を分ける必要があり、表土掘削前に時間を要した。5月23日に方眼杭打ちとベンチマークの設置を行い、その後の遺構掘り下げ・精査開始に及んだ。調査区中央部分は、高い密度で遺構が検出されたうえ、覆土の粘性が強く、乾くと非常に硬くなるので調査に時間を要した。精査の結果、竪穴住居跡37軒、溝跡16条、土坑5基が検出された。

A区と平行して隣接するB・C区では7月11、12日に表土掘削、7月13日に方眼杭打ちを行い、その後の遺構掘り下げ・成果開始に及んだ。雨の日が多くたが、水はけのよい土のおかげで順調に調査が進んだ。精査の結果、竪穴住居跡9軒、溝跡3条、土坑6基が検出された。また、7月12日～14日には、中学生の農場体験学習を行った。

8月10日にラジコンヘリによる調査区全景空中撮影を行った。8月11日から遺構構築状況等の調査を行い、8月31日から9月4日にかけて埋め戻しを行った。その後A区の一部に駐車場として使用している部分があつたため、10月7日から10月11日にかけて調査し、10月12日に埋め戻しを行い、現場での作業は終了となった。

12月16日より文化財保護課に戻り、出土遺物・図面・写真等の整理作業および報告書作成にあたり、翌年3月22日までにすべての作業を終了した。

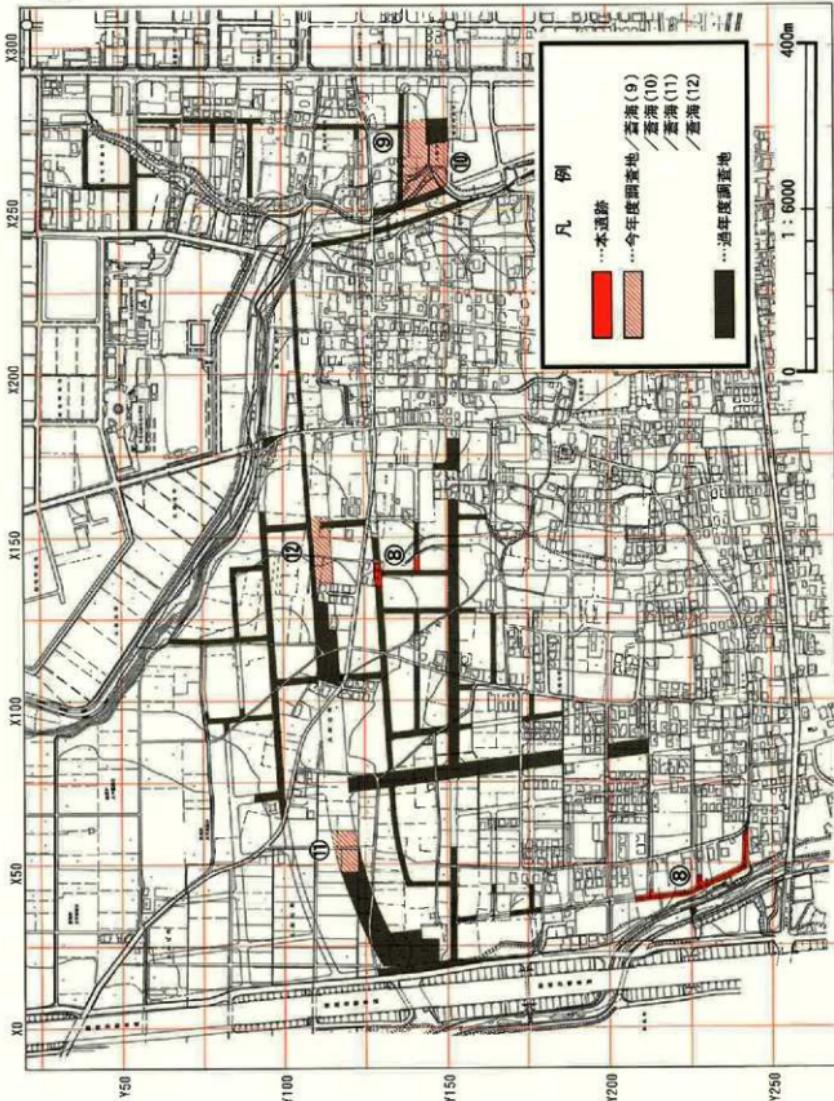


Fig. 3 元総社蒜浦遺跡群位置図とグリッド設定図

IV A 区



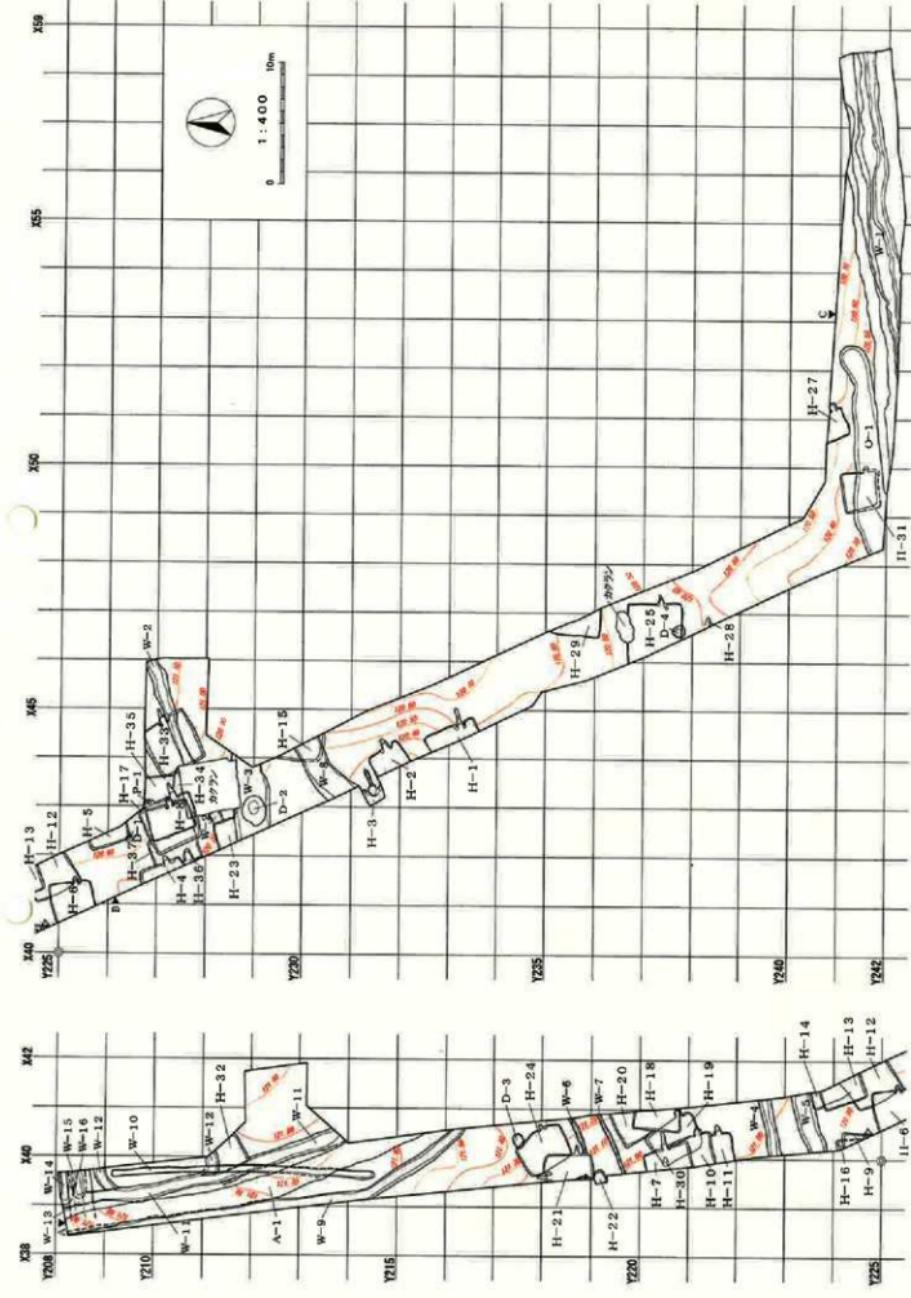


Fig. 4 元続朴黃海遺跡群(8) A区全体図

## 1 基本層序

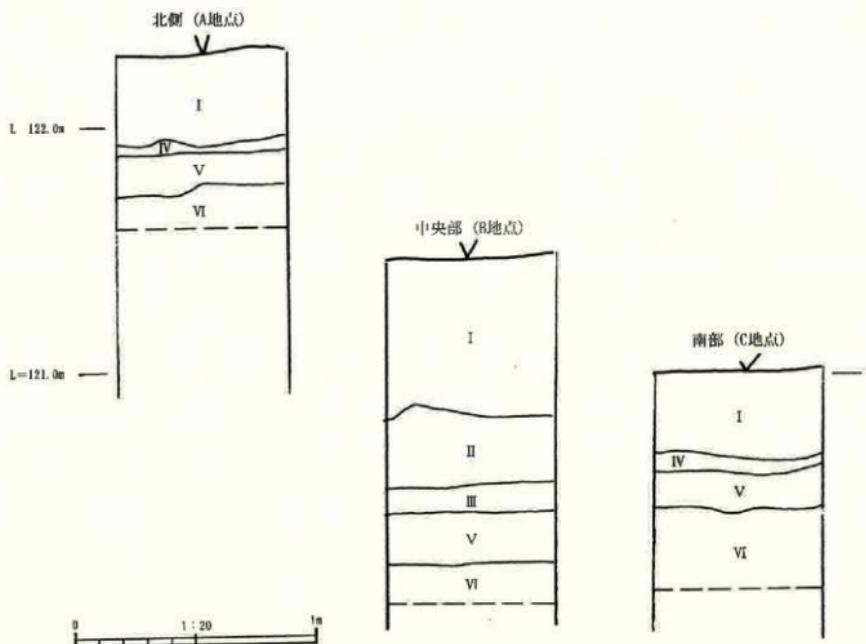


Fig. 5 A区基本層序

本遺跡A区の北側、中央部、南側の地層の堆積は上記の通りである。

遺跡内の微地形は北から南に向かって次第に低くなる。奈良・平安時代の遺構構築面はIII層であるが、北側と南側はIII層が存在しないのでIV層及びV層まで掘り込んで構築されている。なおA区は北側・南側と中央部では色調が異なるので、それぞれに記す。

(北側・南側)

I層 現耕作土

As-B 混土層

(中央部)

I層 現耕作土

II層 灰黄褐色 粗 (10YR4/2)

締まり○ 黏性△

III層 暗褐色 細 (10YR3/3)

締まり○ 黏性○

VI層 暗褐色 微 (10YR4/3)

As-C 混土層

締まり○ 黏性○

V層 にぶい黄褐色 細 (10YR5/3)

純社砂層の漸移層

V層 褐色 細 (10YR4/4)

締まり○ 黏性○

締まり○ 黏性○

VI層 暗褐色 微 (10YR4/3)

純社砂層

VI層 明黄褐色 細 (2.5Y8/8)

締まり○ 黏性○

## 2 遺構と遺物

### (1) 壁穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 6・20, PL. 1・10)

位置 X44・45、Y232・233グリッド 主軸方向 N 66°-E 規模 東西(1.49)m、南北(4.51)m、壁現高35.6cm。面積 (6.23)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦で堅緻な貼り床。南壁に口徑24.3cm、深さ12.5cmの土師甕の埋設土器あり。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N 73°-E。全長180cm、最大幅106cm、焚口部幅46cm。構築材に粘土、凝灰岩を用いる。出土遺物 繩文土器1点、土師器89点、須恵器9点、石類1点。そのうち环1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig. 6・20, PL. 2・10)

位置 X43・44、Y231・232グリッド 主軸方向 N-53°-E 規模 東西(3.10)m、南北(2.26)m、壁現高21.0cm。面積 (6.13)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦で堅緻な貼り床。竈 東壁中央に位置する。主軸方向N-60° E。全長108cm、最大幅108cm、焚口部幅44cm。構築材に粘土、凝灰岩を用いる。貯藏穴 長径72cm、短径54cm、深さ22cmの梢円形。出土遺物 土師器43点、須恵器6点、石類1点。そのうち环2点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig. 7・20, PL. 2・10)

位置 X43、Y231グリッド 主軸方向 N-74°-E 規模 東西(0.96)m、南北(1.15)m、壁現高33.0cm。面積 (3.15)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦な床。竈 東壁に位置する。主軸方向N-66°-E。全長286cm、最大幅166cm、焚口部幅84cm。構築材に粘土、凝灰岩、土師甕を用いる。出土遺物 土師器232点、須恵器7点、石類1点。そのうち高台碗1点、甕2点を図示。備考 時期は覆土や山上遺物から8世紀前葉から中葉と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig. 8・20, PL. 3・10)

位置 X41、Y226・227グリッド 主軸方向 N-69°-E 規模 東西(1.12)m、南北(3.87)m、壁現高34.0cm。面積 (3.59)m<sup>2</sup> 床面 平坦で堅緻な貼り床。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-70°-E。全長86cm、最大幅66cm、焚口部幅40cm。構築材に粘土、凝灰岩を用いる。ピット P1 長径38cm、短径30cm、深さ11cmの円形。重複 H-36、37と重複しており、新旧関係はH-36、37→木造構の順である。出土遺物 土師器203点、須恵器135点、灰釉陶器1点、瓦5点、石類1点、鉄類2点。そのうち高台碗1点、甕2点、鉄類1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から10世紀前葉と考えられる。

H-5号住居跡 (Fig. 6)

位置 X42、Y225・226グリッド 主軸方向 N-71°-E 規模 東西(1.80)m、南北(3.54)m、壁現高39.0cm。面積 (3.64)m<sup>2</sup> 床面 平坦で堅緻な貼り床。竈 不明。出土遺物 繩文土器1点、土師器34点、須恵器42点、瓦2点、鉄類1点。備考 時期は覆土から上限はHr FP 低下以降、下限はAs-B 低下以前と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig. 8・20, PL. 3・10)

位置 X40・41、Y224・225グリッド 主軸方向 N-82°-E 規模 東西(3.26)m、南北(3.70)m、壁現高26.0cm。面積 (13.14)m<sup>2</sup> 床面 堅緻な床面で部分的に落ち込む。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-81°

・E、全長70cm、最大幅77cm、焚口部幅32cm。構築材には粘土を用いる。 重複 H-12と重複しており、新旧関係はH-12→本造構。 出土遺物 繩文土器4点、土師器385点、須恵器288点、灰釉陶器6点、瓦14点、石類1点、鉄類1点。そのうち壺1点、高台碗1点、甕1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

#### H-7号住居跡 (Fig.10・21、PL.10)

位置 X39・40、Y220・221グリッド 主軸方向 N-71°-E 規模 東西(2.28)m、南北(4.00)m、壁現高36.0cm。 面積 (7.04)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ堅緻な貼り床。 電 東壁中央に位置する。主軸方向N-77°-E。全長162cm、最大幅86cm、焚口部幅36cm。構築材には凝灰岩・土師窯・粘土を用いる。 重複 H-10、19、30と重複しており、新旧関係はH-10→H-19→H-10→本造構。 出土遺物 繩文土器4点、土師器398点、須恵器75点、石類3点。そのうち甕3点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-8号住居跡 (Fig.9・21・27、PL.3・11)

位置 X42・43、Y226・227グリッド 主軸方向 N-71°-E 規模 東西2.74m、南北3.72m、壁現高6.0cm。 面積 9.25m<sup>2</sup> 床面 ほぼ堅緻な平坦な床。 電 東壁中央寄りに位置する。主軸方向N-72°-E。全長98cm、最大幅89cm、焚口部幅28cm。構築材には粘土を用いる。 重複 H-17と重複しており、新旧関係はH-17→本造構。 出土遺物 繩文土器6点、土師器1,161点、須恵器764点、灰釉陶器17点、綠釉陶器2点、瓦21点、石類7点、鉄類4点。そのうち壺1点、高台碗3点、甕2点、羽釜1点、綠釉陶器1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から10世紀前葉から中葉と考えられる。

#### H-9号住居跡 (Fig.9、PL.3)

位置 X40、Y224グリッド 主軸方向 N-93°-E 規模 東西(1.32)m、南北(2.54)m、壁現高21.0cm。 面積 (1.58)m<sup>2</sup> 床面 堅緻な貼り床。 電 不明。 重複 H-16と重複しており、新旧関係はH-16→本造構。 出土遺物 繩文土器1点、土師器58点、須恵器29点、灰釉陶器2点、瓦2点。 備考 時期は覆土と重複関係からHr-FP降下以降から9世紀代と考えられる。

#### H-10号住居跡 (Fig.10・22、PL.1・11)

位置 X39・40、Y220・221グリッド 主軸方向 N-74°-E 規模 東西(2.72)m、南北(3.55)m、壁現高39.0cm。 面積 (5.49)m<sup>2</sup> 床面 堅緻な床。 電 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-78°-E。全長90cm、最大幅84cm、焚口部幅47cm。構築材には粘土を用いる。 重複 H-7、11、19と重複しており、新旧関係はH-11→H-19→本造構・H-7。 出土遺物 土師器248点、須恵器68点、瓦2点、石類2点。そのうち甕1点、壺1点、高台碗1点、甕2点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-11号住居跡 (Fig.10・22、PL.1・11)

位置 X39・40、Y221グリッド 主軸方向 N-83°-E 規模 東西[2.40]m、南北[1.96]m、壁現高24.0cm。 面積 (4.33)m<sup>2</sup> 床面 地山を床としている。 電 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-69°-E。全長83cm、最大幅67cm、焚口部幅38cm。構築材には粘土を用いる。 重複 H-10と重複しており、新旧関係は本造構→H-10。 出土遺物 繩文土器2点、土師器106点、須恵器37点。そのうち壺1点、高台碗1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から8世紀後葉から9世紀初頭と考えられる。

#### H-12号住居跡 (Fig.11・22、PL.11)

位置 X41、Y224・225グリッド 主軸方向 N 58° E 規模 東西(3.16)m、南北(4.18)m、壁現高41.0cm。面積 (11.65)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 窓 不明。 ピット P 1 長径38.0cm、短径54.0cm、深さ15.5cmの円形。 重複 H-6、13と重複しており、新旧関係は本遺構→H-6、13。 出土遺物 繩文土器1点、土師器144点、須恵器66点、灰釉陶器2点、瓦2点、石類1点。そのうち壊3点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-13号住居跡 (Fig.11・22、PL.11)

位置 X41、Y223・224グリッド 主軸方向 N 71° E 規模 東西(2.10)m、南北(3.80)m、壁現高40.0cm。面積 (6.73)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 窓 不明。 ピット P 1 長径90.0cm、短径88.0cm、深さ16.5cmの円形。 P 2 長径52.0cm、短径49.0cm、深さ17.0cmの円形。 重複 H-12、14と重複しており、新旧関係はH-14→H-12・本遺構。 出土遺物 土師器371点、須恵器222点、瓦14点、石類1点、鉄類5点。そのうち壊2点、高台機1点、窓1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

#### H-14号住居跡 (Fig.11)

位置 X41、Y223・224グリッド 主軸方向 N-69°-E 規模 東西[1.50]m、南北[3.45]m、壁現高40.0cm。面積 (2.70)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 窓 不明。 重複 II-13と重複しており、新旧関係は本遺構→H-13。出土遺物 土師器25点、須恵器15点、瓦2点。 備考 時期は覆土および重複関係から9世紀中葉と考えられる。

#### H-15号住居跡 (Fig. 8・23)

位置 X43・44、Y229・230グリッド 主軸方向 N-87°-E 規模 東西(2.36)m、南北(4.20)m、壁現高48.0cm。面積 (4.66)m<sup>2</sup> 床面 堅敏な貼り床。 窓 不明。 ピット P 1 長径44.0cm、短径(15.0cm)、深さ14.0cmの楕円形。 出土遺物 繩文土器3点、土師器418点、須恵器32点、石類3点。そのうち窓2点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から8世紀前葉から中葉と考えられる。

#### H-16号住居跡 (Fig. 9・23・PL. 3・11)

位置 X40、Y224グリッド 主軸方向 N-87°-E 規模 東西(0.94)m、南北[2.48]m、壁現高63.0cm。面積 (1.31)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 窓 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-80°-E。全長134cm、最大幅100cm。焚口部幅45cm。構築材には粘土を用いる。 重複 H-9と重複しており、新旧関係は本遺構→H-9。出土遺物 土師器2点、須恵器4点、瓦2点。そのうち壊3点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-17号住居跡 (Fig.12・23・27・29、PL. 5・12・16)

位置 X31・32、Y226・227グリッド 主軸方向 N-67°-E 規模 東西4.10m、南北4.52m、壁現高44.0cm。面積 17.81m<sup>2</sup> 床面 堅敏な貼り床。 窓 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-76°-E。全長152cm、最大幅99cm。焚口部幅48cm。構築材には凝灰岩・瓦・粘土を用いる。 重複 H-8、34、35、37と重複しており、新旧関係はH-34、35、37→本遺構→II-8。 出土遺物 繩文土器5点、土師器794点、須恵器353点、灰釉陶器3点、綠釉陶器1点、瓦53点、石類6点、鉄類3点。そのうち壊1点、高台機1点、窓2点、綠釉陶器1点、瓦7点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

#### H-18号住居跡 (Fig.11)

位置 X40・41、Y219・220グリッド 主軸方向 N-94°-E 規模 東西(2.02)m、南北(3.96)m、壁現高42.0cm。面積 (6.43)m<sup>2</sup> 床面 壓緻な貼り床。 龕 不明。 重複 II-19、20と重複しており、新旧関係はH-19→H-20→本遺構。 出土遺物 繩文土器2点、土師器69点、須恵器51点、瓦1点、石類1点。そのうち灰陶器高台椀1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀代と考えられる。

#### H-19号住居跡 (Fig.13・23・29、PL. 4・12)

位置 X39~41、Y220・221グリッド 主軸方向 N-61°-E 規模 東西(3.14)m、南北(4.46)m、壁現高43.0cm。面積 (14.58)m<sup>2</sup> 床面 壓緻な貼り床。 龕 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-68°-E。全長69cm、最大幅104cm、焚口部幅40cm。構築材には粘土を用いる。 貯藏穴 長径40.0cm、短径38.0cm、深さ22cmの円形。重複 H-7、10、18、20、30と重複しており、新旧関係はH-30→本遺構→H-7、10、18→II-20。 出土遺物 繩文土器7点、土師器193点、須恵器49点、瓦2点。そのうち壺3点、瓦1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀前葉と考えられる。

#### H-20号住居跡 (Fig.11・23、PL.12)

位置 X40、Y219-220グリッド 主軸方向 N-59°-E 規模 東西[3.17]m、南北[2.13]m、壁現高33.0cm。面積 (4.89)m<sup>2</sup> 床面 壓緻な貼り床。 龕 不明。 重複 H-18、19と重複しており、新旧関係はII-19→本遺構→H-18。 出土遺物 土師器20点、須恵器29点、瓦1点。そのうち高台椀1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀代と考えられる。

#### H-21号住居跡 (Fig.14・23、PL. 6)

位置 X39・40、Y217~219グリッド 主軸方向 N-88°-E 規模 東西(2.20)m、南北(4.10)m、壁現高41.0cm。面積 (8.15)m<sup>2</sup> 床面 平坦な貼り床。 龕 北壁中央に位置する。主軸方向 N-4°-W。全長120cm、最大幅77cm、焚口部幅42cm。構築材には粘土、凝灰岩を用いる。 旧龕 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-90°-E。全長96cm、最大幅68cm、焚口部幅26cm。構築材には粘土を用いる。 ピット P 3 長径31.0cm 短径24.0cm 深さ60.5cmの円形。P 4 長径40.0cm 短径29.0cm 深さ51.0cmの円形。P 6 長径32.0cm 短径30.0cm 深さ49.5cmの円形。P 7 長径32.0cm 短径26.0cm 深さ53.5cmの円形。 重複 H-22、24と重複しており、新旧関係は本遺構→H-21、24。 出土遺物 土師器81点、須恵器15点、瓦1点。そのうち壺1点、甕1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

#### H-22号住居跡 (Fig.14・23)

位置 X39、Y218・219グリッド 主軸方向 N-71°-E 規模 東西[1.12]m、南北[2.50]m、壁現高49.0cm。面積 (1.42)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 龕 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-58°-E。全長68cm、最大幅90cm、焚口部幅36cm。構築材には粘土を用いる。 貯藏穴 長径54.0cm、短径36.0cm、深さ22.0cmの方形。 重複 H-21と重複しており、新旧関係はH-21→本遺構。 出土遺物 土師器26点、須恵器7点。そのうち甕1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀代かと考えられる。

#### H-23号住居跡 (Fig.13・24)

位置 X42、Y228・229グリッド 主軸方向 N-74°-E 規模 東西(2.26)m、南北(3.86)m、壁現高36.0cm。面積 (6.74)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床。 龕 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-70°-E。全長63cm、最大幅

66cm、焚口部幅38cm。構築材には粘土を用いる。重複W-2、3と重複しており、新旧関係は本遺構→W-2→W-3。出土遺物 繩文土器9点、土師器139点、須恵器89点、灰釉陶器1点、瓦3点、石類3点、鉄類1点。そのうち壺1点、高台椀1点、高台皿1点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-24号住居跡 (Fig.14・24・28、PL. 6・12)

位置 X39・40、Y217・218グリッド 主軸方向 N-62°-E 規模 東西3.32m、南北4.24m、壁現高25cm。面積 12.39m<sup>2</sup> 床面 平坦でやや堅緻な貼り床。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-66°-E。全長57cm、最大幅90cm、焚口部幅28cm。構築材には瓦・粘土を用いる。重複H-21と重複しており、新旧関係はH-21→本遺構。出土遺物 繩文土器2点、土師器32点、須恵器51点、灰釉陶器1点、瓦11点、鉄類1点。そのうち壺1点、高台椀1点、高台皿1点、瓦2点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉から後葉と考えられる。

#### H-25号住居跡 (Fig.15・24・27、PL. 6・12)

位置 X45-47、Y236-237グリッド 主軸方向 N-88°-E 規模 東西(5.02)m、南北(4.66)m、壁現高16cm。面積 (18.60)m<sup>2</sup> 床面 平坦で一部堅緻な貼り床。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-88°-E。全長113cm、最大幅80cm、焚口部幅33cm。構築材には凝灰岩・瓦・粘土を用いる。貯蔵穴 長径68.0cm、短径76.0cm、深さ80.0cmの横円形。出土遺物 繩文土器1点、土師器313点、須恵器309点、灰釉陶器3点、綠釉陶器1点、瓦7点、石類3点、鉄類1点。そのうち壺1点、高台椀1点、高台皿2点、甕1点、綠釉陶器1点、瓦1点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-26号住居跡 欠番

#### H-27号住居跡 (Fig.13・24・27、PL. 6・12)

位置 X50・51、Y240-241グリッド 主軸方向 N-67°-E 規模 東西(2.45)m、南北[2.30]m、壁現高15cm。面積 (4.10)m<sup>2</sup> 床面 やや堅緻な貼り床。竈 東壁南に位置する。主軸方向N-70°-E。全長74cm、最大幅65cm、焚口部幅28cm。構築材には瓦・粘土を用いる。出土遺物 繩文土器5点、土師器71点、須恵器19点、綠釉陶器1点、瓦2点、石類1点。そのうち壺1点、高台椀1点、甕1点、綠釉陶器1点、瓦1点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

#### H-28号住居跡 (Fig.20)

位置 X48、Y241グリッド 主軸方向 不明。 規模 不明。 面積 不明。 床面 不明。 竈 位置不明。主軸方向N-110°-E。全長95cm、最大幅73cm、焚口部幅38cm。竈の残骸のみ出土で構築材などは不明。出土遺物 土師器40点、須恵器15点、瓦2点。そのうち高台椀1点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀代と考えられる。

#### H-29号住居跡 (Fig.9・25・27、PL.13)

位置 X46・47、Y235-236グリッド 主軸方向 N-96°-E 規模 東西(2.52)m、南北(4.00)m、壁現高9cm。面積 (5.09)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床。竈 不明。出土遺物 土師器78点、須恵器124点、灰釉陶器15点、綠釉陶器4点、瓦1点、鉄類2点。そのうち壺1点、羽釜1点、灰釉高台椀1点、灰釉高台皿1点、灰釉耳皿1

点、綠釉陶器 4 点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から 9 世紀後葉から 10 世紀前葉と考えられる。

#### H-30号住居跡 (Fig.13)

位置 X39・40、Y220グリッド 主軸方向 不明。規模 不明。面積 不明。床面 不明。竈 位置は不明。主軸方向 N-85°-E。全長(46)cm、最大幅(40)cm、焚口部幅不明。火床部のみ出土のため構築材は不明。貯蔵穴 なし。重複 II-7、19と重複しており、新旧関係は本遺構→H-19→II-7 か。備考 時期は覆土および重複関係から 8 世紀代から 9 世紀前葉と考えられる。

#### H-31号住居跡 (Fig.15)

位置 X49・50、Y241グリッド 主軸方向 N-96°-E 規模 東西(3.84)m、南北(3.58)m、壁現高41cm。面積 (13.32)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向 N-87°-E。全長65cm、最大幅70cm、焚口部幅30cm。構築材には粘土を用いる。重複 O-1と重複しており、新旧関係は不明。出土遺物 麺文土器 1 点、土師器 56 点、須恵器 199 点、灰釉陶器 3 点、綠釉陶器 1 点、瓦 1 点。備考 時期は覆土と重複関係から 9 世紀後葉から 10 世紀前葉頃か。

#### H-32号住居跡 (Fig.16・25・27、PL. 7・13)

位置 X39・40、Y211・212グリッド 主軸方向 N-63°-E 規模 東西(3.58)m、南北(2.86)m、壁現高35cm。面積 (8.77)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦だが張ってはいない床。竈 不明。重複 W-11、12と重複し、新旧関係は本遺構→W-12→W-11。出土遺物 土師器 105 点、須恵器 61 点、灰釉陶器 2 点、瓦 4 点、石類 1 点。そのうち壺 6 点、甕 2 点、瓦 1 点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から 7 世紀後葉と考えられる。

#### H-33号住居跡 (Fig.16・25、PL. 7・13)

位置 X43・44、Y226・227グリッド 主軸方向 N-54°-E 規模 東西(4.53)m、南北(4.50)m、壁現高50cm。面積 (19.05)m<sup>2</sup> 床面 やや堅敏な貼り床。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-64°-E。全長150cm、最大幅90cm、焚口部幅36cm。構築材には黒褐色粘土を用い、右袖はW-2に上部を壊されている。重複 W-2と重複し、新旧関係は本遺構→W-2。出土遺物 麺文土器 18 点、土師器 318 点、須恵器 89 点、瓦 4 点、石類 3 点。そのうち壺 2 点、甕 1 点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から 8 世紀前葉と考えられる。

#### H-34号住居跡 (Fig.16)

位置 X43、Y226・227グリッド 主軸方向 N-84°-E 規模 東西(4.53)m、南北(4.50)m、壁現高50cm。面積 (2.57)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。竈 不明。重複 H-17、35と重複し、新旧関係は H-35→本遺構→H-17。出土遺物 土師器 61 点、須恵器 6 点。備考 時期は覆土および出土遺物、重複関係から 9 世紀代と考えられる。

#### H-35号住居跡 (Fig.16・25)

位置 X43、Y226・227グリッド 主軸方向 N-85°-E 規模 東西(1.02)m、南北(2.38)m、壁現高17cm。面積 (3.89)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。竈 不明。重複 H-17、34と重複し、新旧関係は本遺構→H-34→H-17。出土遺物 土師器 21 点、須恵器 15 点、綠釉陶器 1 点、瓦 5 点、鉄類 2 点。そのうち高台皿 1 点、瓦 1 点を図示。備考 時期は覆土および出土遺物から 9 世紀中葉と考えられる。

#### H-36号住居跡 (Fig.16・26、PL.13)

位置 X41・42、Y226・227グリッド 主軸方向 不明。 規模 不明。 面積 不明。 床面 平坦な床面。  
竈 位置不明。主軸方向 N-76°-E。全長106cm、最大幅85cm、焚口部幅28cm。 重複 H-4、37と重複し、新旧関係はH-37→本遺構→H-4。 出土遺物 土師器73点、須恵器21点、瓦11点。そのうち高台椀1点、甕1点、瓦1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀中葉から後葉と考えられる。

#### H-37号住居跡 (Fig.16)

位置 X41・42、Y226・227グリッド 主軸方向 N-70°-E 規模 東西(2.26)m、南北(4.02)m、壁現高26cm。 面積 (10.53)m<sup>2</sup> 床面 平坦な床面。 竈 不明。 重複 H-4、17、36と重複し、新旧関係は本遺構→H-36、17→H-4。 出土遺物 土師器110点、須恵器58点、瓦2点、鉄類2点。そのうち壺1点、高台椀1点を図示。 備考 時期は覆土および出土遺物から9世紀代と考えられる。

## (2) 溝跡

#### W-1号溝跡 (Fig.17、PL.7)

位置 X49~58、Y241・242グリッド 主軸方向 N-83°-W 長さ 36.3m 最大幅 上幅4.25m、下幅2.60m  
m 深さ 110.0cm 形状等 逆台形 出土遺物 土師器5点、須恵器9点、瓦1点。 備考 流水の痕跡無し。  
時期は覆土からAs-B降下以降と考えられる。

#### W-2号溝跡 (Fig.18・26)

位置 X42~45、Y226~228グリッド 主軸方向 N-66°-W 長さ 9.2m 最大幅 上幅1.26m、下幅0.68m  
深さ 42.5cm 形状等 U字形 重複 II-23、33と重複し、新旧関係はII-23→II-33→本遺構の順である。  
出土遺物 繪文土器8点、土師器341点、須恵器198点、灰釉陶器7点、瓦28点、鉄類1点。そのうち壺2点、高台椀1点、瓦2点を図示。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土や重複関係から9世紀後葉以降As-B降下以前  
と考えられる。

#### W-3号溝跡 (Fig.18)

位置 X42~44、Y228~229グリッド 主軸方向 N-82°-E 長さ 5.8m 最大幅 上幅2.96m、下幅2.60m  
深さ 60.0cm 形状等 U字形 重複 H-23と重複し、新旧関係はH-23→本遺構。 出土遺物 土師器80点、  
須恵器23点。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からAs-B降下以降と考えられる。

#### W-4号溝跡 (Fig.18)

位置 X40・41、Y222グリッド 主軸方向 N-76°-E 長さ 4.7m 最大幅 上幅1.07m、下幅0.50m 深  
さ 23.0cm 形状等 U字形 出土遺物 土師器216点、須恵器60点、灰釉陶器4点、瓦7点、石類1点。 備考  
流水の痕跡無し。時期は覆土からHr FP降下以降からAs-B降下以前と考えられる。

#### W-5号溝跡 (Fig.18・26・27、PL.14)

位置 X40・41、Y220グリッド 主軸方向 N-76°-E 長さ 5.0m 最大幅 上幅1.72m、下幅1.14m 深  
さ 55.0cm 形状等 U字形 出土遺物 繪文土器1点、土師器94点、須恵器137点、灰釉陶器5点、綠釉陶器1  
点、瓦4点、鉄類2点、石類1点。そのうち壺2点、甕1点、瓶1点、綠釉陶器1点を図示。 備考 流水の痕

跡無し。時期は覆土と出土遺物から9世紀代と考えられる。

#### W-6号溝跡 (Fig.18)

位置 X39・40、Y218・219グリッド 主軸方向 N-68°-E 長さ (3.1)m 最大幅 上幅0.42m、下幅0.22m 深さ 14.5cm 形状等 U字形 重複 II-21と重複し、新旧関係はII-21・本遺構。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からAs-B降下以降と考えられる。

#### W-7号溝跡 (Fig.18)

位置 X39・40、Y219グリッド 主軸方向 N 66° E 長さ 5.3m 最大幅 上幅0.36m、下幅0.17m 深さ 7.5cm 形状等 U字形 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からAs-B降下以降と考えられる。

#### W-8号溝跡 (Fig.18)

位置 X43・44、Y229～231グリッド 主軸方向 N-31°-E 長さ 5.3m 最大幅 上幅2.67m、下幅1.88m 深さ 8.0cm 形状等 U字形 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からAs-B降下以降と考えられる。

#### W-9号溝跡 (Fig.19・27・28、PL. 7・13)

位置 X38～40、Y208～216グリッド 主軸方向 N-145°-E 長さ 10.0m 主軸方向 N-171°-E 長さ 24.4m 最大幅 上幅1.10m、下幅0.72m 深さ 50.0cm 形状等 U字形 出土遺物 繩文土器5点、土師器153点、須恵器184点、灰釉陶器20点、綠釉陶器1点、瓦4点、鉄類15点。そのうち壊1点、高台樹1点、鉄類1点を図示。 備考 流水の痕跡無し。曲がり角からは焼土粒も多く出土。時期は覆土からHr-FP降下以降からAs-B降下以前と考えられる。

#### W-10号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X39、Y209～214グリッド 主軸方向 N-183°-E 長さ 21.9m 最大幅 上幅0.72m、下幅0.48m 深さ 17.0cm 形状等 U字形 重複 H-32、W-11、12と重複し、新旧関係はH-32→W-11→W-12・本遺構。 出土遺物 繩文土器2点、土師器31点、須恵器27点、灰釉陶器8点、瓦4点、石類1点、鉄類1点。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からHr-FP降下以降からAs-B降下以前と考えられる。

#### W-11号溝跡 (Fig.19・27、PL. 7)

位置 X38～40、Y208～213グリッド 主軸方向 N-166°-E 長さ 23.1m 最大幅 上幅1.52m、下幅1.00m 深さ 42.0cm 形状等 U字形 重複 W-10、12、13、14、15、16と重複し、新旧関係はW-12→本遺構→W-10、16→W-15→W-14→W-13。 出土遺物 繩文土器3点、土師器115点、須恵器60点、灰釉陶器9点、瓦9点。そのうち壊1点を図示。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からHr-FP降下以降からAs-B降下以前と考えられる。

#### W-12号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X39・40、Y208～211グリッド 主軸方向 N-148°-E 長さ (11.9)m 最大幅 上幅0.92m、下幅0.60m 深さ 31.5cm 形状等 U字形 重複 W-10、11と重複し、新旧関係は本遺構→W-10→W-11。 出土遺物 土師器5点、須恵器1点、瓦1点。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土からHr-FP降下以降からAs-B降下以前と考えられる。

#### W-13号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X38~39、Y208グリッド 主軸方向 N-81°-E 長さ (3.2)m 最大幅 上幅1.60m、下幅0.50m 深さ 32.0cm 形状等 U字形 重複 W-11、16、A-1と重複し、新旧関係はW-11→W-16→本遺構→A-1。出土遺物 繩文土器2点、土師器59点、須恵器35点、瓦3点。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から As-B 降下以降と考えられる。

#### W-14号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X39、Y208グリッド 主軸方向 N-85°-E 長さ 2.7m 最大幅 上幅1.04m、下幅0.40m 深さ 30.5cm 形状等 U字形 重複 W-15、11と重複し、新旧関係W-11→W-15→本遺構。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から Hr-FP 降下以降から As-B 降下以前と考えられる。

#### W-15号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X39、Y208グリッド 主軸方向 N-88°-E 長さ 1.5m 最大幅 上幅0.80m、下幅0.36m 深さ 11.0cm 形状等 U字形 重複 W-14、16と重複し、新旧関係はW-16→本遺構→W-14。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から Hr-FP 降下以降から As-B 降下以前と考えられる。

#### W-16号溝跡 (Fig.19、PL. 7)

位置 X39、Y208グリッド 主軸方向 N-83°-E 長さ 2.2m 最大幅 上幅1.04m、下幅0.56m 深さ 19.0cm 形状等 U字形 重複 W-11、13、14、15と重複し、新旧関係は本遺構→W-15→W-14→W-13→W-11。 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から Hr-FP 降下以降から As-B 降下以前と考えられる。

### (3) 土坑・ピット・落ちこみ

土坑・ピットについては、Tab. 4 土坑・ピット計測表 (P22) を参照のこと。

### (4) 道路状遺構

#### A-1号道路状遺構

位置 X38~40、Y208~215グリッド 主軸方向 N 170°-E 長さ 30.5m 最大幅 上幅1.86m、下幅2.07m 高さ 6.0cm 重複 W-10、13と重複し、新旧関係はW-10→W-13→本遺構。 出土遺物 土師器47点、須恵器27点、灰釉陶器1点、瓦6点、石類2点。 備考 時期は覆土と出土遺物から As-B 降下以降と考えられる。

### (5) 落ち込み状遺構

#### O-1号落ち込み状遺構 (Fig.18・26・27)

位置 X49~51、Y241グリッド 直径170.8cm、縦深92.0cm、深さ22.5cm。 形状等 楕円形 重複 H 31と重複し、新旧関係は不明。 出土遺物 繩文土器4点、土師器290点、須恵器547点、灰釉陶器16点、綠釉陶器13点、瓦10点、石類1点、鉄類2点。そのうち壺1点、高台椀1点、壺2点、火舎1点、綠釉陶器13点を図示。 備考 時期は覆土と出土遺物から9世後葉から10世紀前葉と考えられる。

(6) グリッド等出土遺物 (Fig.27・28)

縄文土器12点、土師器483点、須恵器640点、瓦49点、灰釉陶器16点、綠釉陶器4点、鉄類2点、石類6点を出土した。そのうち須恵器1点、綠釉陶器2点。石製品1点を図示。

Tab. 2 A 区住居跡等一覧表

遺構名	位置	規模 (m)			面積 (m <sup>2</sup> )	主軸方向	遺構		周囲	主な出土遺物		
		東西	南北	壁厚高 (cm)			位置	構築材		上部器	須恵器	その他
H-1	X 44° 45° Y 232° 233°	(1.49)	(4.51)	35	(6.23)	N-66°-E	東壁南寄	粘土、凝灰岩	-	壊、甕		
H-2	X 43° 44° Y 231° 232°	(3.10)	(2.26)	21	(6.13)	N-53°-E	東壁中央	粘土、凝灰岩	-	壊		
H-3	X 43° Y 231°	(0.96)	(1.15)	33	(3.15)	N-74°-E	東壁	粘土、凝灰岩、土上	-	甕	高台櫛	瓦
H-4	X 41° Y 226° 227°	(1.12)	(3.87)	34	(3.59)	N-69°-E	東壁南寄	粘土、凝灰岩	-	甕	壊、高台櫛	瓦
H-5	X 42° Y 225° 226°	(1.80)	(3.54)	39	(3.64)	N-71°-E	-	-	-	壊、甕	甕、高台櫛	瓦サイ
H-6	X 40° 41° Y 224° 225°	(3.26)	(3.70)	26	(13.14)	N-82°-E	東壁南寄	粘土	-	甕	壊、高台櫛	瓦
H-7	X 39° 40° Y 220° 221°	(2.28)	(4.06)	36	(7.04)	N-71°-E	東壁中央	凝灰岩、土器	-	甕		
H-8	X 42° 43° Y 226° 227°	2.74	3.72	6	9.25	N-71°-E	東壁中央寄	凝灰岩、粘土	-	壊、甕	高台櫛、羽器	瓦、縁石
H-9	X 40° Y 224°	(1.32)	(2.54)	21	(1.58)	N-93°-E	-	-	-	-	-	-
H-10	X 39° 40° Y 220° 221°	(2.72)	(3.55)	39	(5.49)	N-74°-E	東壁南寄	粘土	-	甕	壊、高台櫛、甕	
H-11	X 39° 40° Y 221°	[2.40]	[1.96]	24	(4.33)	N-83°-E	東壁中央南寄	粘土	-	甕	壊、高台櫛	
H-12	X 41° Y 224° 225°	(3.16)	(4.18)	41	(11.65)	N-58°-E	-	-	-	甕	壊	
H-13	X 41° Y 223° 224°	(2.10)	(3.80)	40	(6.73)	N-71°-E	-	-	-	甕、甕	壊、高台櫛	瓦
H-14	X 41° Y 223° 224°	[1.50]	[3.45]	40	(2.70)	N-69°-E	-	-	-	-	-	-
H-15	X 43° 44° Y 229° 230°	(2.36)	(4.20)	48	(4.86)	N-87°-E	-	-	-	甕	甕	
H-16	X 40° Y 224°	(0.94)	(2.48)	63	(1.31)	N-87°-E	東壁南寄	粘土	-	甕	甕	
H-17	X 31° 32° Y 226° 227°	4.10	4.52	44	17.81	N-67°-E	東壁南寄	粘土、凝灰岩、瓦	-	甕	壊、高台櫛	瓦、縁石
H-18	X 40° 41° Y 219° 220°	(2.02)	(3.96)	42	(6.43)	N-94°-E	-	-	-	-	-	灰陶
H-19	X 39° 41° Y 220° 221°	(3.14)	(4.46)	43	(14.58)	N-61°-E	東壁南寄	粘土	-	-	甕	
H-20	X 40° Y 219° 220°	[3.17]	[2.13]	33	(4.89)	N-59°-E	-	-	-	甕	高台櫛	
H-21	X 35° 40° Y 217° 219°	(2.20)	(4.10)	41	(8.15)	N-58°-E	北壁	粘土、凝灰岩	-	甕、甕		
H-22	X 39° Y 218° 219°	[1.12]	[2.50]	49	(1.42)	N-71°-E	東壁南寄	粘土	-	-	甕	
H-23	X 42° Y 228° 229°	(2.26)	(3.86)	36	(6.74)	N-74°-E	東壁中央南寄	粘土	-	甕	壊、高台櫛	
H-24	X 39° 40° Y 217° 218°	3.33	4.24	25	12.38	N-82°-E	東壁南寄	粘土、瓦	-	甕	壊、高台櫛、高台皿	
H-25	X 45° 47° Y 236° 237°	(5.02)	(4.66)	16	(18.60)	N-88°-E	東壁中央南寄	粘土、凝灰岩、瓦	-	甕、高台櫛、高台皿	瓦、縁石	
H-26	欠番											
H-27	X 50° 51° Y 240° 241°	(2.45)	[2.30]	15	(4.10)	N-67°-E	東壁南	粘土、瓦	-	甕	壊、高台櫛	
H-28	X 48° Y 241°									甕	高台櫛	
H-29	X 46° 47° Y 235° 236°	(2.52)	(4.00)	9	(5.09)	N-96°-E	-	-	-	甕	甕、羽器	縁石、灰陶
H-30	X 39° 40° Y 228°											
H-31	X 49° 50° Y 241°	(3.84)	(3.58)	41	(13.32)	N-96°-E	東壁南寄	粘土	-	-	-	
H-32	X 39° 40° Y 211° 212°	(3.58)	(2.86)	35	(8.77)	N-63°-E	-	-	-	甕、甕		
H-33	X 43° 44° Y 226° 227°	(4.53)	(4.50)	50	(19.05)	N-54°-E	東壁中央南寄	黒褐色粘質土	-	甕、甕		
H-34	X 43° Y 226° 227°	(4.53)	(4.50)	50	(2.57)	N-84°-E	-	-	-	-	-	
H-35	X 43° Y 226° 227°	(1.02)	(2.38)	17	(3.89)	N-85°-E	-	-	-	-	高台皿	
H-36	X 41° 42° Y 226° 227°									甕	高台櫛	
H-37	X 41° 42° Y 226° 227°	(2.26)	(4.02)	26	(10.53)	N-70°-E	-	-	-	甕、高台櫛		

Tab. 3 A区溝跡計測表

遺構名	位 置	長さ(m)	深さ(cm)		上幅(cm)		下幅(cm)		主軸方向	断面形	時 期
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-1	X49~58 Y241~242	36.3	110.0	7.0	426.0	186.0	260.0	24.0	N-83°-W	溝台形	中世以降
W-2	X42~45 Y226~228	9.2	42.5	4.5	126.0	94.0	68.0	30.0	N-66°-W	U字形	古代
W-3	X42~44 Y228~229	5.8	60.0	44.0	296.0	292.0	260.0	240.0	N-82°-E	U字形	中世以降
W-4	X40~41 Y222	4.7	23.0	14.0	107.0	98.0	50.0	41.0	N-76°-E	U字形	古代
W-5	X40~41 Y220	5.0	55.0	47.0	172.0	152.0	114.0	102.0	N-76°-E	U字形	中世以降
W-6	X39~40 Y218~219	(3.1)	14.5	2.0	42.0	29.0	22.0	17.0	N-68°-E	U字形	中世以降
W-7	X39~40 Y219	5.3	7.5	4.0	36.0	24.0	17.0	8.0	N-66°-E	U字形	中世以降
W-8	X43~44 Y229~231	5.3	8.0	1.5	267.0	200.0	188.0	166.0	N-31°-E	U字形	中世以降
W-9	X38~40 Y208~216	10.0 24.4	50.0	10.5	110.0	40.0	72.0	20.0	N-145°-E N-171°-E	U字形	古代
W-10	X39 Y209~214	21.9	17.0	1.5	72.0	54.0	48.0	38.0	N-183°-E	U字形	古代
W-11	X38~40 Y208~213	23.1	42.0	26.5	152.0	110.0	100.0	64.0	N-166°-E	U字形	古代
W-12	X39~40 Y208~211	(11.9)	31.5	22.5	92.0	68.0	60.0	60.0	N-148°-E	U字形	古代
W-13	X38~39 Y208	(3.2)	32.0	29.5	160.0	103.0	50.0	20.0	N-81°-E	U字形	古代
W-14	X39 Y208	2.7	30.5	29.5	104.0	60.0	40.0	36.0	N-85°-E	U字形	古代
W-15	X39 Y208	1.5	11.0	7.0	80.0	40.0	36.0	24.0	N-88°-E	U字形	古代
W-16	X39 Y208	2.2	19.0	17.0	104.0	88.0	56.0	32.0	N-83°-E	U字形	古代
A-1	X38~40 Y208~215	30.5	6.0	2.5	186.0	150.0	207.0	171.0	N-170°-E		

Tab. 4 A区・土坑・ピット・落ちこみ状遺構計測表

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	出土遺物	備 考
D-1	X42 Y226	60.0	56.0	27.5	円 形		
D-2	X41~42 Y226~227	252.0	192.0	76.0	梢円形		
D-3	X40 Y217	125.0	83.0	18.5	梢円形		
P-1	X31~32 Y226	63.0	56.0	9.0	梢円形		
O-1	X49~51 Y241	170.8	92.0	22.5	楕円形	器物13点、遺物多い	





番号	底土・邊縁地	岩盤名	①形状		②高さ		特徴的特徴・鑑定・調査注記	登録番号	備考
			①形状	②高さ	③範囲	④道幅			
85	H-33 土の石 土上	土の石	①22.2 ②(15.9)	③良好	④0.1~1.5	⑤0.1/2	山嶺部：最高大径。大きな外傾。内・外両側面で。底部：内側面で、外側面斜度り。底部欠損。	110枚	側面外側に土石付着
86	H-35 山土 土上	山土	①14.4 ②12.8	③良好	④0.1~1.5	⑤0.1/2	特徴的特徴。口縫・体縫：人さし骨部。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側面斜度り。断面二角形の高さを取り付け。		
87	H-36 高石頭 土上	高石頭	①(16.0)	②(26.6)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：外側から山頭部や外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側面斜度り。断面二角形の高さを取り付け。	1	
88	H-38 土の石 土上	土の石	①(20.4)	②(12.0)	③良好	④0.1~1.5	口縫部：外傾。内・外両側面で。断面：やや落し込む方が岩盤部。内側面で、外側向外張り。断面欠損。		
89	H-37 山土 土上	山土	①(14.0)	②(0.8)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：外側から山頭部やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。断面欠損。		
90	H-37 山土 土上	山土	①(14.1)	②(23.9)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：大きめ外傾。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。断面四角形の高い高さを取り付け。	いじし集成	
91	O-1 土の石 土上	土の石	①(13.7)	②(1.4)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：外側から山頭部斜面やや脇溝。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。	数化始	
92	O-1 土の石 土上	土の石	①(16.5)	②(1.4)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：外側から山頭部やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。断面三角形の高さを取り付け。	26枚	
93	O-1 土の石 土上	土の石	①(20.3)	②(11.1)	③良好	④0.1~1.5	山嶺部：外傾。内・外両側面斜度で。底部：やや膨らみ上部が若干大径。内側面で、外側向外張り。底部：欠損。		
94	O-1 高石頭 土上	高石頭	①(14.1)	②(1.4)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：大きめ外傾。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。底部：欠損。	12	
95	O-1 山土 土上	山土	①(14.1)	②(1.4)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：底部：欠損。底部：下底。円柱2.2mの穿孔。		
96	W-2 土の石 土上	土の石	①(17.1)	②(0.2)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：底部：欠損。底部：内側面で、外側向外張り。断面二角形の高さを取り付け。	透視内面に赤色付着物有り	
97	W-2 山土 土上	山土	①(12.9)	②(0.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。山嶺部：外側から山頭部斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。底部：欠損。		
98	W-2 高石頭 土上	高石頭	①(14.8)	②(0.8)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。山嶺部：外側から山頭部斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。断面二角形の高さを取り付け。		
99	W-5 土の石 土上	土の石	①(11.8)	②(13.6)	③良好	④0.1~1.5	山嶺部：外傾。内側面斜度で。外側向外張り。底部：平面。内側面で、外側向外張り。		
100	W-5 山土 土上	山土	①(13.4)	②(3.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫・体縫：外側から山頭部斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。		
101	W-5 山土 土上	山土	①(24.3)	②(31.6)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面。内・外両側面斜度で。底部：山頭部状況。外側面：底部：平面。内側面：外側向外張り。	日-14 4枚	
102	W-5 山土 土上	山土	①(1-)	②(14.8)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：欠損。底部：内側面で、外側向外張り。底部：欠損。		
103	W-9 山土 土上	山土	①(18.9)	②(3.8)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。	いじし施度	
104	W-9 山土 土上	山土	①(18.9)	②(3.8)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。		
105	W-9 山土 土上	山土	①(14.2)	②(6.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。		
106	W-11 山土 土上	山土	①(14.5)	②(3.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：欠損。	文字有り	
107	W-11 山土 土上	山土	①(14.5)	②(3.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。		
108	W-11 山土 土上	山土	①(14.5)	②(3.5)	③良好	④0.1~1.5	特徴的特徴。口縫部：外側斜面やや外反。内・外両側面斜度で。底部：内側面で、外側向外張り。		

注) ①縦は「底土」水深より10cm以内の部分からなる。【要】上：底土と水を想する部分から出たの2種別に分けた。縦内の複数物については「複数」と記載した。

注) ②横はヤコリである。荷物を（ ）で示した。

注) 基土上、斜面（0.9m以下）、中段（1.0-1.9m以上）、高段（2.0m以上）とし、特殊な立場がある場合に該物名等を記載した。

③施成は、改良・良好・不良の二段階とした。

Tab. 6 A区縁付陶器観察表

番号	出土場所	器種名	①内面 ②外見	③縁高	④内面 ⑤底面 ⑥底端部	断面の特徴・瓶形・実物名	登録番号	備考
107	H-8 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。表面、内外面に縫隙が走っている。		
108	H-8 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。やや状況。内面、外外面に薄く縫隙が走る。		
109	H-17 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。やや状況。内面、外外面に薄く縫隙が走る。		
110	H-25 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。やや状況。内面、外外面に薄く縫隙が走る。		
111	H-27 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。内面、外外面に縫隙が走る。		
112	H-29 土上	縁付 壺	①— ②—	③(2.3) ④(3.4)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦リニア ⑧良片	縦縫型。底面に横トテテ字文による割離文字を走る。底地は灰地。高台は円筒台。断面は四角形。内外面にトテン底有り。縫隙の一部が黄色を帯びている。		
113	H-29 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。内面、外外面に縫隙が走る。		
114	H-29 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。はっきりとした縫隙を持つ。内面、外外面に光沢の薄い縫隙が走っている。		
115	H-29 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。口縫はやや外反する。内面、外外面に縫隙が走っている。		
116	アラマ 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。やや状況。内面、外外面に薄く縫隙が走る。		
117	O-1 土上	縁付 壺	①(16.4) ②(16.6)	③(2.4) ④(2.5)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。高台は断面四角形の付けた高台。底地は薄で調滑。颈部中間に粗糸孔を有する。三又トナン。内側と縁部分に光沢な裏書きの割離文字有り。底地は灰地。金巻地。		縫隙部に沿うこんだ形跡が高台断面に有り
118	O-1 土上	縁付 壺	①(16.4) ②(7.0)	③(2.5) ④(2.6)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。内面、外外面に縫隙が走る。断面は四角形。体部中央に粗糸孔を有する。二又トナン。内側と口縫部分に光沢な裏書きの割離文字有り。底地は灰地。		
119	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。高台は断面四角形の付けた高台。底地は薄で調滑。体部中央に粗糸孔を有する。二又トナン。内側と口縫部分に光沢な裏書きの割離文字有り。底地は灰地。		
120	O-1 土上	縁付 壺	①(15.8) ②(16.8)	③(2.6) ④(2.7)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。内面、外外面に縫隙が走る。断面は四角形。内側と口縫部分に光沢な裏書きを有する。底地は灰地。		
121	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③(4.2) ④(7.2)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。高台は断面四角形の付けた高台。底地は薄で調滑。内側と口縫部分に光沢な裏書きの割離文字有り。二又トナン。底地は灰地。		
122	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。内面、外外面に薄く縫隙が走り、底地に凹いた内面に縫隙が走っている。台面は灰地。		
123	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。台面の断面は四角形で台面に縫隙が走り付ける。縫隙で周囲を内底面に接する。内底面に丁度模様がある。内側と口縫部分に光沢な裏書きの割離文字有り。		
124	O-1 土上	縁付 壺	①(13.8) ②(12.2)	③(2.2) ④(2.3)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。内面、外外面に縫隙が走る。口縫部分で細い縫隙による光沢を有する。外側の縫隙は薄い。		
125	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③(10.7) ④(7.9)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	未確定。灰地。光沢の薄い縫隙が走っている。		
126	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		
127	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③(2.2) ④(2.3)	⑤縁密 ⑥良好 ⑦良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。縫隙で周囲を内底面に接する。内側と口縫部分に光沢な裏書きの割離文字有り。		
128	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		
129	O-1 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		
130	W-5 土上	縁付 壺	①(16.9) ②(12.0)	③(2.0)	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		
131	X-38 土上	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		
132	Y-229	縁付 壺	①— ②—	③—	④縁密 ⑤良好 ⑥良片	縦縫型。底地は灰地。底地に粗糸孔による光沢を有する。底地は薄く縫隙が走る。		

(II) 展位は「縦縫型」: 底面より10cm以内の部位から検出、「底上」: 底面より10cmを超える部位から出土した。底面の検出については「内面」と記載した。

①内面、②外見、③縁高の半径1cmである。縫隙を有する、( )、復元前を〔 〕で示した。

④縫隙上は、縫隙 (0.5mm以下)、中段 (1.0~1.5mm以下)、下段 (2.0mm以上) とし、特徴的な形状がある場合に該当名等を記載した。

⑤底地は、底地、良好、良片、小舟の三段階とした。

Tab. 7 A区石製品観察表

番号	出土通構・層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	保存状	登録番号	備考
1	グリッド/覆土	勾玉	5.7	2.0	1.0	23.2	滑石	完形	II-25-2	

注) ① 層位は、「床直」: 床面より10cm以内の層位から検出、「覆土」: 床面より10cmを超える層位から出土の2段階に分けた。

② 最大長・最大幅・最大厚の単位はcmであり、重さの単位はgである。現存値を( )で示した。

Tab. 8 A区鉄器・鉄製品観察表

番号	出土通構・層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	達が度	登録番号	備考
1	H-4	覆土	鉄鏃	2.8	1.9	0.4	5		
2	W-9	覆土	鉄鏃	(10.0)	(11.9)	0.6	860	1/2	

注) ① 層位は、「床直」: 床面より10cm以内の層位から検出、「覆土」: 床面より10cmを超える層位から出土の2段階に分けた。

② 最大長・最大幅・最大厚の単位はcmであり、重さの単位はgである。現存値を( )で示した。

Tab. 9 A区瓦観察表

番号	北山通構・層位	器種名	①灰さ	②厚さ	③底上	④底色	⑤底存有	器種の特徴・笠形・断面形状	登録番号	備考
1	H-5 床	平瓦	①(0.1)②(2.1)		中板	白	存有	一枚作り。凸面：布目有。凹面：無。側面：側面「③」有。側面：不明。	6	黒書き文字
2	H-8 覆土	A.H.C.	①(1.3)②(1.7)		中板	白	存有	玉縁式。凸面：無。凹面：布口有。側面：面取り2回。	105	
3	H-17 床	A.H.C.	①(6.6)②(2.3)		中板	白	存有	有底式。凸面：無で、四面：白口有。斜切文字有、文字は「手」の範文ですか。側面：面取り1回。一枚の瓦を2方に割り、重複貼付に使用。		印字文字
4	H-17 瓦	丸瓦	①(0.6)②(1.4)		中板	白	存有	行底式。凸面：無で、凹面：布口有。側面：面取り2回。一枚の瓦を2方に割り、重複貼付に使用。	300枚	
5	H-17 瓦	丸瓦	①(17.4)②(4.4)		中板	白	存有	行底式。凸面：無で、側面：側面「③」有。側面：面取り2回。一枚の瓦を2方に割り、重複貼付に使用。		
6	H-17 瓦	平瓦	①(2.6)②(2.7)		中板	白	存有	一枚作り。側面：斜面削り直し。凹面：斜削り直側面。印字目文字有。文字は斜面削り直側面。側面：西壁2回。笠形系。		文字
7	H-17 瓦	平瓦	①(23.2)②(1.4)		中板	白	存有	一枚作り。凹面：無。側面：斜面削り直し。斜削り直側面。側面：斜削り直1回。	44	南天井部に使用
8	H-17 瓦	A.H.C.	①(18.3)②(1.5)		中板	白	存有	玉縁式。凸面：無で、凹面：布口有。側面：面取り2回。	42	電火升附に使用
9	H-17 瓦	丸瓦	①(19.3)②(1.2)		中板	白	存有	玉縁式。凸面：脚きり後撤式。凹面：布口有。側面：面取り小刻。	カマド	電火升附に使用
10	H-25 瓦	平瓦	①(16.0)②(1.8)		中板	白	存有	一枚作り。凹面：布口有。凸面：無。側面：斜削り2回。		
11	H-24 覆土	丸瓦	①—②—		中板	白	存有	斜瓦。瓦当部：二重の界縁文内側に見え点有り。凹面：斜削字印字。		
12	H-24 覆土	平瓦	①(7.0)②(4.5)		中板	白	存有	一枚作り。側面：布口有。凹面：無で。側面削のあたり横裂。側面：不明。		
13	H-25 瓦	丸瓦	①(17.5)②(5.8)		中板	白	存有	斜瓦。瓦当部：右側面四本筋。側面：斜削字印字。側面：無。	69	
14	H-27 瓦	平瓦	①(14.9)②(2.1)		中板	白	存有	一枚作り。凹面：斜削字印字。側面：斜削字印字。		
15	H-32 覆土	平瓦	①—②—		中板	白	存有	斜瓦。瓦当部：深いV字の界縁有り。凹面、凸面削。側面小刻。	37	
16	H-35 瓦	丸瓦	①(13.2)②(2.0)		中板	白	存有	斜瓦。瓦当部：深いV字の界縁有り。凹面：斜削字印字。側面：斜削字印字。		黒書き文字
17	H-36 覆土	平瓦	①(6.2)②(2.3)		中板	白	存有	一枚作り。凹面：布口有。西面：無。黒書き文字有。側面：面取り2回。		黒書き文字
18	H-2 覆土	平瓦	①(19.4)②(4.0)		中板	白	存有	斜瓦。瓦当部：右側面兩草文有り。凹面：布口削り直し。凸面：無で。		
19	H-2 土壁	平瓦	①(29.0)②(1.6)		中板	白	存有	一枚作り。凹面：布口有。凸面：斜削字印字「手」有。側面：斜削字印字。		黒書き文字

注) ①層位は「床直」: 床面より10cm以内の層位から検出、「覆土」: 床面より10cmを超える層位から出土の2段階に分けた。電火升附についても「屋内」と記載した。

②印字: 黒書き文字である。斜削字印字( ), 斜削字を [ ] で示した。

③斜削字: 斜削(0.9mm以下)、中削(1.0~1.5mm以下)、粗削(2.0mm以上)とし、特徴的な彫刻が入る場合に彫刻名を記載した。

④斜削: 斜削・良削・不良の三段階とした。

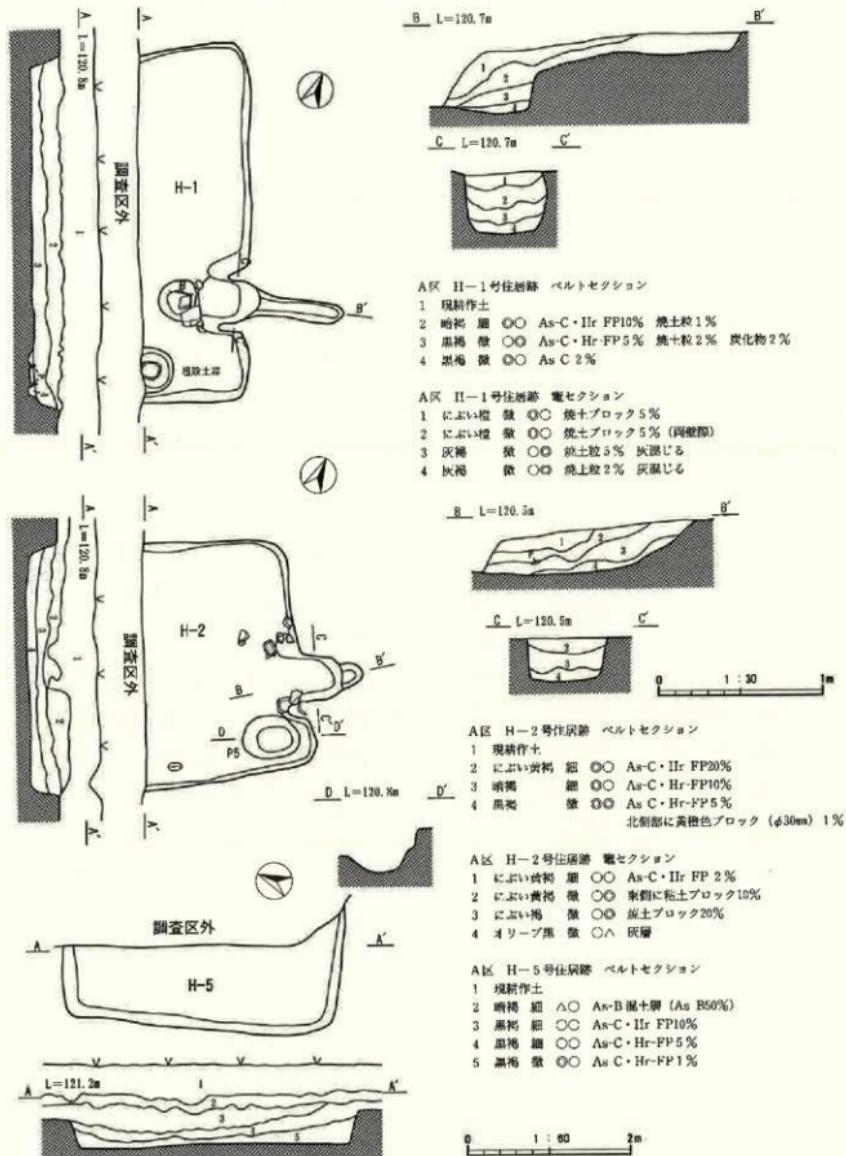


Fig. 6 H-1・2・5号住居跡

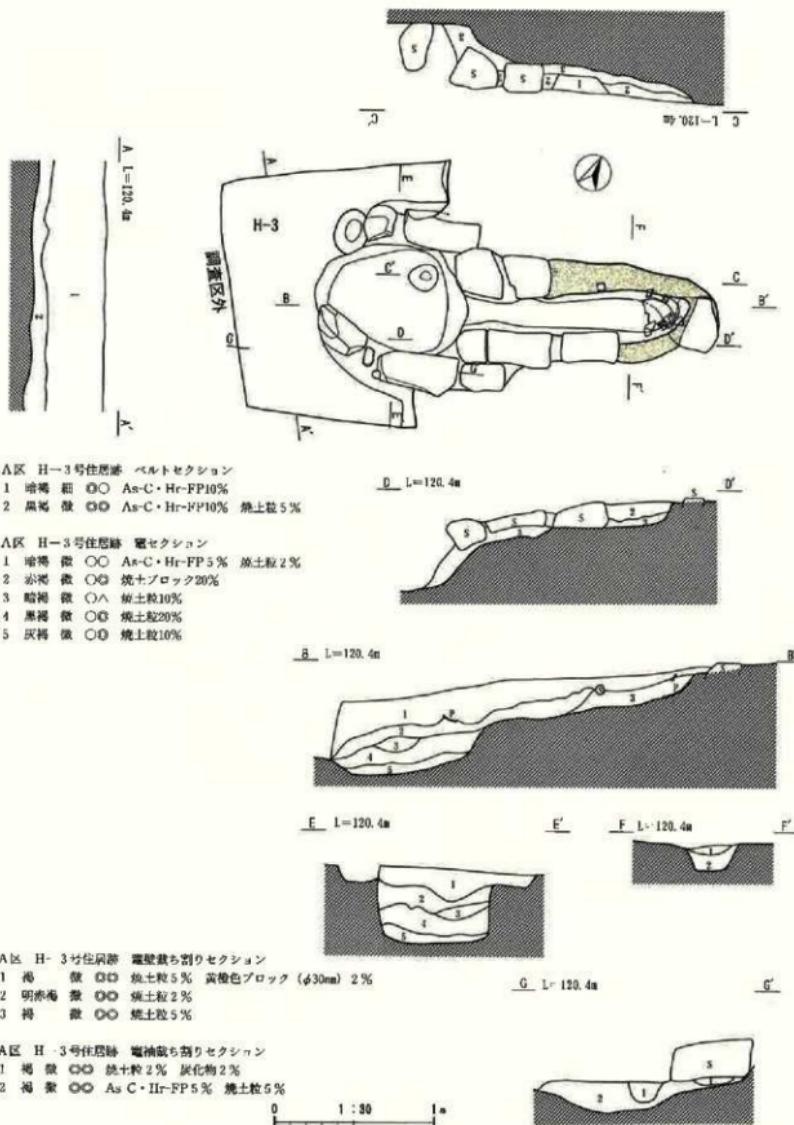


Fig. 7 H-3号住居跡

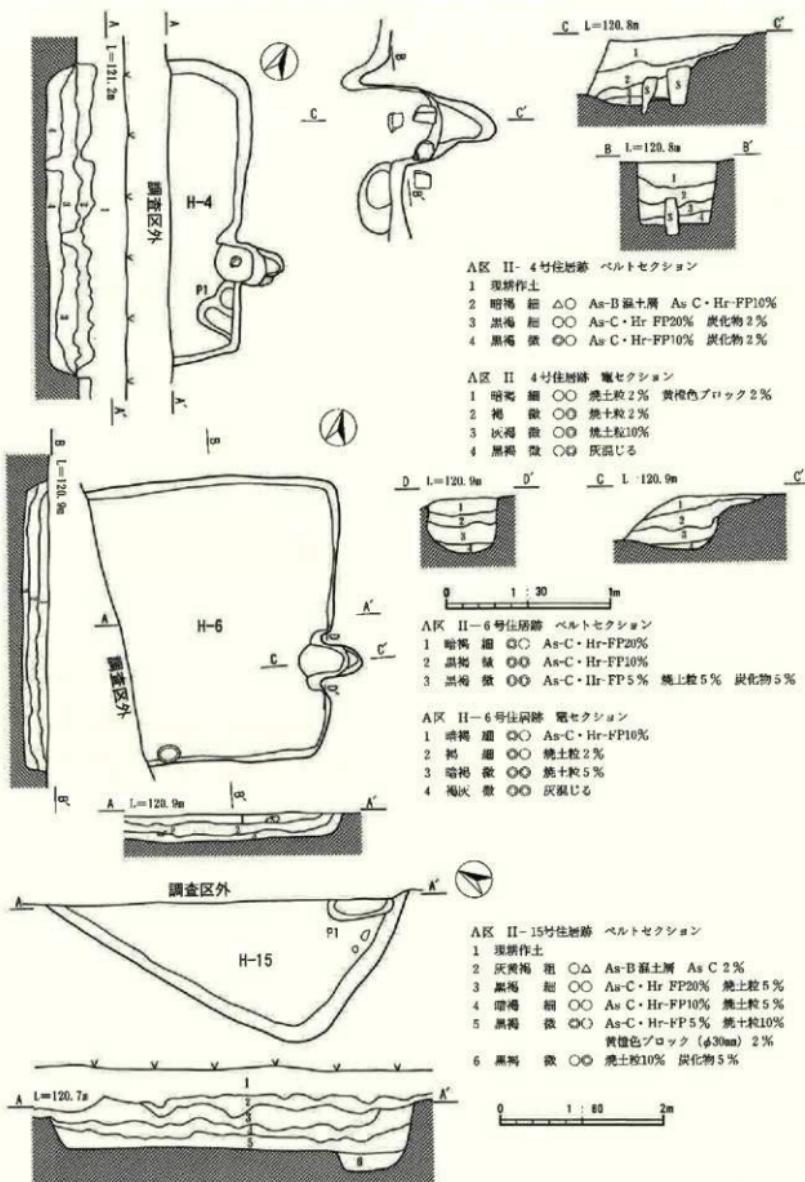


Fig. 8 H-4・6・15号住居路

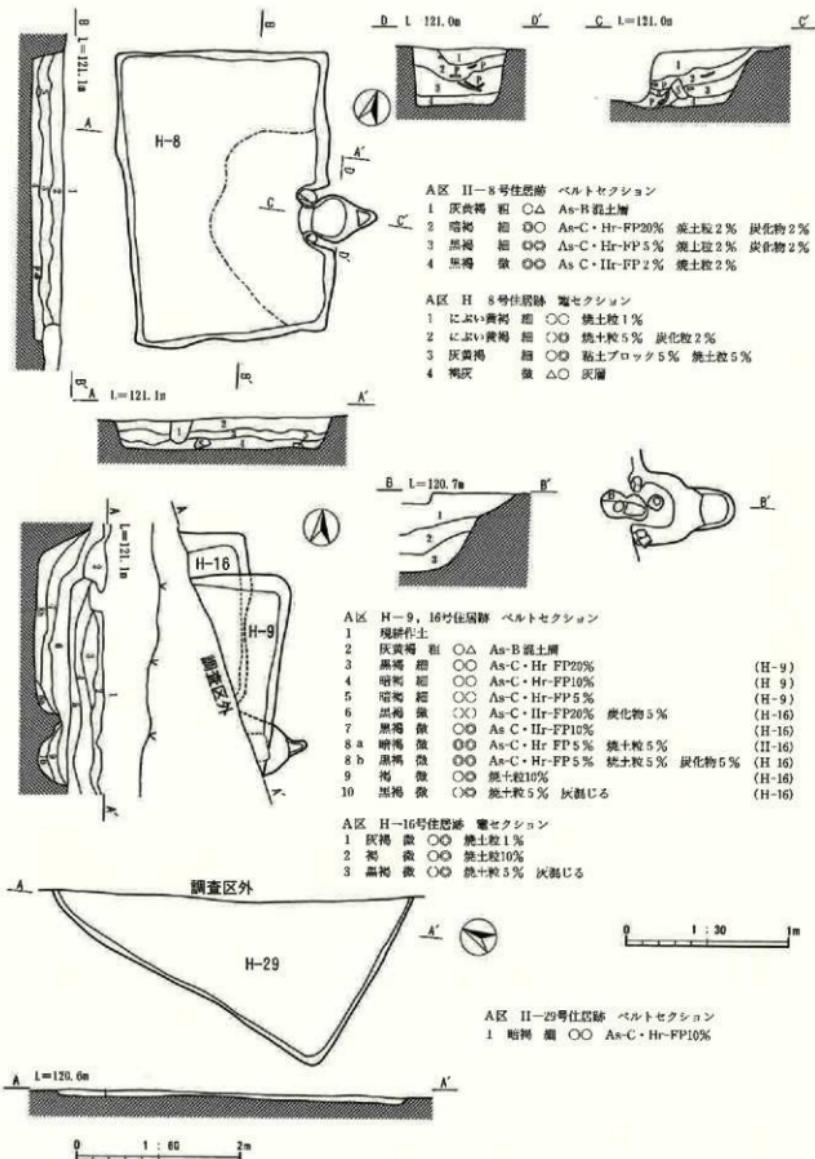
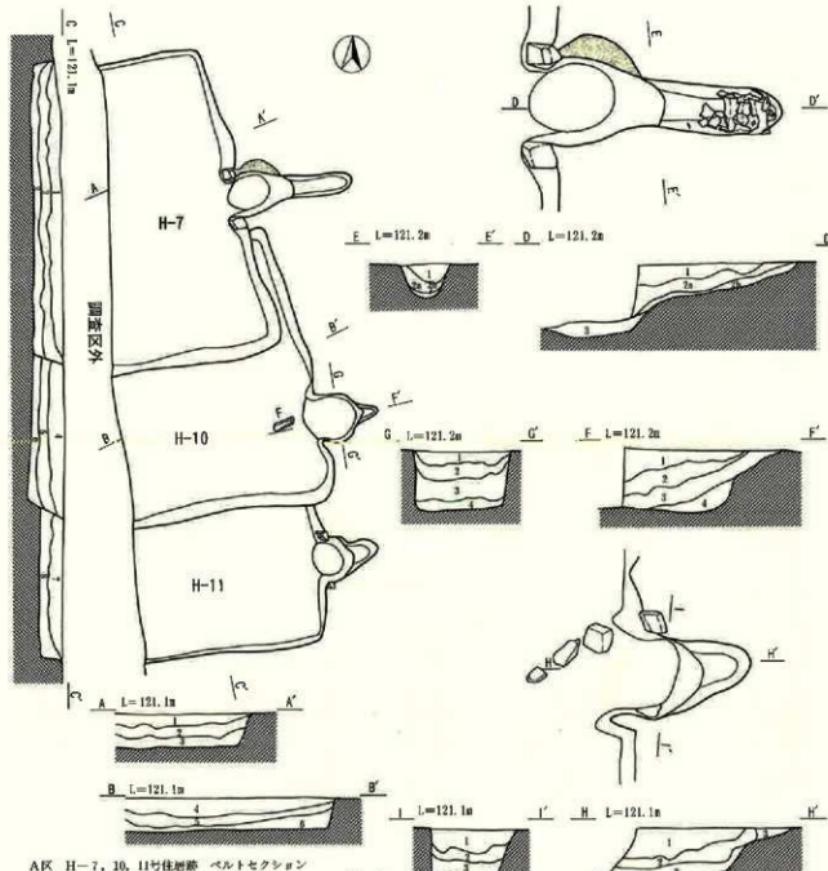


Fig. 9 H-8・9・16・29号住居跡



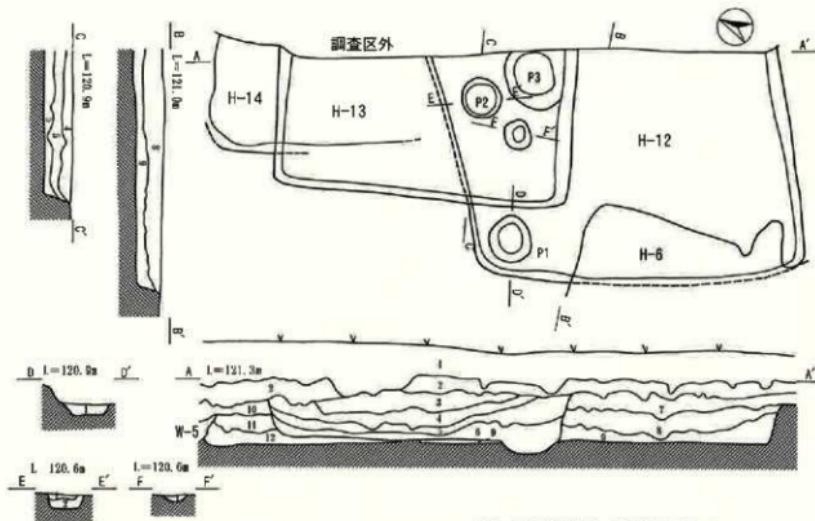
A区 H-7号住居跡 電セクション

- 1 灰褐色 粘土質 〇〇 烧土粒 2%
- 2 a 黑褐色 粘土質 〇〇 烧土ブロック 5%
- 2 b 灰褐色 粘土質 〇〇 烧土粒 5%
- 3 灰灰褐色 粘土質 〇〇 灰層 腐化物 2%

A区 H-10号住居跡 電セクション

- 1 黑褐色 粘土質 〇〇 As-C + Hr-FP20% 烧土粒 2%
- 2 灰褐色 粘土質 〇〇 烧土粒 5% 腐化物 2%
- 3 にじみ灰褐色 粘土質 〇〇 烧土粒 10%
- 4 極端灰褐色 微 〇〇 灰層

Fig. 10 H-7・10・11号住居跡



A区 H-12号住居跡 P1号柱穴セクション  
1 黒褐 粗 ○○ As-C-Hr FP5% 炭化物2%

A区 H-13号住居跡 P2号柱穴セクション  
1 黒褐 微 △○

2 喀褐色 微 △○ 硫酸20% 炭化物5% (植物多数)

A区 H-13号住居跡 P3号柱穴セクション  
1 喀褐色 微 △○ 硫化物20% 炭化物5% (植物多数)

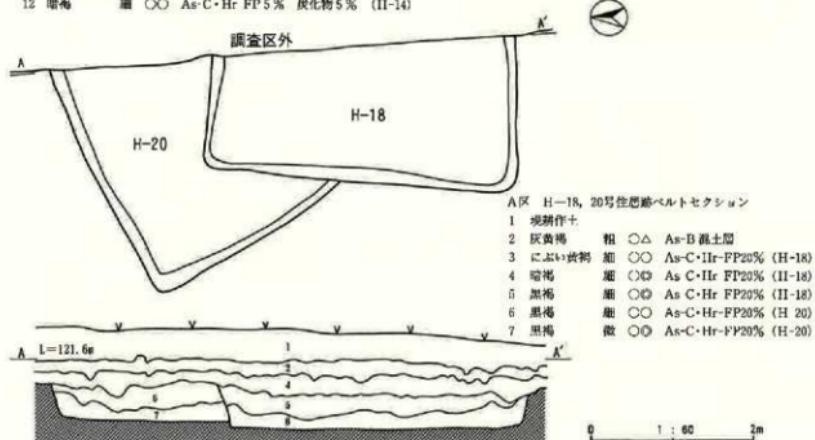


Fig. 11 H-12~14、18・20号住居跡

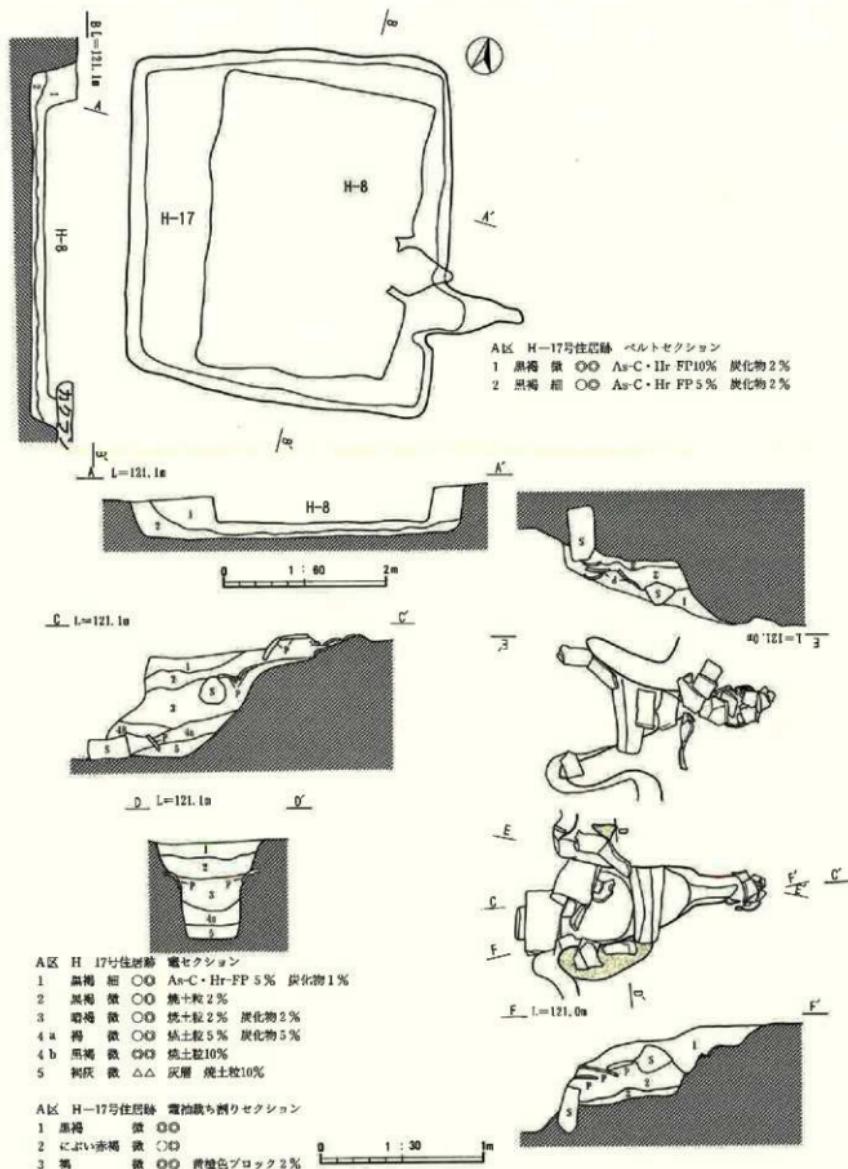


Fig. 12 H-17号住居跡

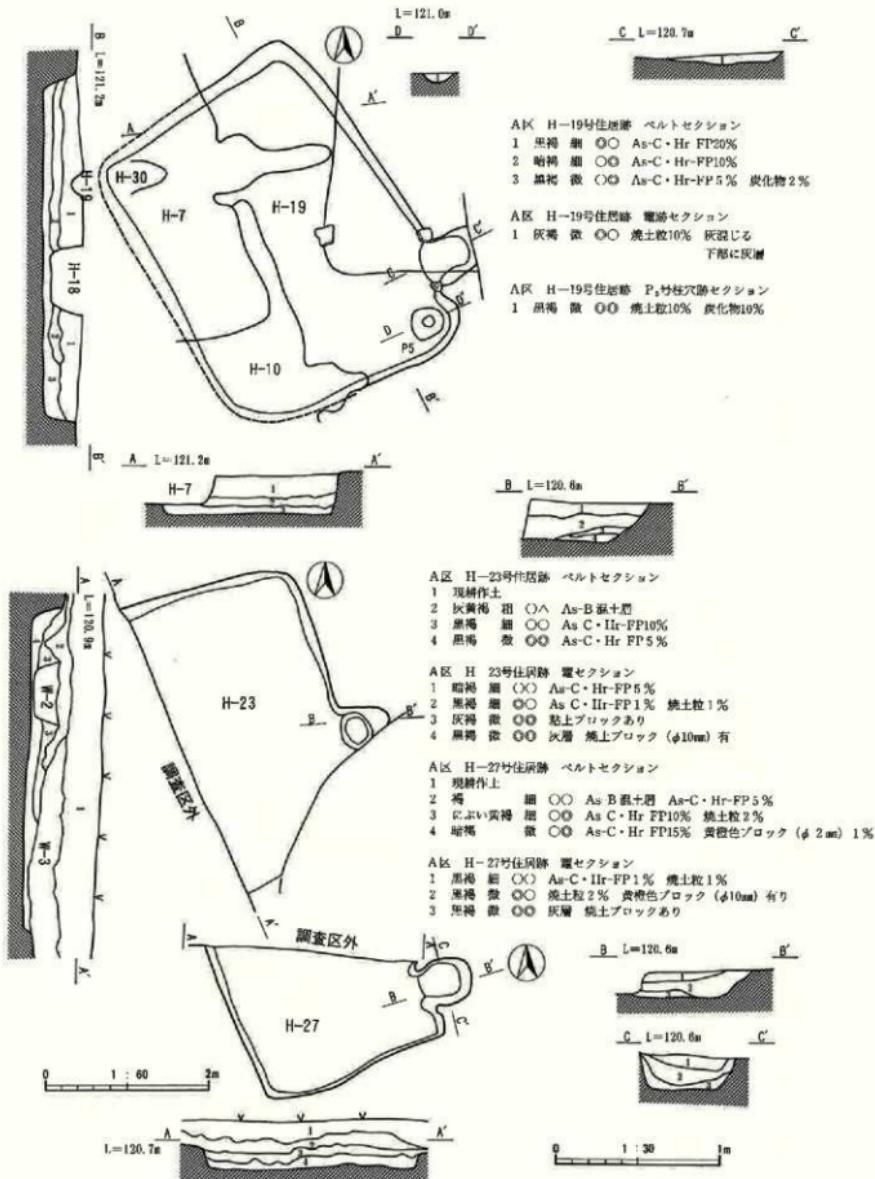


Fig. 13 H-19・23・27・30号住居跡

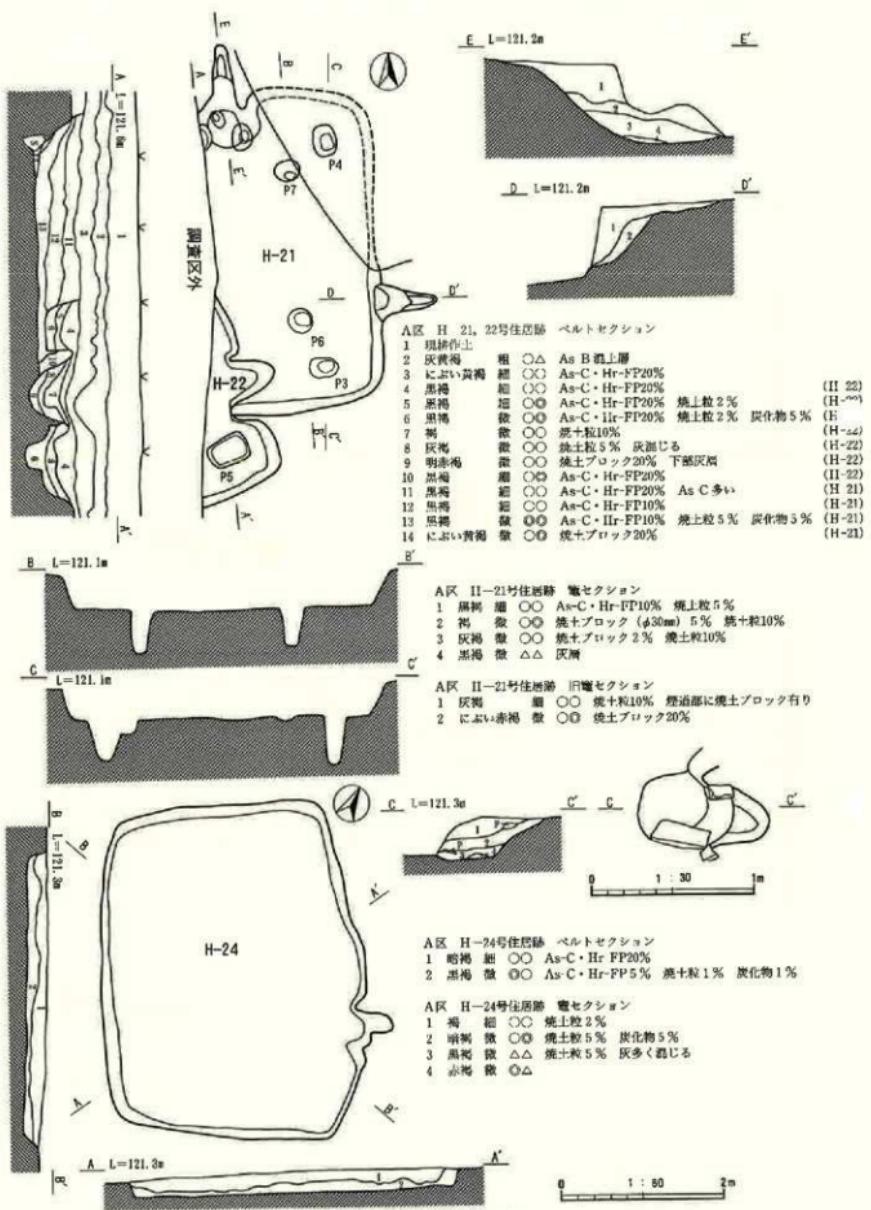


Fig. 14 H-21・22・24号住居跡

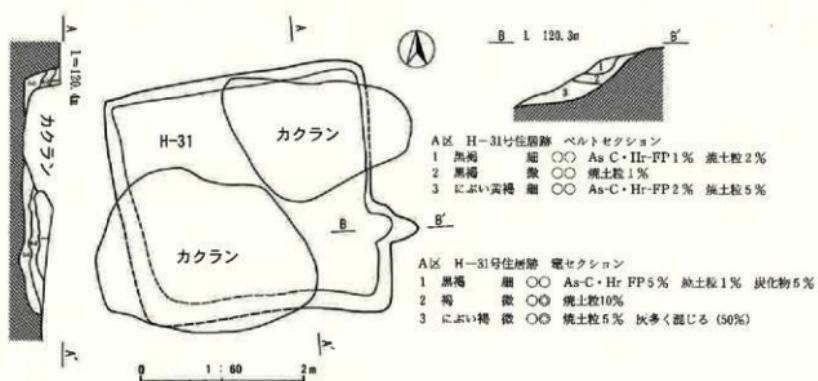
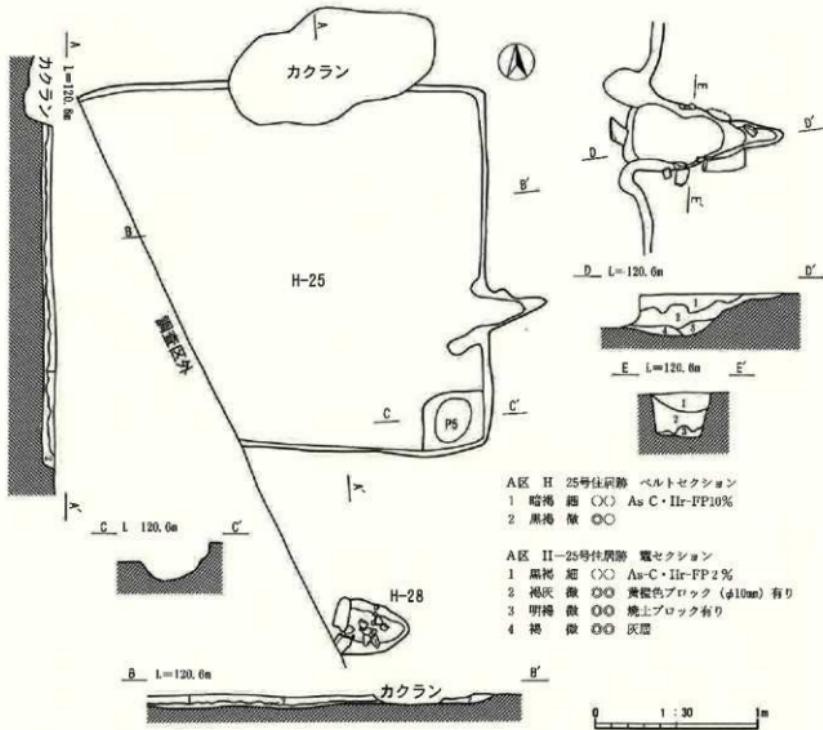


Fig. 15 H-25・31号住居跡

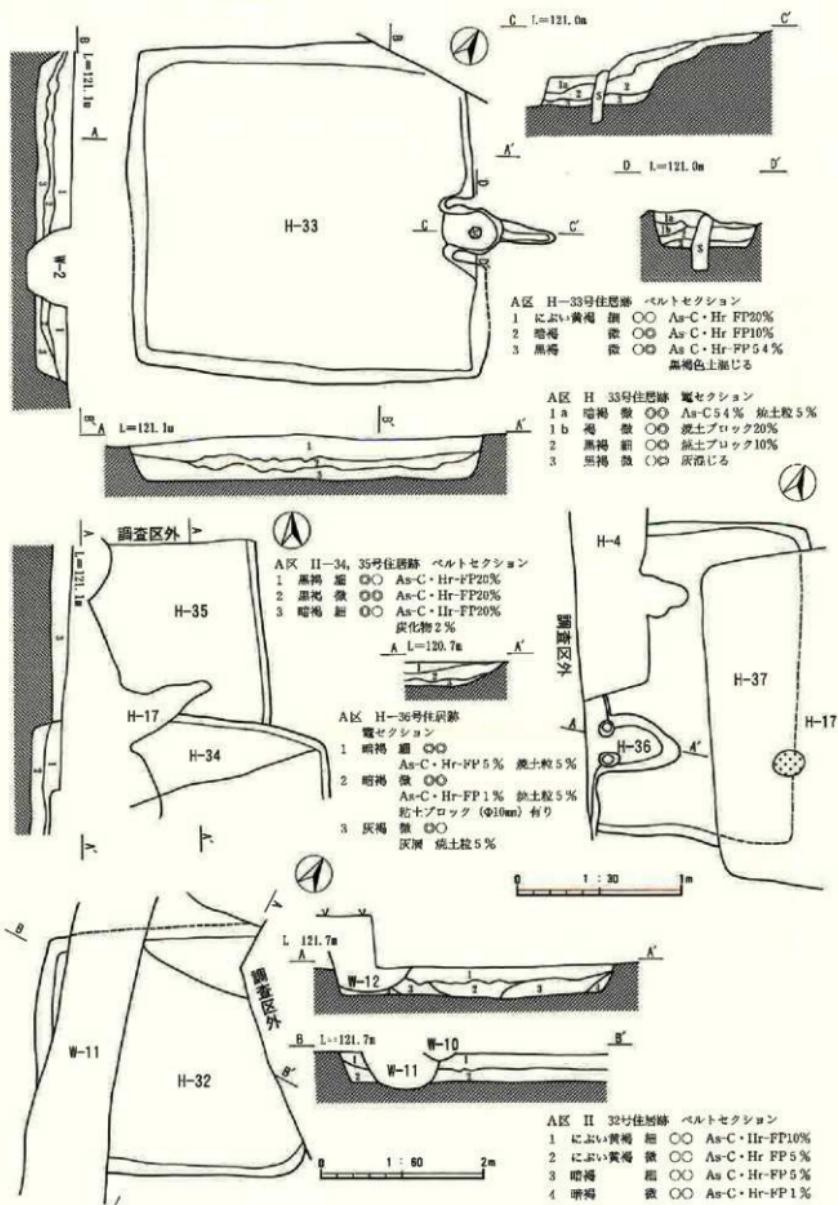


Fig. 16 H-32~37号住居跡

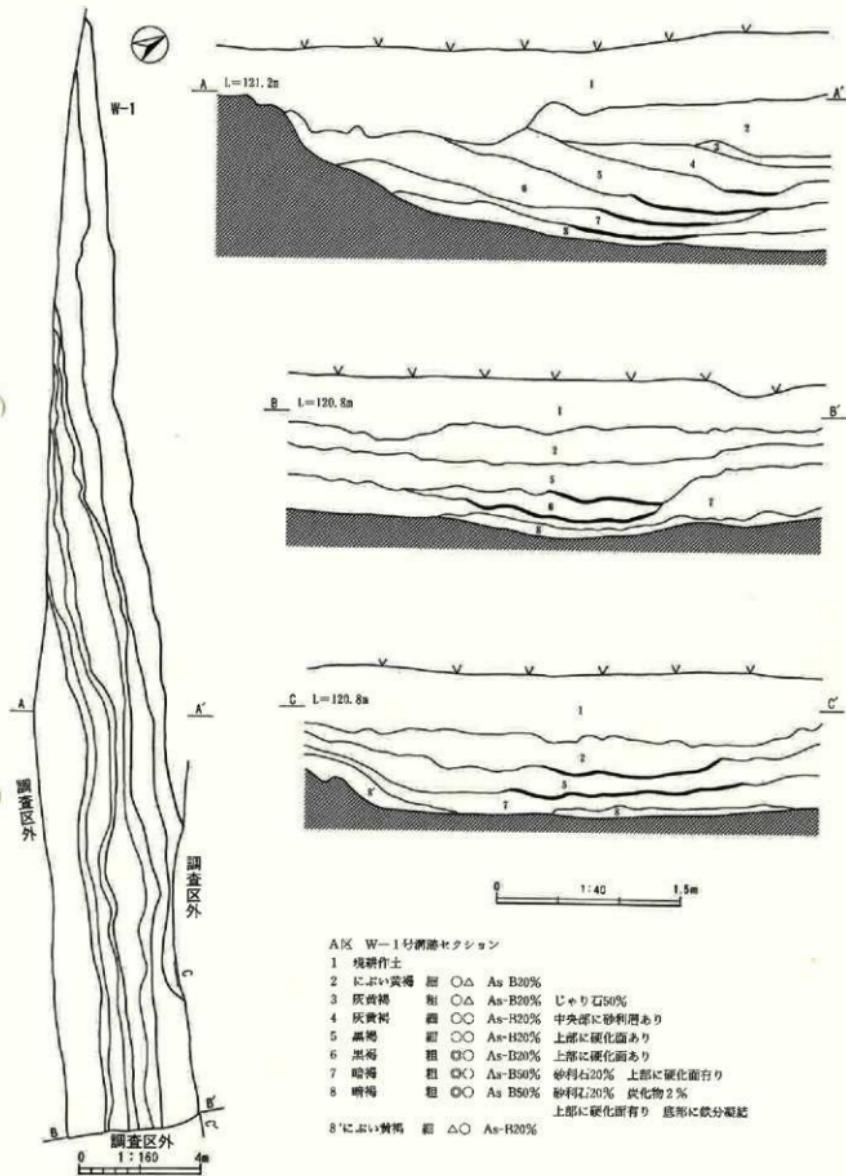


Fig. 17 W-1号測線

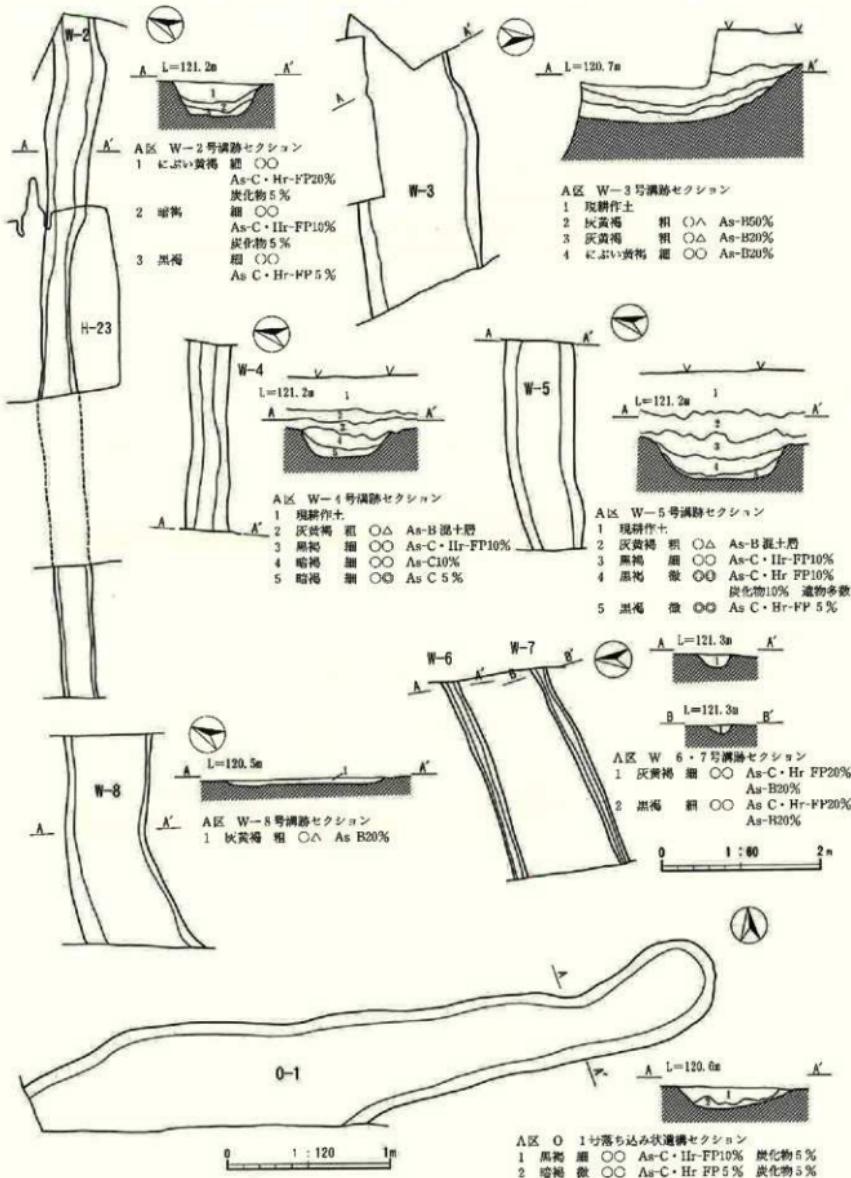


Fig. 18 W-2～8号測路、O-1号落ち込み状造構

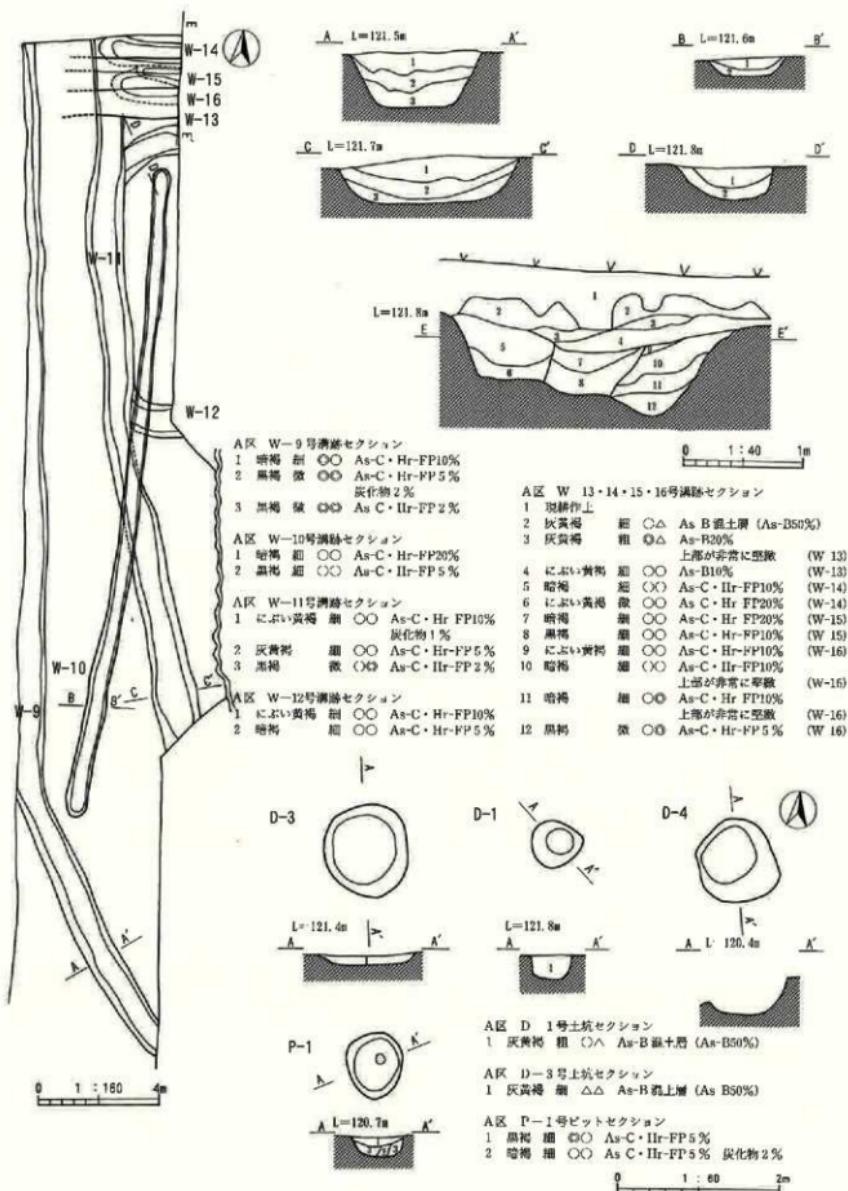


Fig. 19 W-9～16号調査、D-1・3号土坑、P-1号ビット

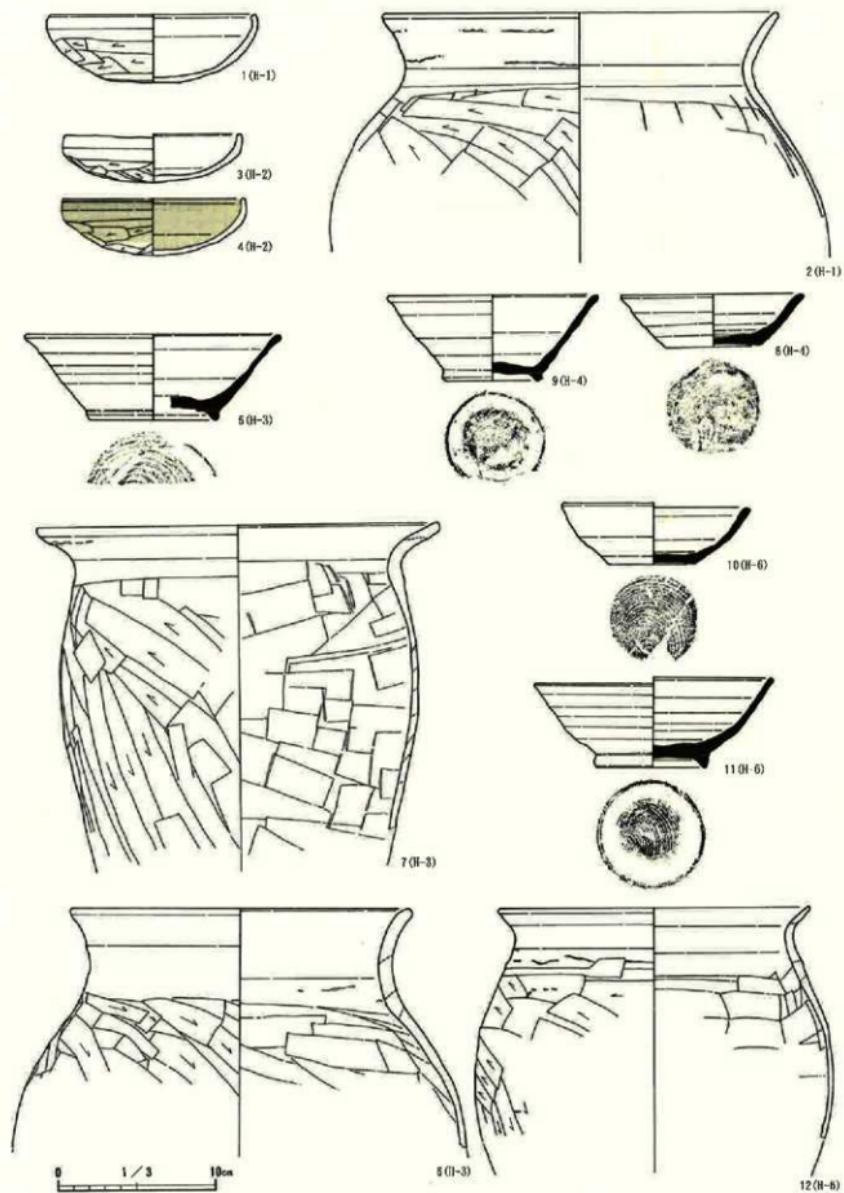


Fig. 20 H - 1 ~ 4 • 6号住居跡出土遺物

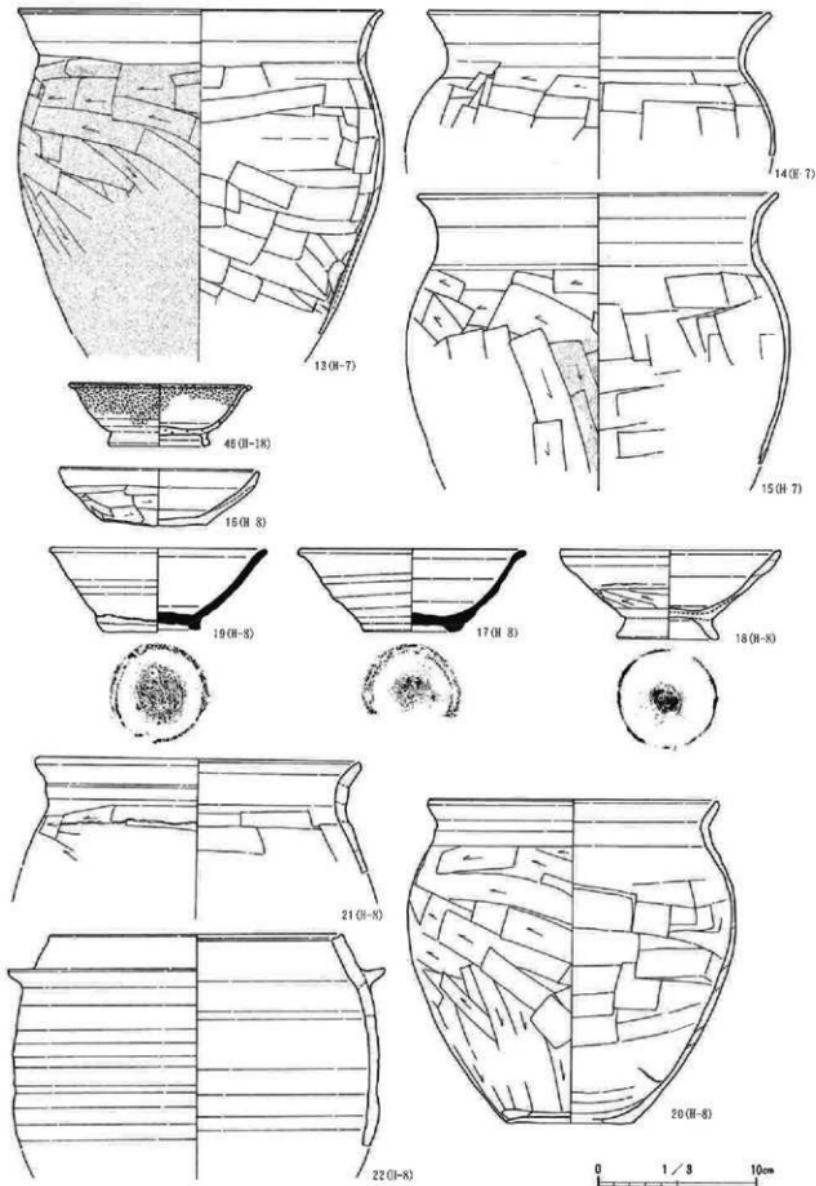


Fig. 21 H-7 • 8 • 18号住居跡出土遺物

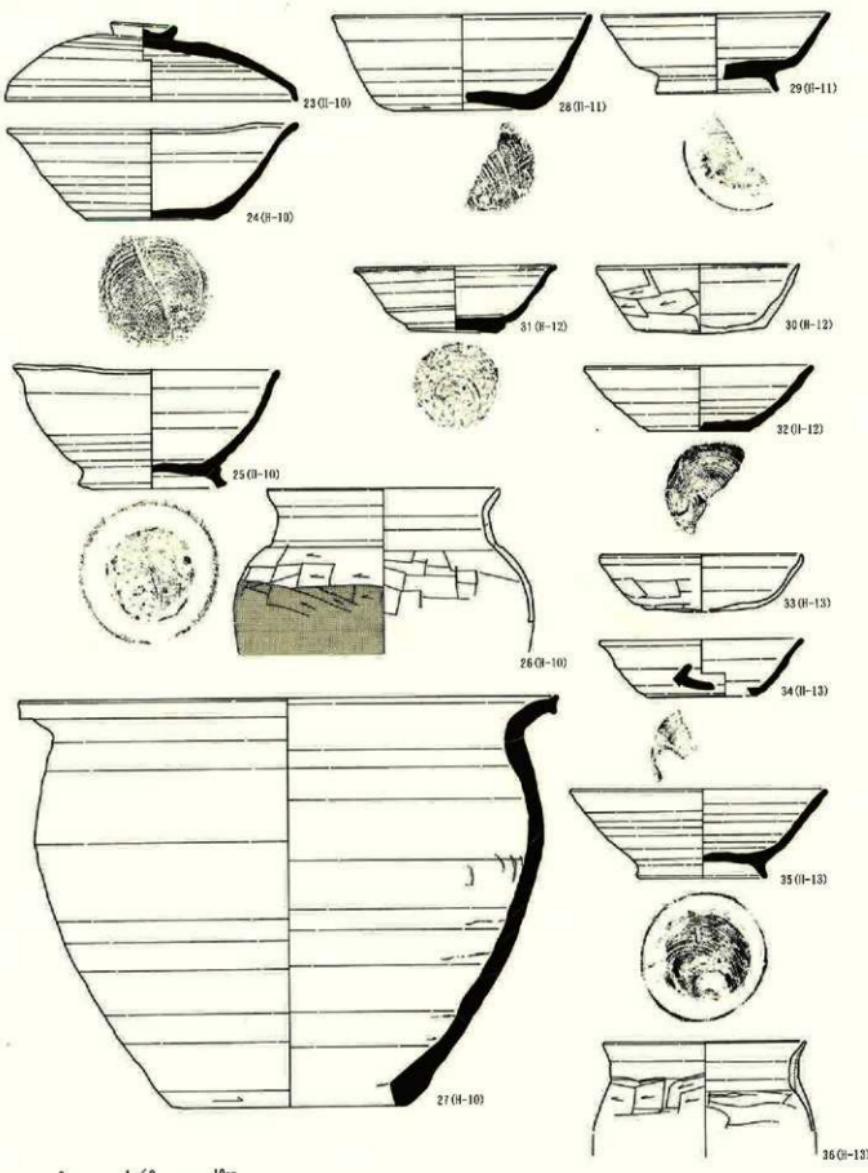


Fig. 22 H-10~13号住居跡出土遺物

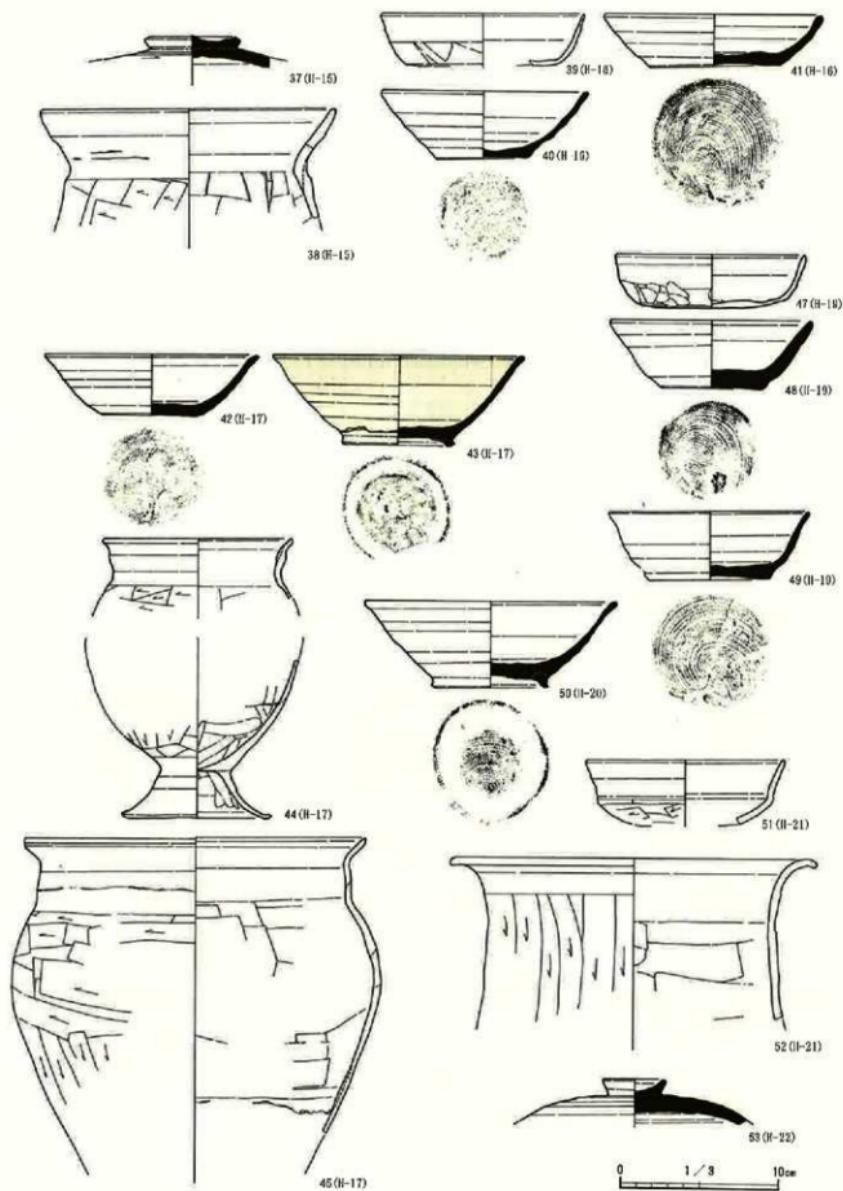


Fig. 23 H-15~17・19~22号住居出土遺物

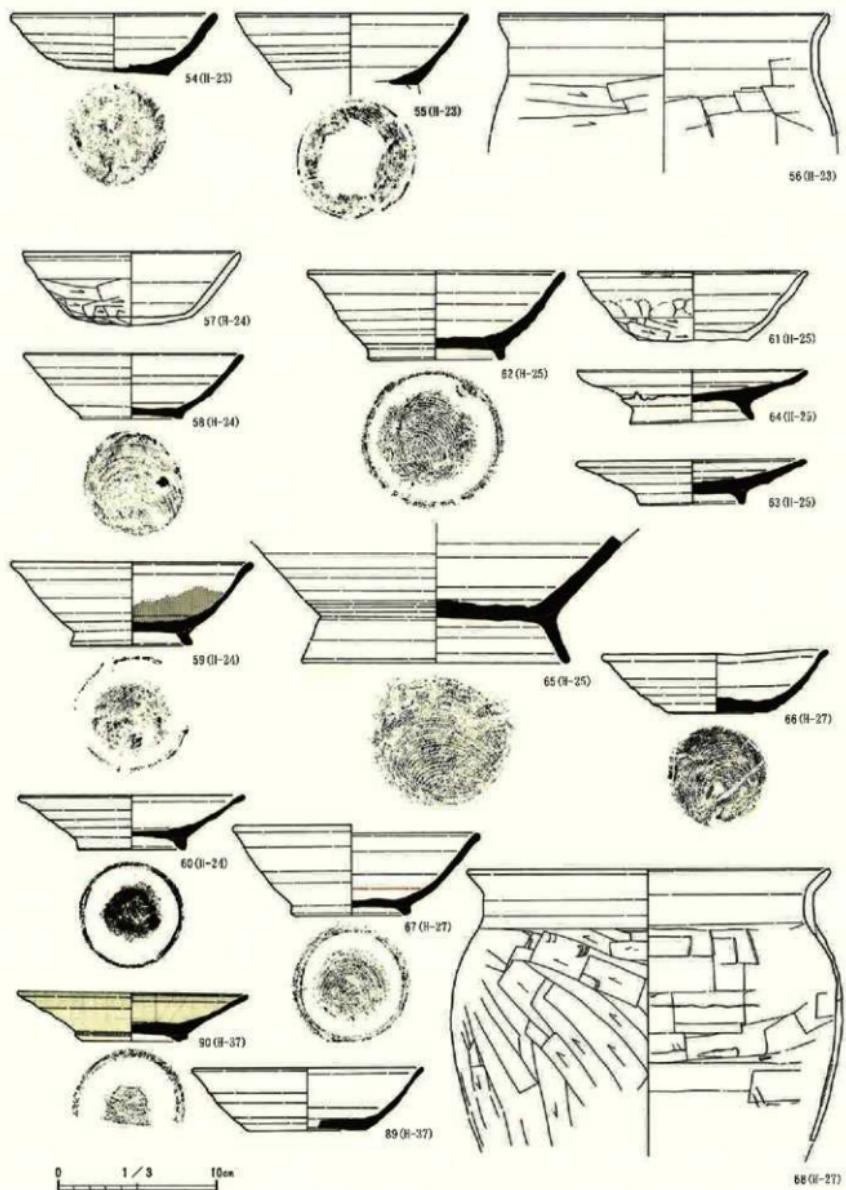


Fig. 24 H -23~25 • 27 • 37号住居跡出土遺物

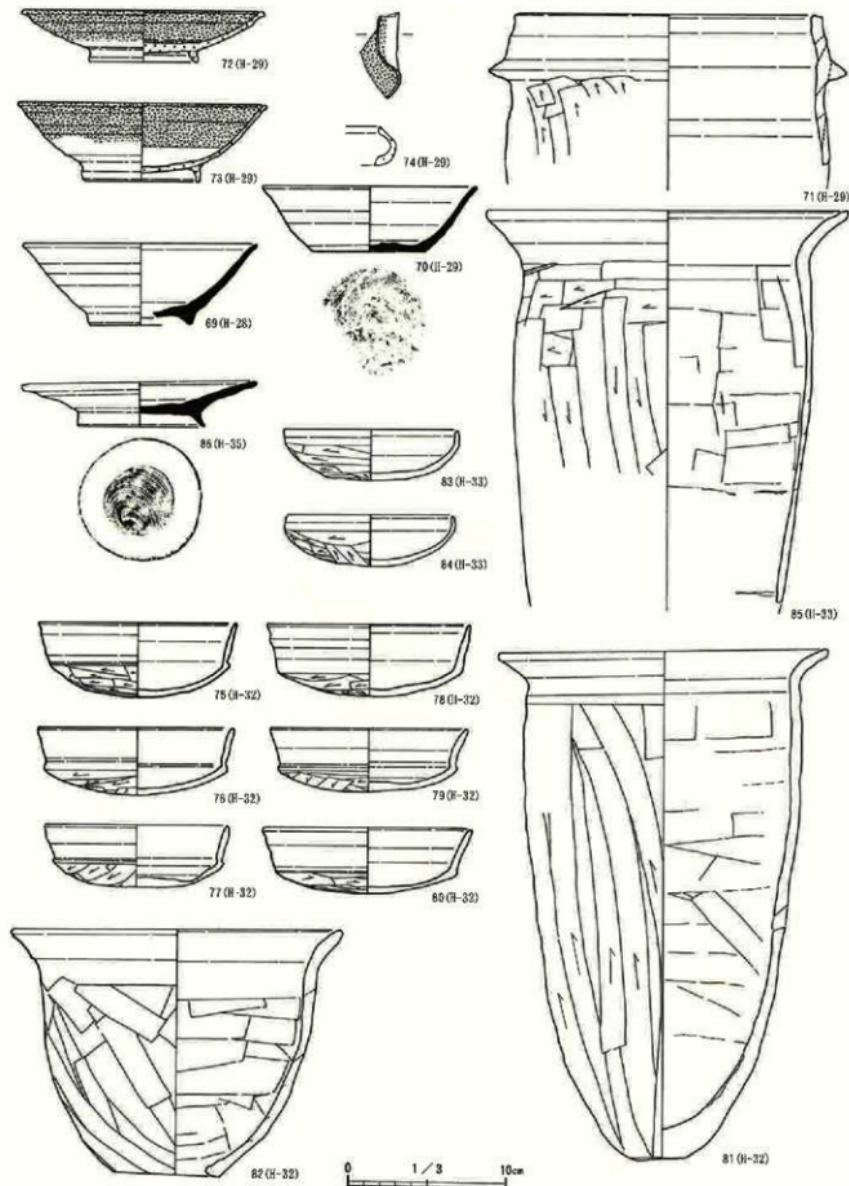


Fig. 25 H-28 • 29 • 32 • 33 • 35号住居跡出土遺物

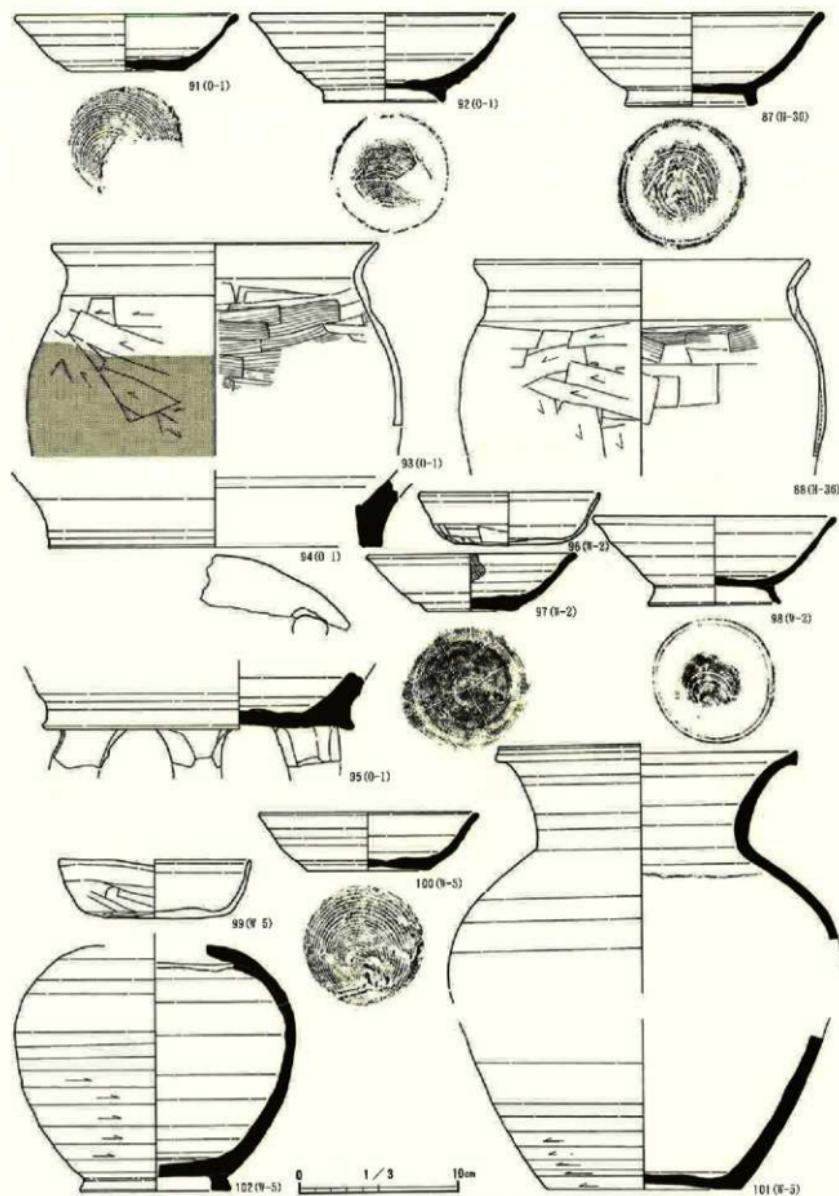


Fig. 26 II 36号住居跡、O—1号落ち込み状遺構、W—2・5号溝跡出土遺物

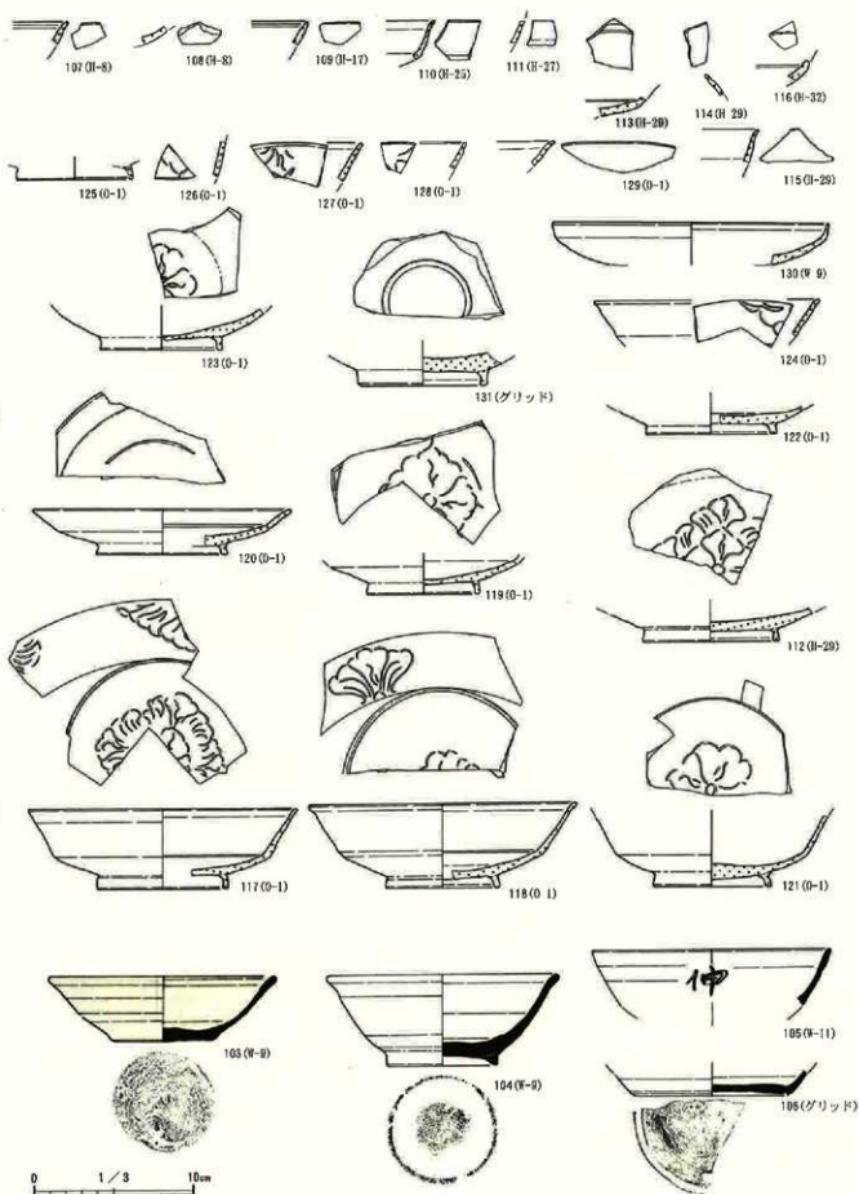


Fig. 27 緑釉陶器、W-9・11号溝跡出土物

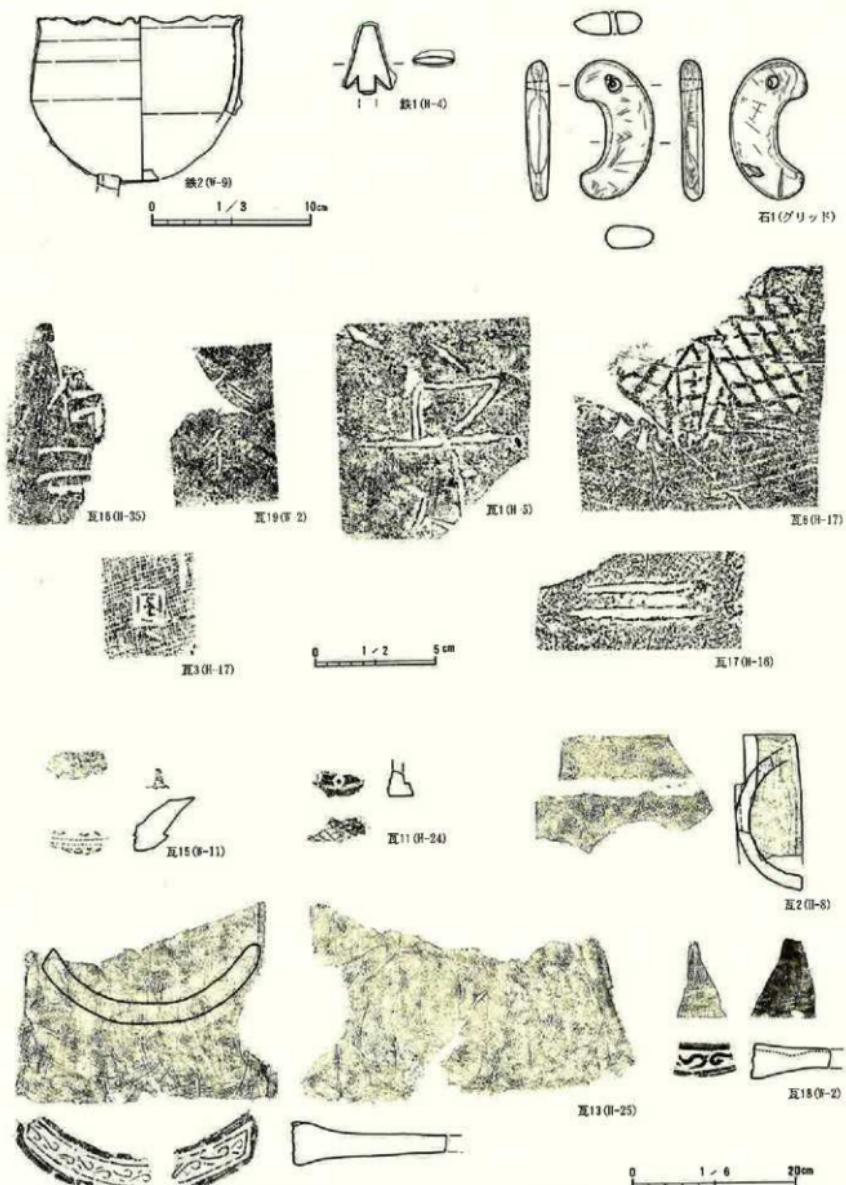
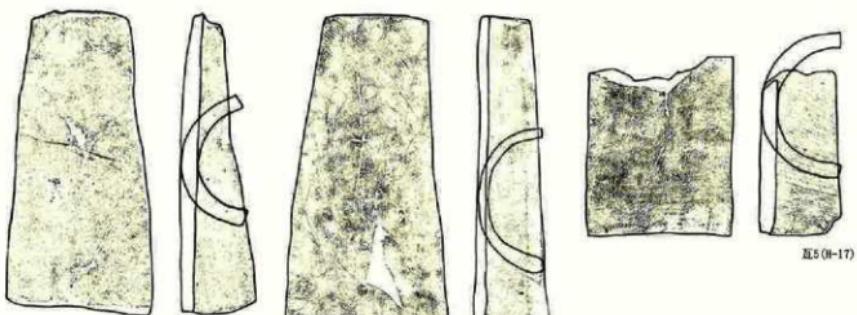
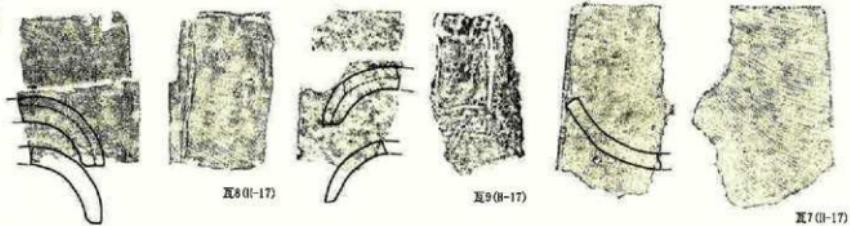


Fig. 28 鉄製品・石製品・瓦 (1)



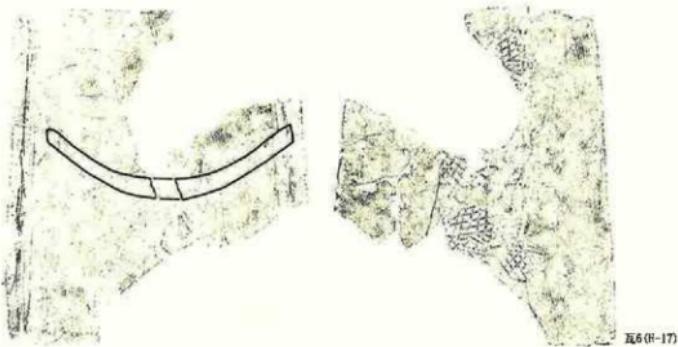
瓦4(H-17)

瓦5(H-17)

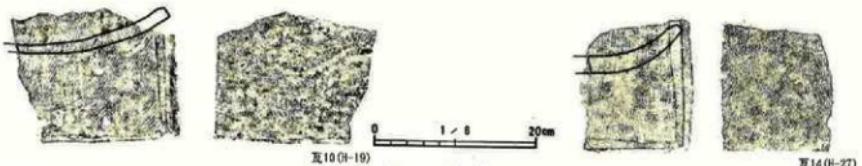


瓦9(H-17)

瓦7(H-17)



瓦6(H-17)



0 1 20cm  
瓦10(H-19)

瓦14(H-27)

Fig. 29 N. (2)



V B + C 区



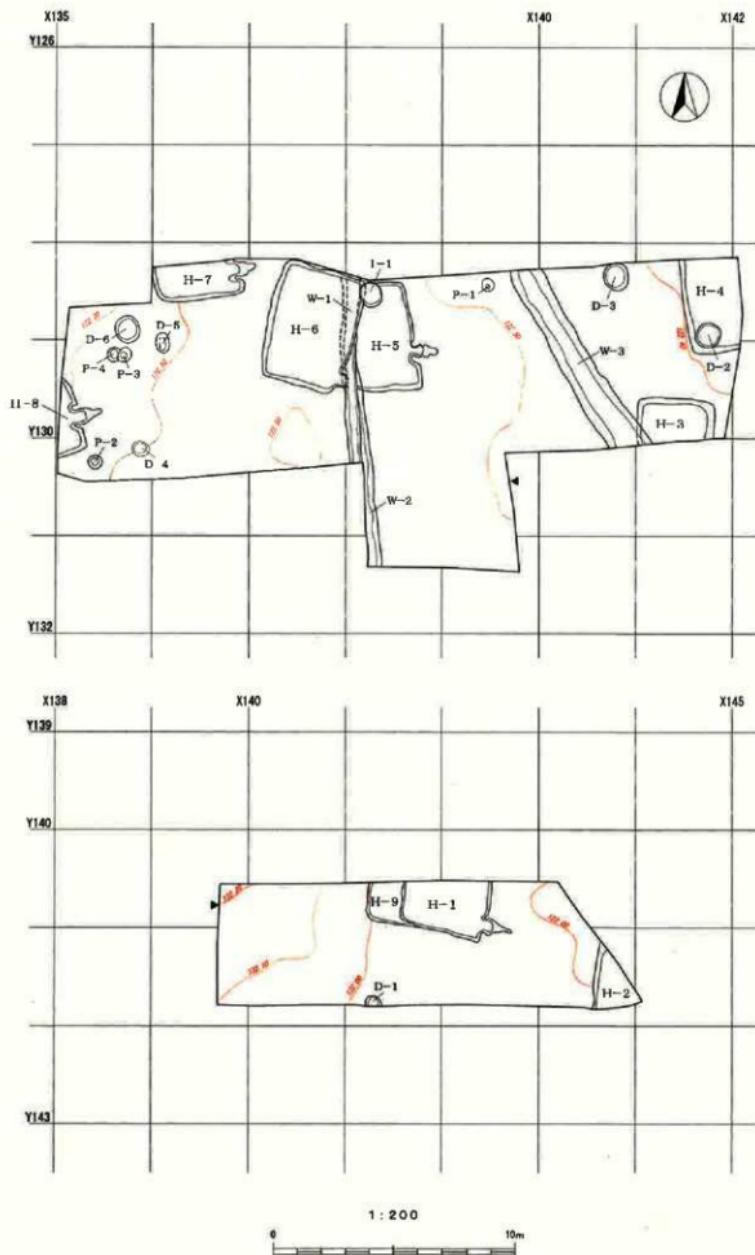


Fig. 30 元家界页岩带(8) B+C区全图

## 1 基本層序

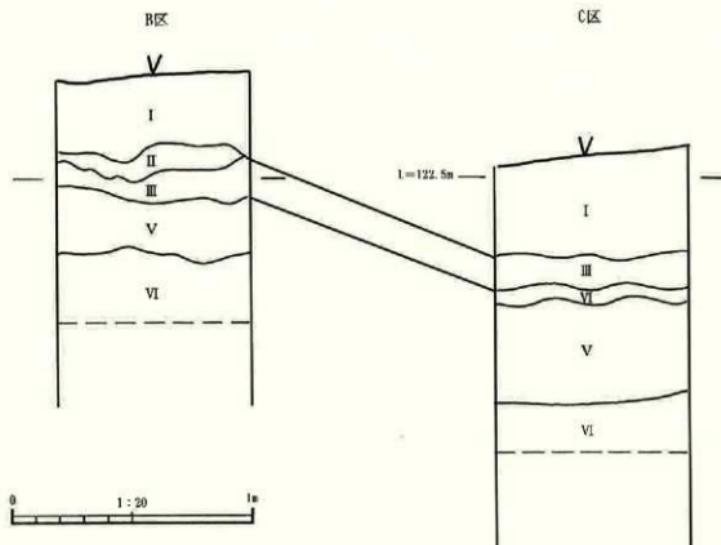


Fig. 31 B・C区基本層序

本遺跡B区・C区の地層の堆積は上記の通りである。

遺跡内の微地形はほぼ平坦であるが、B区と比べC区はやや低い位置にある。奈良・平安時代の遺構構築面はIII層で、IV層及びV層まで埋込んで構築されている。なお、B区・C区は位置が離れ色調が異なるので、それぞれに記す。

(B区)

I層 現耕作土	
II層 灰黃褐色 粗 (10YR4/2)	As B 混土層
III層 暗褐色 細 (10YR3/3)	As-C・Hr-FP 混土層
IV層 細まり○ 粘性△	
V層 褐色 細 (10YR4/4)	総社砂層の漸移層
VI層 にぼい黄褐色 細 (10YR4/3)	総社砂層

(C区)

I層 現耕作土	III層 暗褐色 細 (10YR3/3)
II層 黒褐色 微 (10YR2/2)	細まり○ 粘性○
III層 黑褐色 微 (10YR2/2)	細まり○ 粘性○
IV層 黑褐色 微 (10YR2/2)	細まり○ 粘性○
V層 褐色 細 (10YR4/4)	細まり○ 粘性○
VI層 にぼい黄褐色 細 (10YR4/3)	細まり○ 粘性○

## 2 遺構と遺物

### (1) 壊穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.32・36・37、PL. 8・14)

位置 X141・142、Y140・141グリッド 主軸方向 N-108°-E 規模 東西3.66m、南北2.82m、壁現高27.0cm。面積 7.62m<sup>2</sup> 床面 全体的に平坦で堅緻な貼り床。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-104°-E。全長134cm、最大幅84cm、焚口部幅38cm。構築材に粘土、瓦を用いる。貯蔵穴 長径70cm、短径57cm、深さ57cmの梢円形。重複 H-9と重複しており、新旧関係はH-9→本遺構の順である。出土遺物 土師器37点、須恵器20点、瓦13点、鉄類2点。そのうち壊1点、瓦1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

H-2号住居跡 (Fig.32・36、PL. 8)

位置 X143・144、Y144グリッド 主軸方向 N-96°-E 規模 東西[2.10]m、南北[2.72]m、壁現高45.0cm。面積 (3.04)m<sup>2</sup> 床面 平坦でやや堅緻な貼り床。竈 不明。出土遺物 土師器1点、瓦1点。備考 時期は覆土から上限はHr-FP降下以降、下限はAs-B降下以前と考えられる。

H-3号住居跡 (Fig.34・36、PL. 9)

位置 X141、Y129・130グリッド 主軸方向 N-94°-E 規模 東西3.32m、南北(2.02)m、壁現高48.0cm。面積 (5.44)m<sup>2</sup> 床面 堅緻ではほぼ平坦な貼り床。竈 不明。出土遺物 土師壊37点、須恵器20点、瓦13点、鉄類2点。備考 時期は覆土から上限はHr-FP降下以降、下限はAs-B降下以前と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig.33・36・37、PL. 9・14)

位置 X141・142、Y128・129グリッド 主軸方向 N-81° E 規模 東西(2.94)m、南北(4.03)m、壁現高38.0cm。面積 (8.29)m<sup>2</sup> 床面 やや堅緻な貼り床。竈 不明。出土遺物 土師壊50点、須恵器47点、綠釉陶器1点、瓦11点、石類2点。そのうち壊1点、高台鉢1点、瓦1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-5号住居跡 (Fig.33・36・37、PL. 9・14)

位置 X138、Y128・129グリッド 主軸方向 N-79° E 規模 東西(2.79)m、南北4.58m、壁現高31.0cm。面積 9.91m<sup>2</sup> 床面 やや堅緻な貼り床。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-91°-E。全長118cm、最大幅103cm、焚口部幅26cm。構築材に凝灰岩・川原石・瓦・須恵器を用い、黒褐色の粘土で被覆している。重複 H-6と重複しており、新旧関係はH-6→H-5の順である。出土遺物 土師壊102点、須恵器161点、瓦15点、鉄類1点。そのうち壊1点、高台碗2点、羽釜1点、瓦3点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig.33・36・37、PL. 9・14)

位置 X137・138、Y128・129グリッド 主軸方向 N-108°-E 規模 東西3.84m、南北5.02m、壁現高72.0cm。面積 17.12m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦な床。竈 東壁南に位置する。主軸方向N-116°-E。全長56cm、最大幅76cm、焚口部幅40cm。構築材に凝灰岩・瓦を用い、粘性の弱い粘土で被覆している。貯蔵穴 P 5 a 長径

48cm、短径42cm、深さ19cmの円形。P 5 b 長径64cm、短径56cm、深さ46cmの円形。重複 H-5と重複しており、新旧関係はH-5→木造構の順である。出土遺物 土師壺201点、須恵器59点、灰釉陶器3点、瓦25点、鉄類2点。そのうち壺6点、高台皿1点、瓦4点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から11世紀前葉と考えられる。

#### H-7号住居跡 (Fig.34・36, PL. 9・15)

位置 X136・137、Y128グリッド 主軸方向 N 82°-E 規模 東西3.76m、南北(1.60)m、壁現高41.0cm。面積 (5.29)m<sup>2</sup> 床面 やや堅敏な貼り床。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-78°-E。全長120cm、最大幅88cm、焚口部幅48cm。構築材に粘土を用いている。出土遺物 土師壺118点、須恵器5点、石類2点。そのうち壺6点、壺2点、甕1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から8世紀前葉から中葉と考えられる。

#### H-8号住居跡 (Fig.34・36)

位置 X135、Y128・129グリッド 主軸方向 N-76°-E 規模 東西(1.30)m、南北(3.18)m、壁現高45.0cm。面積 (2.65)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦な床。竈 東壁南寄りに位置する。主軸方向N-74° E。全長140cm、最大幅118cm、焚口部幅38cm。構築材に粘土を用いている。出土遺物 土師壺101点、須恵器4点、鉄類1点。そのうち壺1点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から8世紀前葉と考えられる。

#### H-9号住居跡 (Fig.32・36・37, PL. 8・15)

位置 X141、Y140・141グリッド 主軸方向 N-96°-E 規模 東西[2.34]m、南北(1.60)m、壁現高13.0cm。面積 (2.35)m<sup>2</sup> 床面 部分的に堅敏で平坦な床。竈 不明。重複 H-1と重複しており、新旧関係は本造構→H-1の順である。出土遺物 土師壺4点、須恵器2点、瓦1点、鉄類9点。そのうち壺1点、鉄類2点を図示。備考 時期は覆土や出土遺物から10世紀代と考えられる。

## (2) 溝 跡

#### W-1号溝跡 (Fig.35)

位置 X137・138、Y128~130グリッド 主軸方向 N-1° W 長さ 7.4m 最大幅 上幅0.62m、下幅0.34m 深さ 30.5cm 形状等 逆台形 重複 W-2重複し、新旧関係は本造構→W-2の順である。出土遺物 土師器51点、須恵器21点、瓦4点。備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から Hr-FP 降下以降から As-B 降下以前と考えられる。

#### W-2号溝跡 (Fig.35)

位置 X137・138、Y128~131グリッド 主軸方向 N-6°-W 長さ 11.9m 最大幅 上幅1.20m、下幅0.78m 深さ 13.5cm 形状等 逆台形 重複 W-2重複し、新旧関係はW-1→木造構の順である。出土遺物 土師器54点、須恵器23点。備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から As-B 降下以降と考えられる。

#### W-3号溝跡 (Fig.35)

位置 X139・140、Y128・129グリッド 主軸方向 N-32° W 長さ 8.5m 最大幅 上幅1.52m、下幅0.90m 深さ 18.5cm 形状等 U字形 備考 流水の痕跡無し。時期は覆土から As-B 降下以降と考えられる。

(3) 土坑・ピット・井戸跡 (Fig.15・36)

土坑・ピット・井戸跡については、Tab.12 土坑・ピット・井戸跡計測表（P58）を参照のこと。なお、D-1の土師器1点を図示した。

(4) グリッド等出土遺物

織文土器2点、土師器84点、須恵器39点、瓦13点、灰釉陶器2点、鉄類1点を出土した。

Tab.10 B・C区 住居跡等一覧表

遺構名	位 置	規 模 (m)		面積 (m <sup>2</sup> )	主軸方向	電		周辺	主な出土遺物		
		東西	南北			位 置	構築材		土器類	須恵器	その他
H-1	X141・142 Y140・141	3.66	2.82	27	N 108°-E	東壁南寄	粘土、瓦	-	环	瓦	
H-2	X143・144 Y144	[2.10]	[2.72]	45	(3.04)	N-96°-E	-	-	-	-	
II-3	X141 Y129・130	3.32	(2.02)	48	(5.44)	N-94°-E	-	-	-	-	
H-4	X141・142 Y128・129	(2.94)	(4.03)	38	(8.29)	N- 81° E	-	-	环、高台跡	瓦	
H-5	X138 Y128・129	(2.79)	4.58	31	(9.91)	N-79°-E	東壁中央南寄	砾灰岩、山原石、瓦、遺物	-	环、高台跡、羽釜	瓦、鐵鋌
H-6	X137・138 Y128・129	3.84	5.02	72	17.12	N-108°-E	東壁南	瓦、粘土	-	环、高台跡	瓦
H-7	X136・137 Y128	3.76	(1.60)	41	(5.29)	N-82°-E	東壁南寄	粘土	-	环、甕	
H-8	X135 Y128・129	(1.30)	(3.18)	45	(2.65)	N 76°-E	東壁南寄	黑褐色粘質土	-	环	
H-9	X141 Y140・141	[2.34]	(1.60)	13	(2.35)	N-90°-E	-	-	-	环	鐵釘

Tab.11 B・C区 溝跡計測表

遺構名	位 置	長さ(m)	深さ(cm)		上幅(cm)		下幅(cm)		主軸方向	断面形	時 期
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-1	X137・138 Y128～130	7.4	30.5	14.0	62.0	42.0	34.0	23.0	N-1°-W	逆台形	古 代
W-2	X137・138 Y128～131	11.9	13.5	6.5	120.0	96.0	78.0	56.0	N-6°-W	逆台形	中世以降
W-3	X139・140 Y128・129	8.5	18.5	12.5	152.0	114.0	90.0	52.0	N-32° W	U字形	中世以降

Tab.12 B・C区 上坑・ピット・井戸跡計測表

遺構名	位 置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	山上遺物	備 考
D-1	X141 Y141	70	40	35.5	橢円形	土 4	
D-2	X141 Y128・129	102	96	4.5	橢円形	土13	
D-3	X140 Y128	110	102	49.0	橢円形	瓦 1	
D-4	X135 Y130	72	60	42.0	橢円形	土 2	
D-5	X136 Y128・129	84	56	47.0	橢円形	土15	
D-6	X135 Y128・129	110	100	39.0	円 形	土 7、須 1	
P-1	X139 Y128	54	50	37.5	橢円形		
P-2	X135 Y130	58	54	28.0	円 形	土 1	
P-3	X135 Y129	67	50	39.0	橢円形	土 4、須 1	
P-4	X135 Y129	60	54	50.0	円 形	土 3	
I-1	X138 Y128	104	90	70以上	円 形	土11、瓦 1	

※ 土…土器帶、須…須恵器



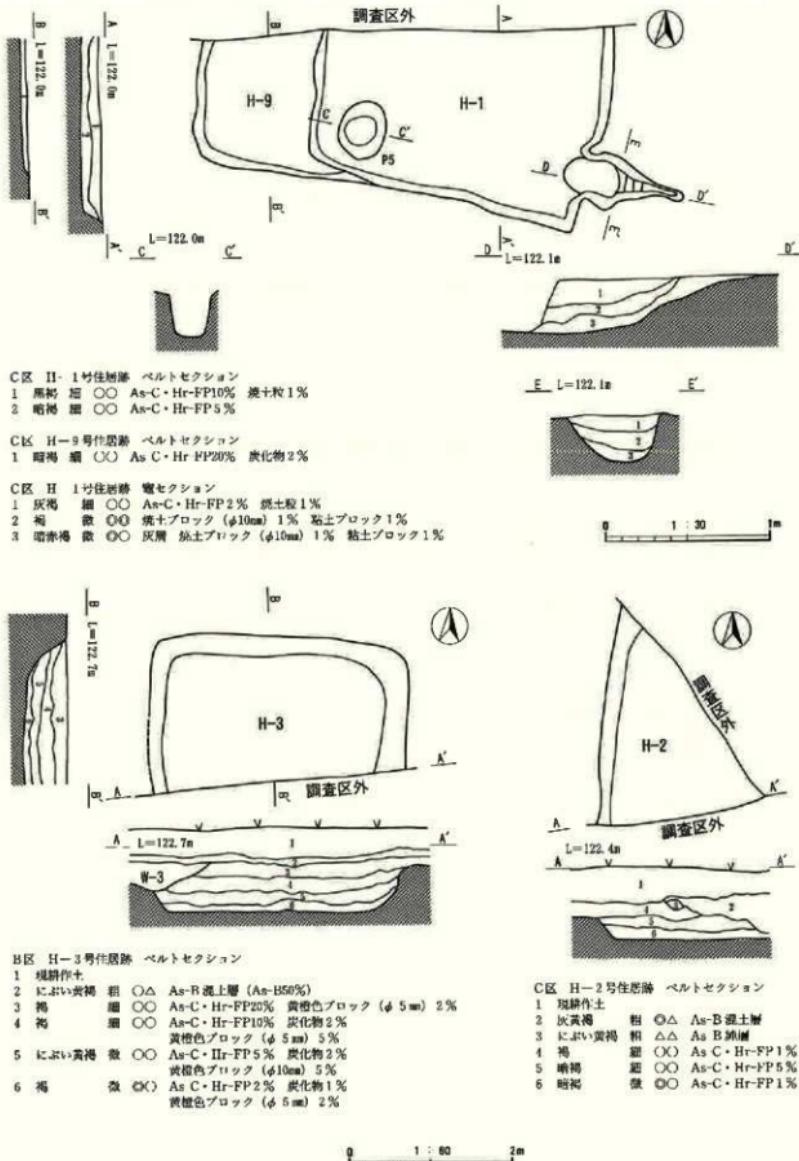


Fig. 32 H-1 ~ 3・9号住居跡

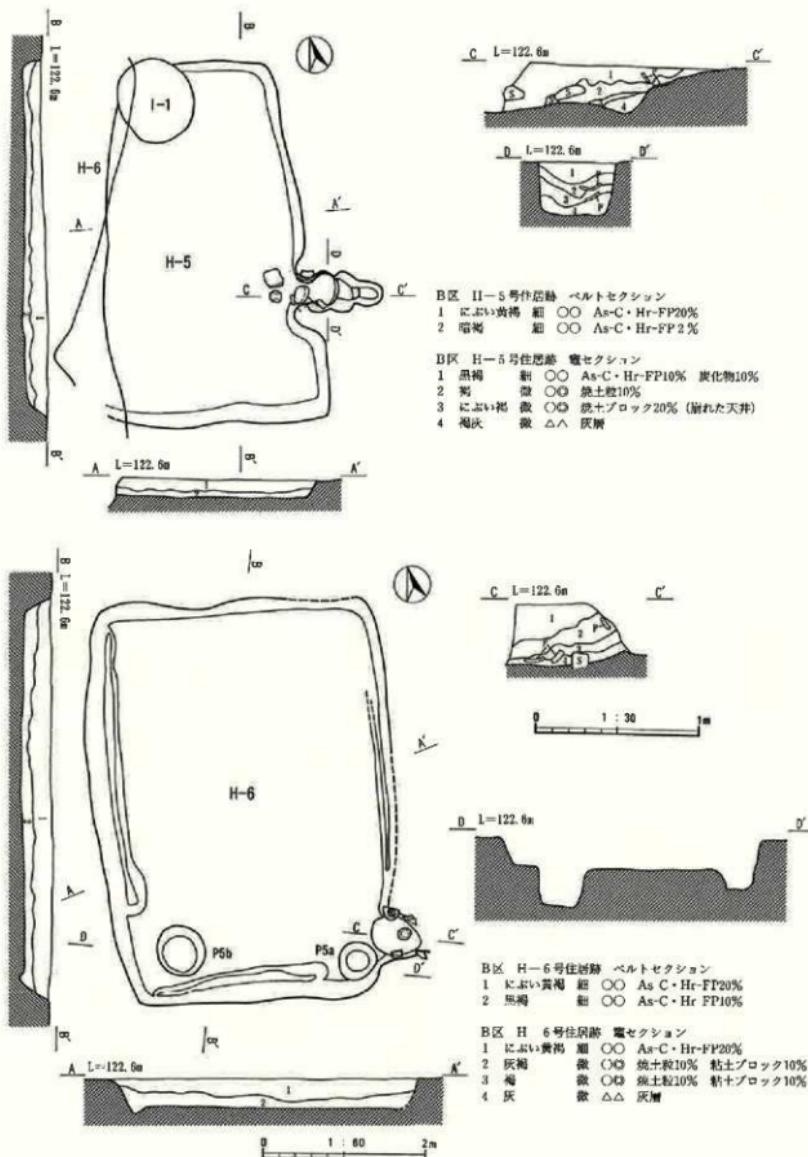


Fig. 33 H-5・6号住居跡

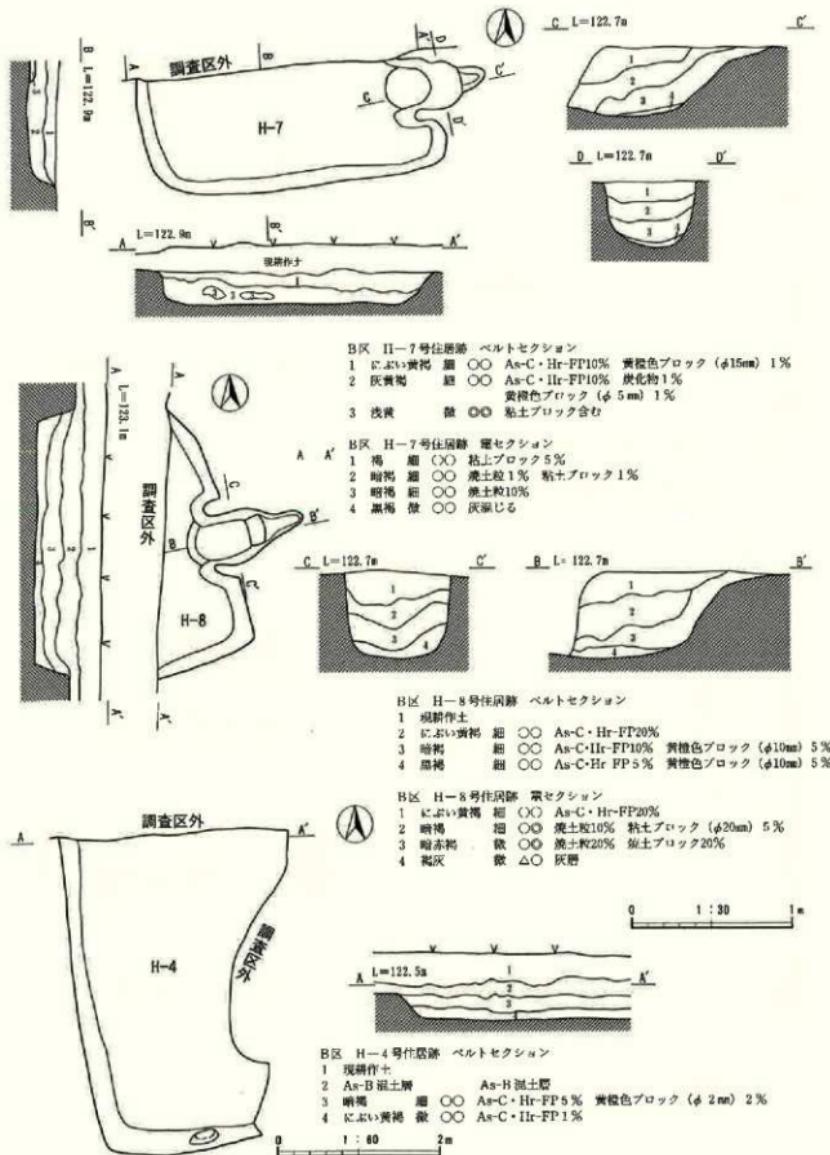


Fig. 34 H-4・7・8号住居跡

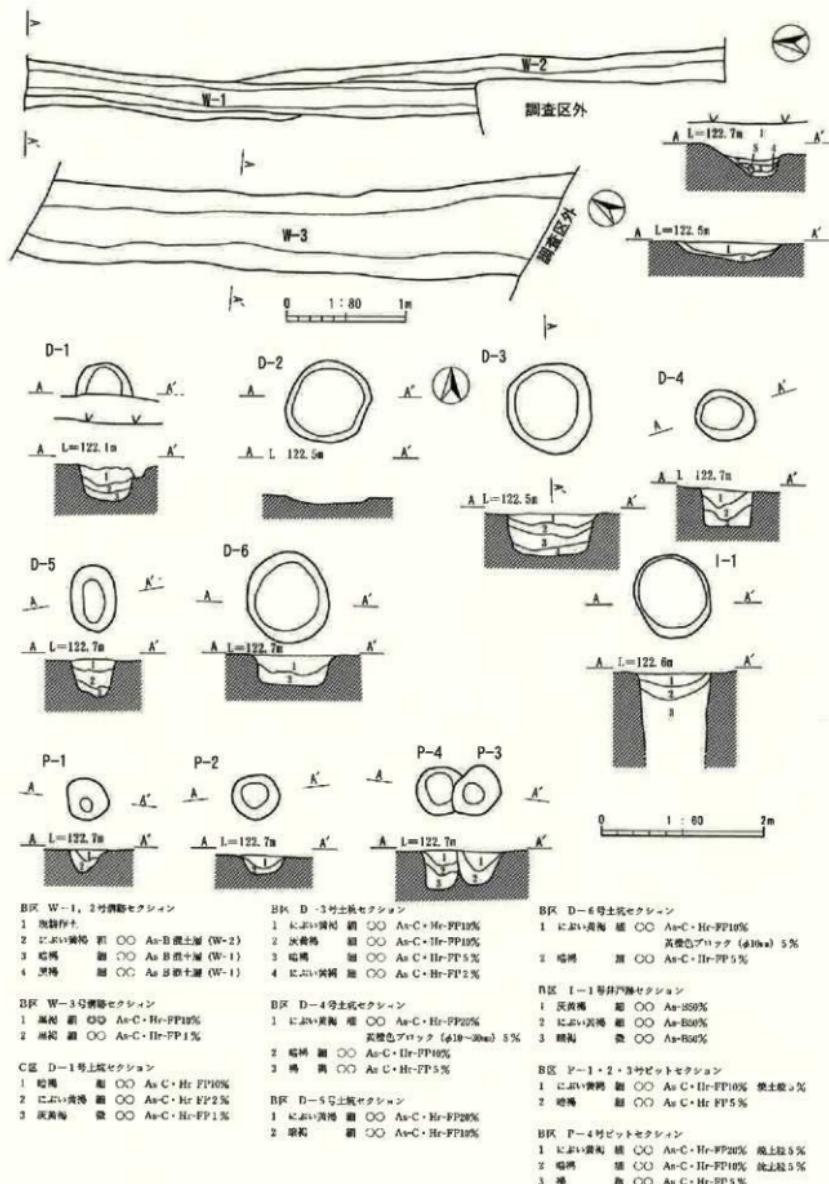


Fig. 35 W-1～3号溝跡, D-1～6号土坑, I-1号井戸跡, P-1～4号ビット

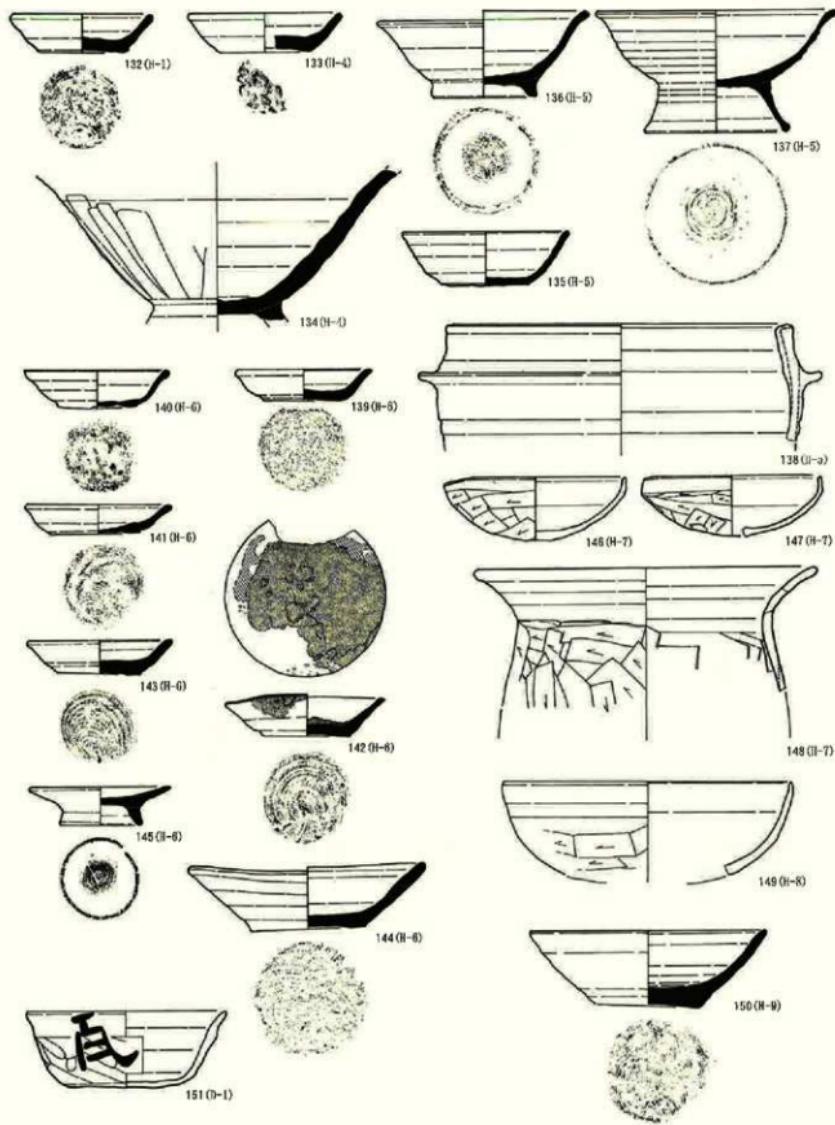


Fig. 36 H-1 • 4 ~ 9 号住居跡出土遺物

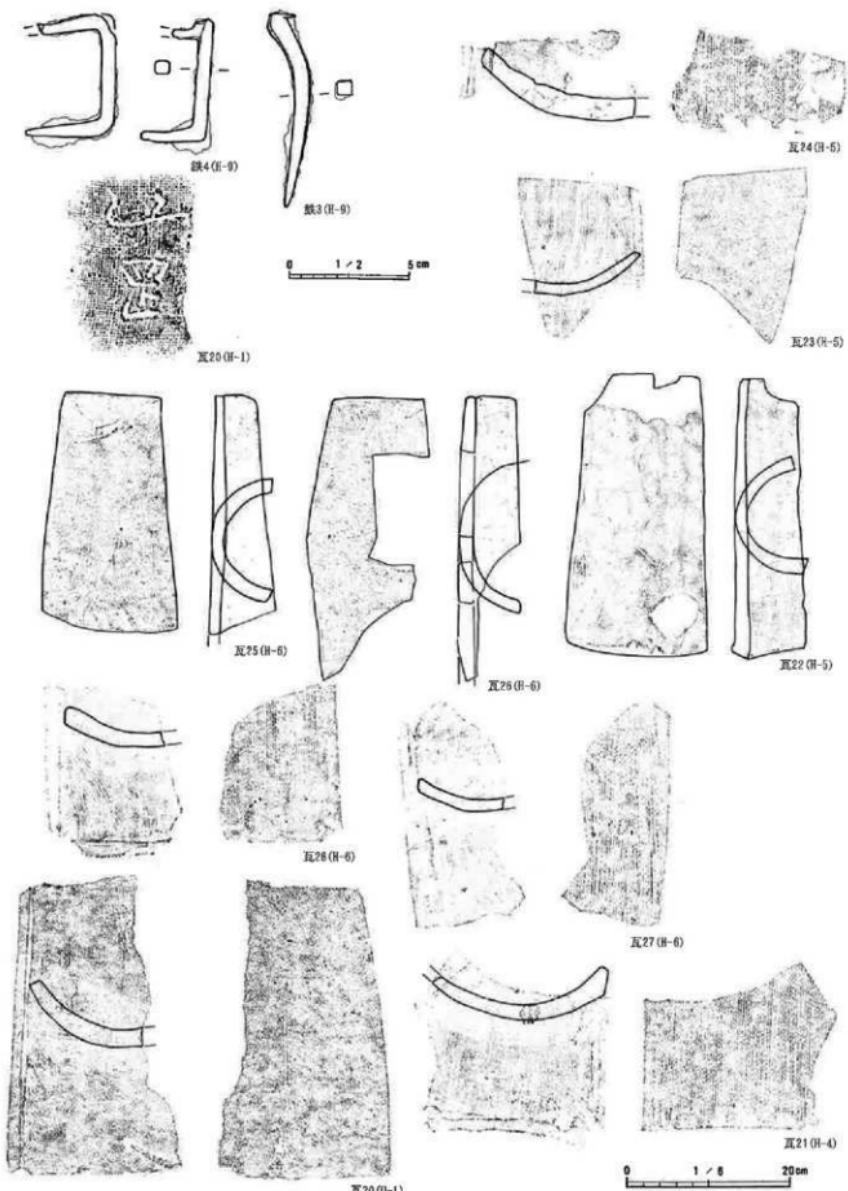


Fig. 37 鐵製品・瓦

## VI まとめ

本遺跡は、推定国府域の西側に位置する。なお、調査区が元總社蒼海遺跡群の西側及び中央の三ヶ所に分かれるので、西側よりA区・B区・C区とした。A区では竪穴住居跡37軒、溝跡16条、土坑5基、ピット2基、落ち込み1基、道路状遺構1条が検出された。またB・C区では竪穴住居跡9軒、溝跡3条、土坑5基、ピット4基、井戸跡1基が検出された。

本遺跡では古代から中世にわたる資料が得られた。この中で量的に多いのが9世紀の遺構と遺物である。ここでは、今回の調査で明らかになった遺構と遺物について概観していきたい。なお、時期区分については従来の元總社蒼海遺跡群の時期区分、Ⅰ期（～7世紀前葉：律令期以前）、Ⅱ期（7世紀後半～10世紀初頭：律令期）、Ⅲ期（10世紀前葉～：律令期以後）に従いたい。

### 1 竪穴住居について

本遺跡から検出された遺構はⅡ期が中心となり、Ⅲ期は少なく、Ⅰ期に当たる遺構は確認できなかった。

#### (1) A 区

住居跡の規模は東西辺3～4m前後、南北辺4～5mが多い。主軸方向はN-53°～88°-E以内に留まり、67°～74°に11軒、82°～88°に8軒と主軸方向にやや集中がみられたが、時期毎の違いは認められなかった。竪が検出された住居跡について、構築材に視点をあててみると粘土や川原石・凝灰岩質砂岩・瓦などが用いられている。構築材と時期との関係をみてみると、8世紀の住居跡では凝灰岩質砂岩を用い、9世紀の住居跡では凝灰岩質砂岩と共に瓦を用いていたことが目立った。この中で特徴ある竪を表に示した。

時期	遺構名	竪 の 特 微
8世紀中葉	H-1, 2	凝灰岩質砂岩を両袖に使用
	H-3	両袖と煙道の両側と先端部に凝灰岩質砂岩を用い、煙道先端部には土師器變形土器を使用
9世紀中葉	H-7	両袖に凝灰岩質砂岩、煙道の先頭部に土師器變形土器を使用
	H-25, 27	両袖に瓦を使用
9世紀後葉	II-17	凝灰岩質砂岩と共に、瓦を両袖や天井部、先端部などに多く使用
10世紀前葉	H-4, 8	凝灰岩質砂岩を両袖の構築材と支脚石に使用

凝灰岩質砂岩が構築材として用いられていた住居跡は8世紀中葉から10世紀前葉に見られ、同じような凝灰岩質砂岩の利用は染谷川対岸に位置する鳥羽遺跡や周辺の元總社蒼海遺跡群などからも多く報告されている。また元總社小見内VI遺跡A区、鳥羽遺跡O・L区などでは凝灰岩質砂岩の採掘痕が確認されている。これらのことから、この地域には凝灰岩質砂岩の供給地が多数存在し、竪の構築材に利用することが比較的容易であったことが窺え、また構築材への利用がこの地域の大きな特徴と考えられる。

瓦が構築材として使用されていた住居跡は9世紀と考えられる3軒（H-17, 25, 27）であった。特にH-17号住居の竪には多くの瓦が使用され、接合した結果一枚の瓦を6～8片に分割し使用していたことがわかった。これは瓦をどのように竪の構築材に用いるかを検証できた一例といえる。それらの瓦には「子」の鏡文字とは若干異なる押印文字や判読できない叫き目文字のある笠懸庵の平瓦などの文字瓦があった。このことから竪に使用された瓦は周辺遺跡と同様に、国分寺で廃棄された瓦の二次利用と考えられる。ただこれらの瓦がいつ頃落葉に

持ち込まれ始めたかについては、今後国分二寺の衰退などと関連させて検討していく必要がある。

なお、A区の住居跡を時期別にみると以下のような。

時期区分	7C後	8C前	8C中	8C後	9C前	9C中	9C後	10C前
住居軒数	3	3	2	1	2	11	3	2

国分二寺創建の8世紀中葉から住居軒数が減少し、9世紀中葉に増加することがこの表からわかるが、これは染谷川対岸に位置する上野国分寺・尼寺中間地域C・D区と同様な傾向となっている。明確に断定はできないが、この周辺では国分二寺創建期や国府成立時期には居住制限があったことが窺える。今後更なる調査によってこの地域周辺の居住域の実態が明らかになることを期待したい。

## (2) B・C区

B・C区で検出された住居跡は9軒と少ない。時代別にみると8世紀前葉が2軒、10世紀以降が7軒であった。住居跡の規模は東西辺3~4m前後、南北辺4~5mが多く、主軸方向はN-76°~108°-E以内に留まる。検出件数が少ないとあって、時期による規模の違いははっきりしない。竈の構築材では、出土遺物から10世紀後葉と考えられるH-5では粘土や凝灰岩質砂岩・川原石・瓦を用いていた。11世紀前葉と考えられるH-1、6では粘土や瓦を用いていた。A区と異なり8世紀後葉から9世紀の住居跡はまったく検出されなかった。推定国府中心部に近いこの辺りにも、この時期は土地利用上の規制が及んでいたものと考えられる。

出土遺物は、B区のH-6号住居跡で銅が付着した小形腰化焰焼成須恵器が出土している。これは口径9.8cm、高さ2.5cm、底径5.6cmで内面に赤褐色の銅が付着していた。内外面に直接火を受けた痕跡は認められないため、培塿的な物ではなく、溶銅を受けた取瓶的な物と考えられる。これは柏川町友成遺跡3次調査6号住居跡から出土した須恵器と同様な物かと思われる。ところで、本遺跡の東側に位置する元総社蒼海遺跡群(6)のH-19号住居跡南側付近から銀冶工房跡と思われる遺構が検出されている。また、その近くの二つの土坑からは溶解した鉄が付着した須恵器の壊の破片も検出されている。鉄は内面に付着していることから、培塿的な物として使用されていたと考えられており、銀冶工房との関連性が窺えるとされている。まだ詳しい規模等はわからないが、国府周辺域に銀冶工房と思われる施設があったことは確かで、この遺構が一般集落に伴う銀冶工房であった可能性があるとされている。本遺跡からも鉄滓がB区では合計160g、C区では120g出土している。そして銅が付着した須恵器がB区の住居跡から出土したことは、B・C区が元総社蒼海遺跡群(6)の銀冶工房跡と思われる遺構と少なからず関連があったと考えられる。今後の調査で国府周辺域の施設跡と住居跡の関連が明らかになっていくことを期待したい。

## 2 A区出土綠釉陶器について

本遺跡A区では緑釉陶器が37点出土した。これだけ多くの緑釉陶器が出土する遺跡は珍しく、周辺遺跡でもあまり例がない。これらについて群馬県埋蔵文化財調査事業団の神谷佳明氏の鑑定によれば、時期は器形の特徴や陰刻花文の施文状態から9世紀後半から10世紀前半のものが多く、種類は碗、皿、稜碗、棱皿、ボウ、高台などである。高台はいずれも付け高台で、この特徴から産地は尾張、東濃など東海地方と考えられるとのことであった。

37点の緑釉陶器の内13点は、A区南東部、東西方向に走行する大溝の北側の炭化物を多く含んだ落ち込み（以下O-1）から出土した。そのうち4点は内側と口縁部に明顯な範書きの四弁花文を主とする陰刻文様を有する

種類であった。ここでは集中して出土したO-1を中心いて本遺跡における縄文陶器の意義を考えていきたい。

まず、周辺遺跡で縄文陶器が多く出土した遺跡と本遺跡との比較を以下の表で示した。

遺跡名	出土遺構	出土 遺物	備考	時期
山王院寺	昭和36年工事 心鏡南東約 200m	水注1、椀3、皿4点の一括(密教の 鎧壇具か)	東濃産 虎渓山 1号窯式期号	9世紀前半～ 10世紀後半
国分境遺跡	B区7号住居跡 埋没土中及び溝	手付水柱の破片	猿投窯産	9世紀前半～ 10世紀後半
清里・陣場遺跡	1～4号溝	椀、皿、段皿、香炉などの破片が164点	出土量では県内 最大量を誇る	9世紀後半～ 10世紀後半
清里・長久保遺跡	1号土塙墓	輪花碗、輪花皿の完形	床面出土	10世紀前半
元總社明神遺跡IX	29トレンチ	皿、輪花様、手付瓶の底部、体部、取 手破片が21点	いずれも小片	9世紀後半～ 10世紀後半
元總社蒼海遺跡群(8) ※本遺跡	住居跡、溝及び 落ち込み状遺構	椀、皿、段椀、段皿、耳皿の破片が37 点	落ち込みから13 点出土	9世紀後半～ 10世紀前半

表に示した国分境遺跡(山王院寺に付随する集落か)や清里・陣馬遺跡(富豪層居宅か、流通拠点)、清里長久保遺跡(富豪層の墓坑)とは遺跡の立地や性格が異なるので比較は容易ではないが、本遺跡の出土量は多い方と言えよう。特に13点の縄文陶器が出土しているO-1が、どのような性格を持った遺構であったかが大変気になる点である。また、この遺構からは縄文陶器以外にも火舎香炉の破片や灰陶器など多くの遺物が出土している。これは近隣の鳥羽遺跡I区52号住居跡と似ている。この遺構では縄文陶器や土器類、火舎香炉が多数出土し、住居跡の施設化に伴い集中的な投棄が行われたのではないかと考えられている。この遺構と同様にO-1も同じような行為を受けた遺構であることも考えられる。鳥羽遺跡では連刃式鋸治炉等が見つかっており西国工房と考えられ、縄文陶器もこれらの工房に伴う曹司で使用されていた可能性が考えられている。このような類例は相模國府周辺でも見られる。相模國府城の北側に位置する平冢市林B遺跡(「平塚市史」11下別冊参考古(2)平塚市2004)の3号住居からは、O-1と同様に臉刻花文が施文された9世紀後半代の縄文陶器が大量に廃棄された状態で出土している。この遺跡はその立地から津に開むる施設が存在した可能性が指摘されている。こうした國府城周辺での大量な出土例は元總社蒼海遺跡群とも一致する例である。

縄文陶器は国衙などの役所や寺院、付属する集落遺跡を中心に出土することが多いと言われている。それも比較的まとまって出土するのは、國府近隣地域の集落が圧倒的に多い。なぜなら、國府周辺集落では、いわゆる在庁官人層など國府に密接な関係をもつ有力層が、國府や市などを介して縄文陶器を入手したと考えられているからである。では、これら縄文陶器がどのような場で用いられていたかであるが、平安京では貴族層の居宅などからの出土状況から京都産の縄文陶器は、公私の儀式・饗宴の場だけでなく、日常雜器として使用されていたことが指摘されている。しかし、地方では非日常的な使用が行われたと見られている。國府近隣地域という位置から、改めて本遺跡のO-1の場合はと考えると、國府と密接に関連を持つ有力層が縄文陶器を入手し、儀式・饗宴の場で使用した後に廃棄した場所であることが考えられる。また國府推定城から西に離れていることや国分二寺に近いことから、例えば、同司が祭祀の場で用いたものを國府近隣で廃棄した場所のように、仏教の要素を含むことも想定できる。

縄文陶器の利用については諸説があり、特にO-1についてはどのような遺構であるかはまだ検討を必要とする。しかし、本遺跡や周辺遺跡では縄文陶器がまとまって出土していることから、本地域が古代の上野国の中心地城と考えられていることを証明することは確かであろう。

今後も継続していく元総社蒼海遺跡群の発掘調査により、国府・国分寺、さらには蒼海城と周辺集落との関わりがより明らかになっていくことを期待したい。

### 〈引]用参考文献〉

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 「清原・陣場遺跡」 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1881年  
坂口一「奈良・平安時代の土器の断片」群馬県史編さん委員会編『群馬県史研究24』 1986年  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『高宗・長保遺跡』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1886年  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『鳥羽遺跡 G・II・I・区』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1886年  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『上野国分寺僧・尼寺中門地域1~8』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1886年~  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『国分寺遺跡』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990年  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『烏羽遺跡 L・M・N・O区』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990年  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団編『強劫遺跡』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991  
前橋市埋蔵文化財調査事業団編『群馬県史 通史編2 原始古代2』 群馬県 1991  
群馬県埋蔵文化財調査事業団編『鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F区』 則群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992年  
元鳥羽神館『日本の三彩と経物』 1998年  
山考古学研究所編『桃山御祭神北遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 1999年  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団編『壬生寺 寺山主光寺下道跡発掘調査報告書』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2000年  
井上久右門「東西街道にある三彩・経物陶器」月刊考古学ジャーナル475号 2001年  
高橋照彦『三彩・経物陶器と地方官衙』 月刊考古学ジャーナル475号 2001年  
高橋照彦『地方官衙出土の平安時代の経物陶器』 月刊考古学ジャーナル475号 2001年  
齊木一敏・高坂麻子編『元総社蒼海遺跡群 元総社小見内IV遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2002年  
山武考古学研究所編『元総社蒼海遺跡群 元総社小見内III遺跡・元総社小見内V遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2002年  
高橋一裕・高坂麻子編『元総社蒼海遺跡群 元総社小見内IV遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2002年  
近藤雅順・福留慎太郎編『元総社蒼海遺跡群 元総社小見内IV遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2003年  
高橋一歩・高坂麻子編『元総社蒼海遺跡群 元総社小見V遺跡・元総社小見内VI遺跡』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2003年  
能登健・梅澤克典『友成遺跡出土資料と金属考古学的調査結果』 群馬県立歴史博物館紀要 第25号 2004  
近藤雅順・池田史人編『元総社蒼海遺跡群(4)』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2006年  
大崎和久・遠藤たか美編『元総社蒼海遺跡群(6)』 則群馬県埋蔵文化財発掘調査団 2006年





A区調査区全景（上が北）



H-1号住居跡全景（西から）



H-1号住居跡カマド全景（東から）



H-1号住居跡埋設土器（上から）



H-1号住居跡全景（西から）



H-2号住居跡全景（西から）



H-2号住居跡カマド全景（西から）



H-3号住居跡全景（西から）



H-3号住居跡カマド先端部（西から）



H-3号住居跡煙道部断面（南から）



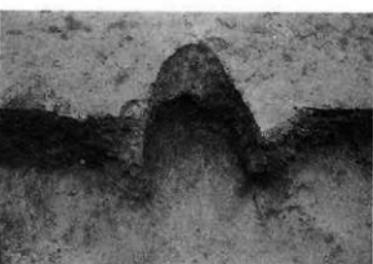
H-4号住居跡全景（西から）



H-4号住居跡カマド全景（西から）



H-6号住居跡全景（西から）



H-6号住居跡カマド全景（西から）



H-8号住居跡全景（西から）



H-8号住居跡カマド内遺物出土状況（西から）



H-9・16号住居跡全景（西から）



H-9号住居跡カマド全景（西から）



H-10号住居跡全景 (西から)



H-10号住居跡カマド立景 (西から)



H-19号住居跡全景 (西から)



H-19号住居跡カマド立景 (西から)



A区調査区中央部 (西から)



H-17号住居跡カマド北全景（北から）



H-17号住居跡カマド全景（西から）



H-17号住居跡全景（西から）



H-17号住居跡カマド正面全景（西から）



H-17号住居跡南西隅遺物出土状況（西から）



H-21・24号住居跡全貌 (南から)



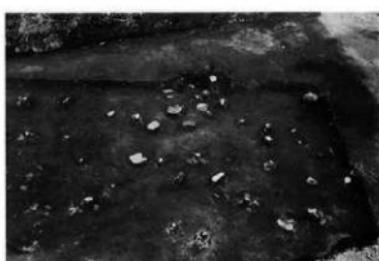
H-21号住居跡カマド全景 (南から)



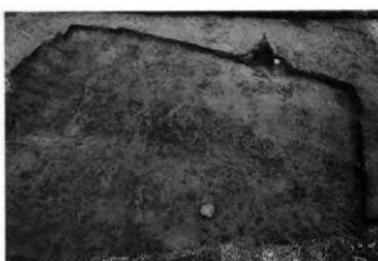
H-21号住居跡口カマド全景 (西から)



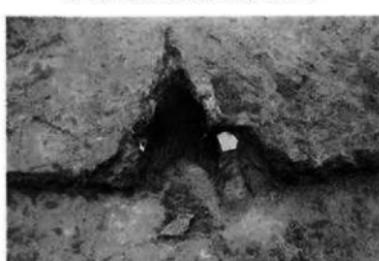
II-24号住居跡カマド全景 (西から)



II-25号住居跡遺物山上状況 (西から)



H-25号住居跡全貌 (西から)



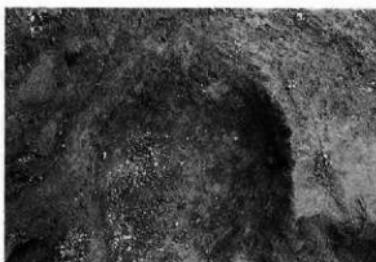
H-25号住居跡カマド全景 (西から)



H-27号住居跡遺物出土状況 (西から)



H-27号住居跡全景（西から）



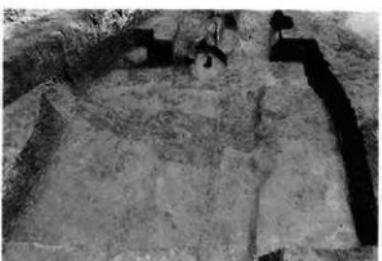
H-27号住居跡カマド全景（内から）



H-32号住居跡全景（西から）



H-32号住居跡出土物出土状況（南から）



H-33号住居跡全景（西から）



H-33号住居跡カマド全景（西から）



W-1号窯跡全景（西から）



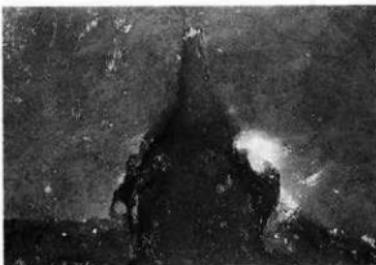
北側消集中部（南から）



B+C区調査区全景（上が北）



H-1号住居跡全景（西から）



H-1号住居跡カマド全景（西から）



H-2号住居跡全景（西から）



H-9号住居跡全景（西から）



H-3号住居跡全景（西から）



H-4号住居跡全景（西から）



H-5・6号住居跡全景（西から）



H-5号住居跡カマド全景（西から）



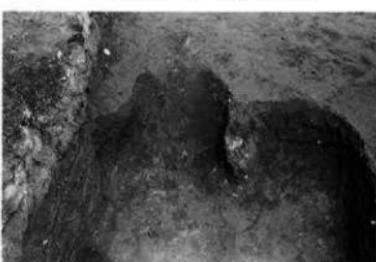
H-6号住居跡カマド全景（西から）



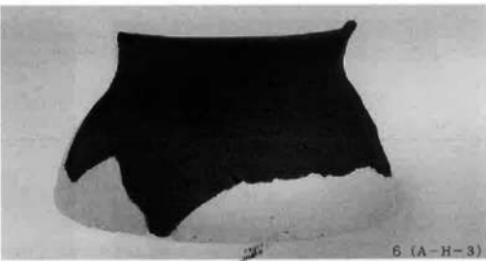
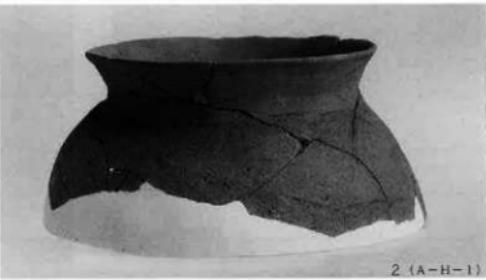
H-7号住居跡出土状況（西から）

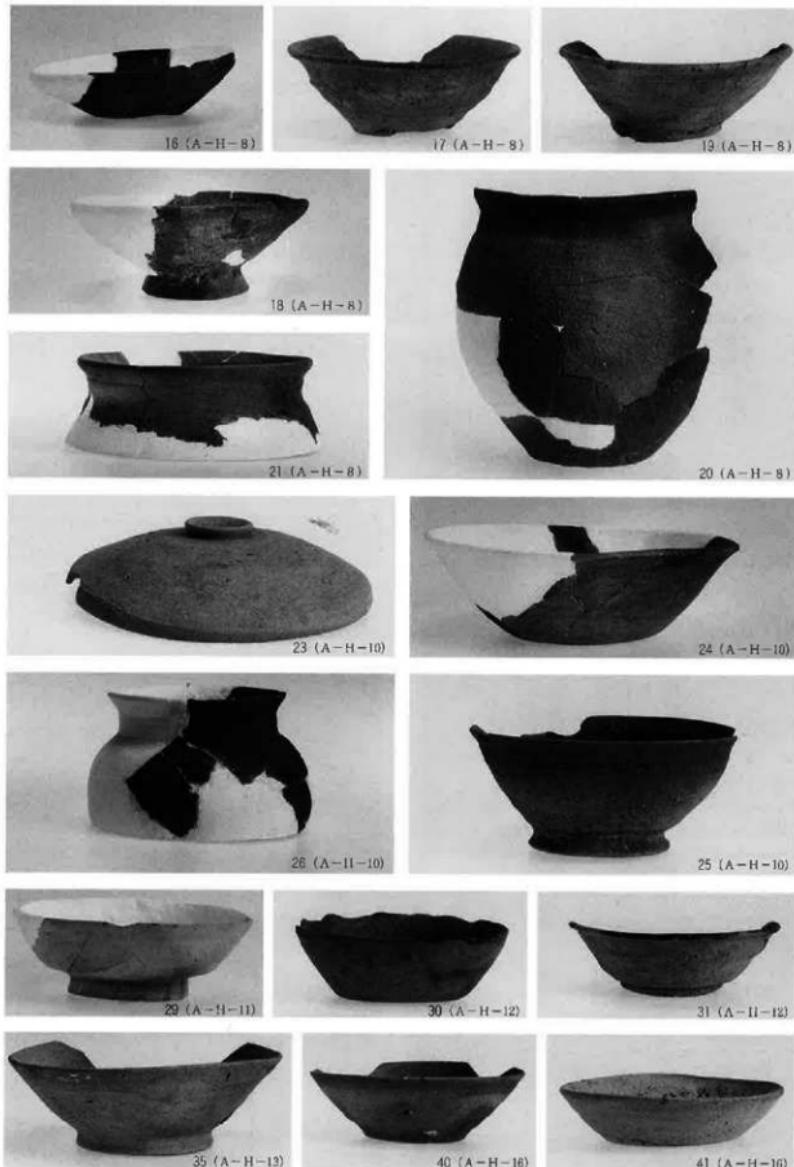


H-7号住居跡全景（西から）



H-7号住居跡カマド全景（西から）







42 (A - H - 17)



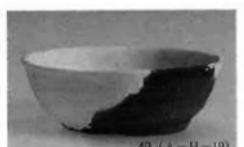
43 (A - II - 17)



45 (A - H - 17)



50 (A - H - 20)



49 (A - II - 19)



48 (A - H - 19)



59 (A - II - 24)



58 (A - H - 24)



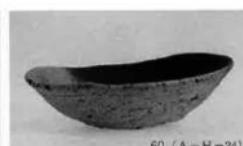
54 (A - II - 23)



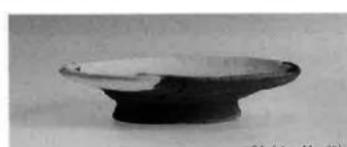
62 (A - H - 25)



63 (A - H - 25)



60 (A - H - 24)



64 (A - H - 25)



68 (A - H - 27)



66 (A - II - 27)



70 (A-II-29)



75 (A-H-32)



76 (A-H-32)



78 (A-II-32)



79 (A-H-32)



82 (A-II-32)



83 (A-II-32)



80 (A-H-32)



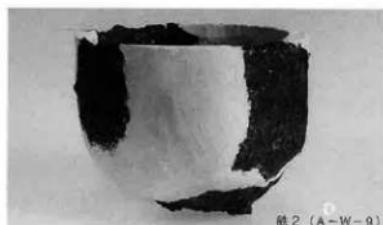
84 (A-II-33)



85 (A-H-33)



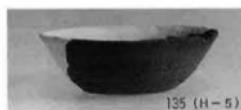
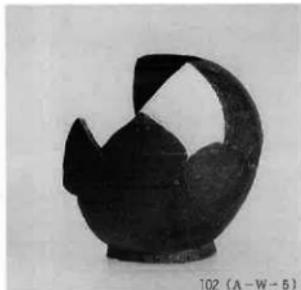
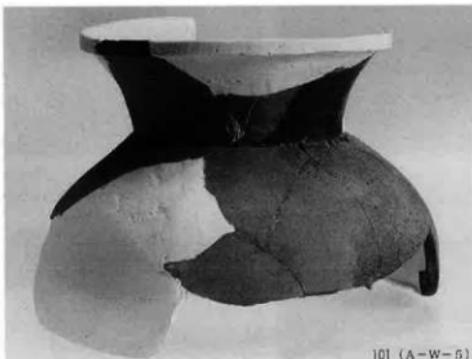
86 (A-H-35)



鉢2 (A-W-9)



57 (A-H-36)





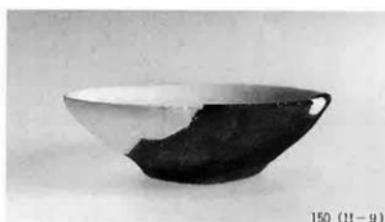
146 (H-7)



147 (H-7)



148 (H-7)



150 (II-9)

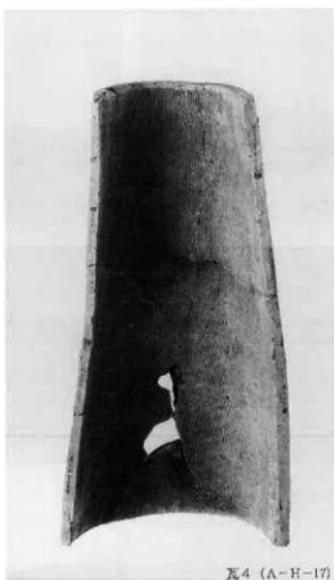


151 (D-1)



A-H-17





瓦4 (A-H-17)



瓦6 (A-H-17)

## 抄 錄

フリガナ	モトソウジャオウミイセキグン (8)
書名	元総社着海遺跡群 (8)
調査名	前橋都市計画事業元総社着海上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	近藤雅順・阿久澤真一
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査報告書
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2007年3月19日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード	位 置		調査期間	調査面積	調査原因
元総社着海遺跡群 (8)	前橋市元総社 町1784-1ほか	10201	18A130 -8	北緯 36°23'09" 東經 139°01'48"	20060515 ~ 20061012	約1,347m <sup>2</sup>	前橋都市計画 事業元総社着 海上地区画整 理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社着海遺跡群 (8)	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡2軒 竪穴住居跡44軒、溝跡8条 溝跡7条、井戸跡1基	土師器、須恵器、 土師器、須恵器、鉄製品 綠釉陶器、瓦	

### 元総社着海遺跡群 (8)

2007年3月12日 印刷  
2007年3月19日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三俣町二丁目10-2

TEL 027-231-9531

印 刷 所 朝日印刷工業株式会社

